山形県埋蔵文化財センター報告書第31集

北目長田遺跡
橇待遺跡
第2次発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-1996-584-01

1996
584
6

1996

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

蔵書
'96. 6. 25
財団法人
山形県埋蔵文化財センター
1996 ー 584

北目長田遺跡
橇待遺跡
第2次発掘調査報告書

平成8年3月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

緑釉陶器(左から201、202、203)

製塩土器(SK67T出土)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、第２次北目長田遺跡・橇待遺跡の調査成果をまとめたものです。

北目長田・橇待遺跡は山形県の北部、秋田県との境界を成す鳥海山の麓となる遊佐町に所在します。鳥海山は、その秀麗な姿で、古くから「出羽富士」と呼ばれています。鳥海山に貯えられた厳冬の雪は春とともに雪解け水となり、眼下の広大な平野部へ注ぎ込み良質の米を作る貴重な水源となっています。

この度、平成７年度県営ほ場整備事業（高瀬川地区）に伴い、工事に先立って北目長田・橇待遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、平安時代の掘立柱建物跡・土壙・溝状遺構などの遺構、遺物では土師器・須恵器・黒色土器・赤焼土器・石製品・土製品のほか、塩作りが行われたであろう製塩土器や近江産と推測される緑釉陶器などが出土しています。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成８年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター
理事長　　木　場　清　耕

例　言

1　本書は平成７年度県営ほ場整備事業（高瀬川地区）に係る「北目長田遺跡」「橇待遺跡」の第２次発掘調査報告書である。

2　調査は山形県教育委員会の委託を受けて、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　　北目長田遺跡（ＡＹＺＫＮ）　遺跡番号　平成３年度登録（山形県1991）
所 在 地　　山形県飽海郡遊佐町大字北目字長田
調査期間　　発掘調査　平成７年４月１日～平成８年３月31日
　　現地調査　平成７年５月８日～平成７年８月11日　69日間
調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
発掘調査・資料整理担当
　　調査第一課長　　佐々木洋治
　　主任調査研究員　野尻　　侃
　　調査研究員　　佐藤　善春

遺跡名　　橇待遺跡（ＡＹＺＳＭ）　　遺跡番号　平成３年度登録（山形県1991）
所 在 地　　山形県飽海郡遊佐町大字北目字橇待
調査期間　　発掘調査　平成７年４月１日～平成８年３月31日
　　現地調査　平成７年６月20日～平成７年７月19日　５日間
調査主体　　財団法人山形県埋蔵文化財センター
発掘調査・資料整理担当
　　調査第一課長　　佐々木洋治
　　主任調査研究員　野尻　　侃
　　調査研究員　　佐藤　善春

4　発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県庄内支庁経済部月光川土地改良事務所月光川土地改良区、遊佐町教育委員会など関係諸機関の協力を得た。

5　本書の作成・執筆は、野尻　侃・佐藤善春が担当した。執筆にあたり、施釉陶器については愛知県陶磁資料館の浅野員由主任学芸員、製塩土器については石川県中島町教育委員会の室田久則生涯学習課長・高田則晃生涯学習課主事・山本純也生涯学習課主事補に御教示いただいた。記して感謝申し上げる。編集は尾形與典が担当し、全体について佐々木洋治が監修した。

6　委託業務は下記の通りである。

北目長田遺跡　遺構の写真測量・実測　　㈱日本テクニカルセンター
　　資料の理化学分析（土器胎土分析）　　パリノ・サーヴェイ株式会社

7　出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

ＳＢ…建物跡　　ＳＫ…土壙　　ＳＤ…溝跡・溝状遺構　　ＥＰ…柱穴・ピット

ＥＢ…柱跡　　ＳＸ…性格不明遺構　　Ｒ…遺物　　ＲＰ…登録土器・土製品

ＲＭ…登録金属製品　　ＲＱ…登録石製品　　Ｓ…石

2　遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。また、遺構番号のあとに「Ｔ」とあるものは、排水路設置地区から検出された遺構で、面調査区検出遺構と区別するために付したものである。

3　報告書執筆基準は下記の通りである。

（1）遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。

（2）グリッドの南北軸は、平成６年度実施した本遺跡第一次調査で設定したグリッドを踏襲した。グリッドは、ほ場整備計画線の農道センターラインを東西軸線とした。

（3）遺構実測図は、１/40～１/200他の縮図で採録し、各々スケールを付した。

（4）遺物実測図・拓影図は、原則的に１/４を基準として採録し、各々スケールを付した。また、大型の土器については１/６とし、付記している。なお、実測図中のスクリーントーン（網点）は黒色処理を、黒ベタは須恵器を表している。

（5）遺物観察表中の計測値欄は現存値を示す。出土地点欄の層位では、「Ｆ」は遺構覆土内出土、「Ｙ」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「Ⅰ～Ⅳ」等は遺構を覆う土層（基本層序）を表している。

（6）遺物図版については、１/３を基準とするが、一部に任意のものがある。

（7）遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。

目　次

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過……1

2　調査の方法と経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境……3

2　歴史的環境……3

Ⅲ　北目長田遺跡

1　調査の概要……5

2　遺跡の層序……5

3　遺構と遺物の分布……9

4　検出遺構

(1)掘立柱建物跡……9

(2)土壙……12

(3)溝状遺構……17

(4)性格不明遺構……21

5　出土遺物……25

6　まとめ……43

Ⅳ　橇待遺跡

1　調査の概要……51

2　検出された遺構と遺物……52

3　まとめ……52

Ⅴ　総括……53

報告書抄録……58

表

表１　北目長田遺跡遺構観察表(1)　土壙 …23

表２　北目長田遺跡遺構観察表(2)　溝跡 …24

表３　北目長田遺跡遺物観察表(1) ……27

表４　北目長田遺跡遺物観察表(2) ……33

表５　北目長田遺跡遺物観察表(3) …39

表６　北目長田遺跡遺物観察表(4) …46

表７　北目長田遺跡遺物観察表(5) …47

挿　図

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　遺跡概要図 …… 4
第３図　北目長田遺跡層序図 …… 5
第４図　北目長田遺跡調査概要図 …… 6
第５図　北目長田遺跡遺構配置図 …… 7
第６図　SB１建物跡実測図 ……10
第７図　SB２建物跡実測図……11
第８図　SK399・340・400土壙実測図 ……13
第９図　SK337・321・455他土壙実測図 …15
第10図　SK350・293・341他土壙実測図 …16
第11図　SK67T・99T・75T土壙実測図 …18
第12図　溝状遺構実測図 ……19
第13図　SD408・771・387他溝跡実測図 …20
第14図　SD336・404・927他溝跡実測図 …22
第15図　遺物実測図(1)土師器・黒色土器 ……26
第16図　遺物実測図(2)須恵器蓋・須恵器坏 ……30
第17図　遺物実測図(3)須恵器坏・須恵器皿 ……31
第18図　遺物実測図(4)須恵器壺・須恵器甕 ……32
第19図　遺物実測図(5)須恵器甕……34
第20図　遺物実測図(6)赤焼土器坏 ……36
第21図　遺物実測図(7)赤焼土器坏 ……37
第22図　遺物実測図(8)赤焼土器坏 ……38
第23図　遺物実測図(9)赤焼土器甕・赤焼土器鍋…41
第24図　遺物実測図(10)赤焼土器小型甕・赤焼土器甕　42
第25図　遺物実測図(11)緑釉陶器・製塩土器他 ……44
第26図　遺物実測図(12)石製品 ……45
第27図　墨書集成 ……48
第28図　土器組成図(1) ……49
第29図　土器組成図(2) ……50
第30図　橇待遺跡調査概要図 ……51
第31図　橇待遺跡遺物実測図 ……52
第32図　庄内地方製塩土器出土遺跡・製塩土器実測図 …55

図　版

巻頭図版１　緑釉陶器（上）・製塩土器（下）
図版１　北目長田遺跡近景・調査区全景
図版２　調査風景・北目長田遺跡基本層序
図版３　トレンチ遺構検出状況・SBI・SB2掘立柱建物跡
図版４　SK399・337・340土壙
図版５　SK321・455・314・311・350土壙
図版６　4トレンチ(SK67T他)遺構検出状況・土層断面・完掘状況
図版７　SD387・927・562・708・408・464他溝跡
図版８　北目長田遺跡遺物出土状況
図版９　北目長田遺跡出土遺物(1)
図版10　北目長田遺跡出土遺物(2)
図版11　北目長田遺跡出土遺物(3)
図版12　北目長田遺跡出土遺物(4)
図版13　北目長田遺跡出土遺物(5)
図版14　北目長田遺跡出土遺物(6)
図版15　北目長田遺跡出土遺物(7)
図版16　北目長田遺跡出土遺物(8)
図版17　北目長田遺跡出土遺物(9)
図版18　北目長田遺跡出土遺物(10)
図版19　北目長田遺跡出土遺物(12)
図版20　北目長田遺跡出土遺物(13)
図版21　北目長田遺跡出土遺物(14)
図版22　北目長田遺跡出土遺物(4)
図版23　北目長田遺跡出土遺物(15)
図版24　橇待遺跡調査風景・出土遺物

Ⅰ　調査の経緯

１　調査に至る経過

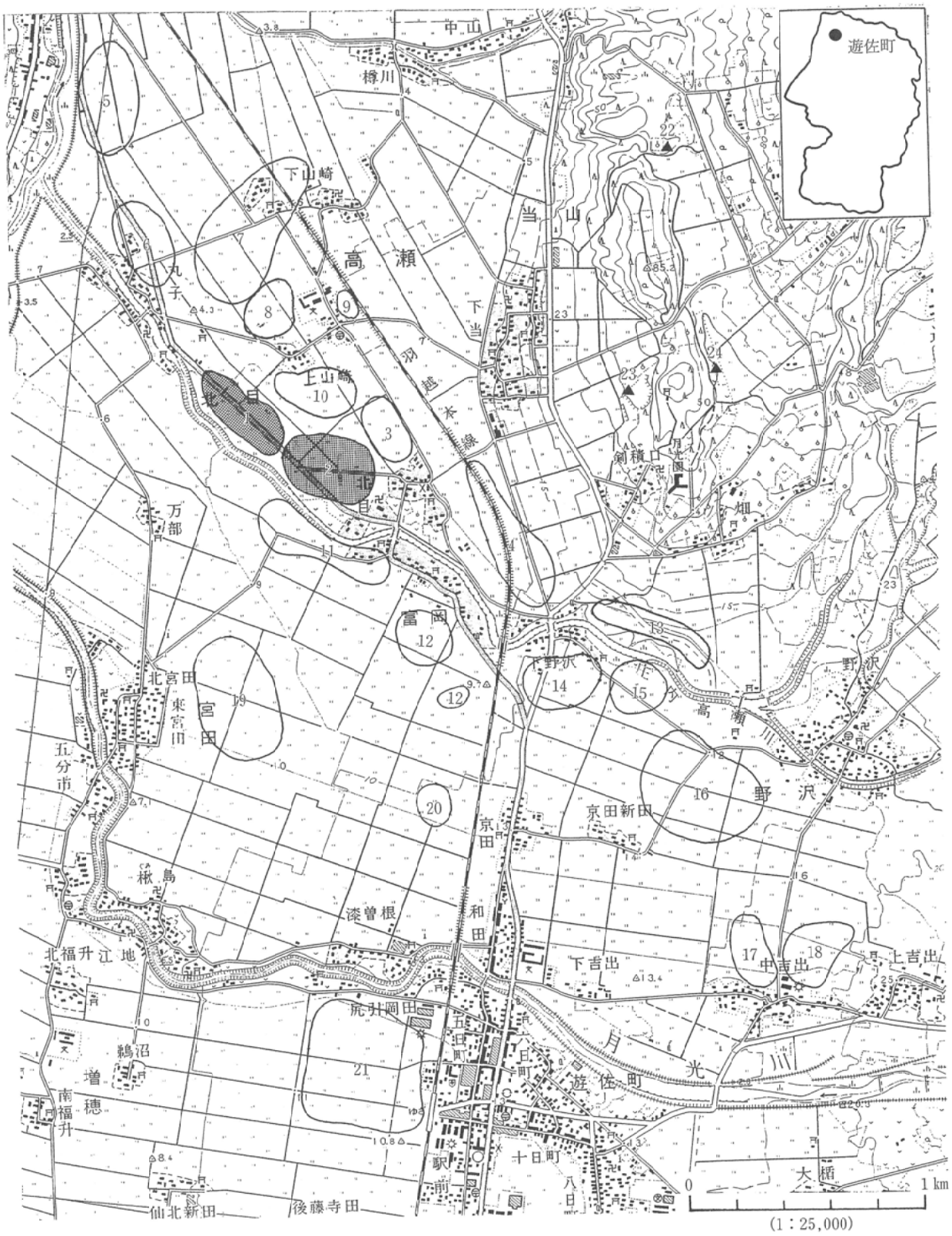
遊佐町北西部に位置する富岡から北目・山崎集落などの高瀬地区一帯には、庄内高瀬川や月光川の流れに沿って数多くの平安時代を主とする遺跡が点在している。これらの遺跡の立地基盤は、上記河川が形成した微高地（自然堤防）と理解できる。当時の集落は、今日まで辛うじて地中にその痕跡を止めてきたが、県営ほ場整備事業等の大規模な開発の波を受けるようになった。そこで、県教育委員会では、昭和54年度から遺跡詳細分布調査を継続的に実施し、遺物の分布や遺存状況、範囲等が明らかになってきた。北目長田・橇待の両遺跡は、平成２年度のＡ調査（現地確認調査・表面踏査）によって遺物の分布が確認され、遺跡台帳に新規登録された遺跡である。その後、平成３年度と平成４年度に行われたＢ調査（試掘調査）によって、北目長田遺跡は東西560m・南北210m、橇待遺跡は東西460m・南北280mの範囲に広がる平安時代の集落跡であることが確認された。

平成６年度、県営ほ場整備事業（高瀬川地区）が、この２つの遺跡範囲に係ることになり、現状保存を前提とした事前の調整が行われた。しかし、止むを得ず削平されると判断された部分（北目長田遺跡3,300m²、橇待遺跡1,000m²）については、山形県埋蔵文化財センターが主体となって、平成６年度に緊急発掘調査を実施している。（『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』第24集）。平成７年度にも、引き続き同事業との関連で止むを得ず削平されると判断された北目長田遺跡域の7,920m²及び橇待遺跡域の1,500m²について、第２次緊急発掘調査を実施する運びとなったのである。

２　調査の方法と経過

平成７年４月20日、月光川土地改良事務所管内に係わる遺跡発掘調査の打ち合せ会を開催して最終協議を行い、同年５月８日より現地調査を開始した。北目長田遺跡の面的削平計画区域の表土除去作業から開始し、面整理作業を継続しながら、前年度実施した本遺跡のグリッド基準線を基本に調査区を設定した。北目長田遺跡の排水路計画部分、橇待遺跡の排水路計画部分という順序で調査の範囲を広げ、調査区から始まるトレンチを５m単位で区切り、遺構・遺物の登録を行った。以下に、その実施状況を列記しておく。

平成７年５月８日、調査事務所を設置。５月10日、北目長田遺跡調査区の削平計画区域面的部分の表土除去作業に入る。以後、遺構検出に向けての面整理を継続。多量の遺物と土壙・溝状遺構等の遺構を確認する。６月13日からは排水路計画部分（１Ｔ～７Ｔ、14Ｔ～15Ｔ）の表土除去を行い、遺構・遺物の密集域が明らかになる。６月29日より、検出した遺構の精査・記録作業を開始。雨天が続き排水作業に追われることもあったが、８月11日に予定どおりすべての調査を終了した。橇待遺跡調査区（８Ｔ～13Ｔ）については、６月20日より表土除去作業に入ったが、遺構・遺物は希薄で、７月19日で調査を終了した。なお、調査期間中（８月４日）に、調査成果を公表するための調査説明会を開催したところ、雨天にもかかわらず約90名の参加が得られたことを付記しておく。



1．北目長田遺跡(1994・1995)　2．機待遺跡(1994・1995)　3．堂田遺跡(1994)　4．宮ノ下遺跡(1995)　5．筋田遺跡(1992)
6．野瀬遺跡　7．中田浦遺跡(1992)　8．上山崎遺跡　9．田中遺跡　10．地蔵田遺跡　11．木戸下遺跡(1994)　12．上高田遺跡(1994)
13．道中A・B遺跡　14．石田遺跡(1992) 15．宅田遺跡(1982)　16．大坪遺跡(1990・1994)　17．三田遺跡　18．袋鈴遺跡(1991)
19．木原遺跡(1992・1993)　20．古屋敷遺跡　21．小深田遺跡(1988)　22．サナミ坂窯跡　23．剣竜神社西窯跡　24．剣竜神社東窯跡
※(　)数字は発掘調査年

第Ⅰ図　遺跡位置図(国土地理院発行２万５千分の１地形図「吹浦」を使用)

1．北目長田遺跡(1994・1995)　2．橇待遺跡(1994・1995)　3．堂田遺跡(1994)　4．宮ノ下遺跡(1995)　5．筋田遺跡(1992)
6．野瀬遺跡　7．中田浦遺跡(1992)　8．上山崎遺跡　9．田中遺跡　10．地蔵田遺跡　11．木戸下遺跡(1994)　12．上高田遺跡(1994)
13．道中A・B遺跡　14．石田遺跡(1992) 15．宅田遺跡(1982)　16．大坪遺跡(1990・1994)　17．三田遺跡　18．袋鈴遺跡(1991)
19．木原遺跡(1992・1993)　20．古屋敷遺跡　21．小深田遺跡(1988)　22．サナミ坂窯跡　23．剣竜神社西窯跡　24．剣竜神社東窯跡
※(　)数字は発掘調査年

第Ⅰ図　遺跡位置図(国土地理院発行２万５千分の１地形図「吹浦」を使用)

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

北目長田遺跡と、それに隣接する橇待遺跡は、飽海郡遊佐町の中心部から北西方向に約３㎞の国道345線沿いに位置している。庄内平野の北端にあたり、北から北東方にかけて鳥海山の雄姿と緩やかに連なる稜線を見渡すことができる。西方へ約３㎞で日本海に達するが、その手前には季節風を遮る庄内砂丘が迫っている。一帯は水田で、北西方に丸子、北方に上山崎、南方に北目の各集落がある。遺跡の範囲は、第２図で示すように、両遺跡とも東西約500m・南北250m前後で、標高は、北目長田遺跡調査区付近で5.8mを測る。

この周辺には、北目長田遺跡・橇待遺跡をはじめ、庄内高瀬川に沿って並ぶ形で、平安時代を中心とする遺跡が数多く点在している。これらの遺跡が立地する一帯は、庄内高瀬川や月光川など北西に流下して日本海に注ぐ中小の河川が形成した沖積平野である。現在は、水田耕作他の影響からだいぶ平坦化されているが、かつては自然堤防による微高地や葦や茅の生い茂る後背湿地が、流路に沿ってより明確な形で存在していたものと推察される。当時の人々は、比較的高燥な自然堤防上を居住空間に、低湿な後背湿地や小河川のそばは水田にと、自然地形をうまく利用しながら低地での居住域を拡大していったと捉えることができるだろう。また、平成６年度に発掘調査を実施した大坪遺跡や上高田遺跡で検出された幅15～20mの河川跡は、長い年月にわたって繰り返された河川の氾濫によって、流路や地形が変化してきたことを物語っている。

2　歴史的環境

遊佐町管内では、これまでに170箇所以上の遺跡が確認されており、県内でも有数の遺跡密集地である。この中で、北目長田・橇待遺跡を含めた平安時代を主とする集落跡については、20を越える遺跡が発掘調査されている。高瀬川沿いに限っても、北目長田・橇待遺跡の他に筋田遺跡、野瀬遺跡、中田浦遺跡、上高田遺跡、木戸下遺跡、宮ノ下遺跡、石田遺跡、宅田遺跡、大坪遺跡等が連続して分布しており、注目に値する（第１図)。

これまでの調査の結果、これらの遺跡のほとんどは９世紀から10世紀にかけて継続していることが確認されている。これは、酒田市や八幡町等も含めた飽海郡域の遺跡に共通する在り方である。つまり、９世紀に入って、この地域の様相が一変したことになる。これは、当時の律令政府が推し進めた古代東北の開拓と係わっていると推定される。712年の「出羽国」建国以降、国府や城柵の設置・移転によって、この地域に対する政府の支配が拡大または縮小していく。これらの集落はその過程の中で存在したのである。特に、本遺跡より南方約８㎞に位置する「城輪柵跡」は、出羽国井口の国府に比定され、周辺集落と密接な関係を保っていたと考えられる。遊佐町の遺跡のなかでも、緑釉・灰釉陶器と地鎮のための特殊埋設遺構を検出した下長橋遺跡、板材列を伴う掘立柱建物跡の小深田遺跡、灰釉陶器・墨書土器のまとまりと京への貢進を示す木簡出土の大坪遺跡等、官衙関連の性格を推定できる内容を持っている。

第２図　遺跡概要図(S=1：5,000)

III　北目長田遺跡

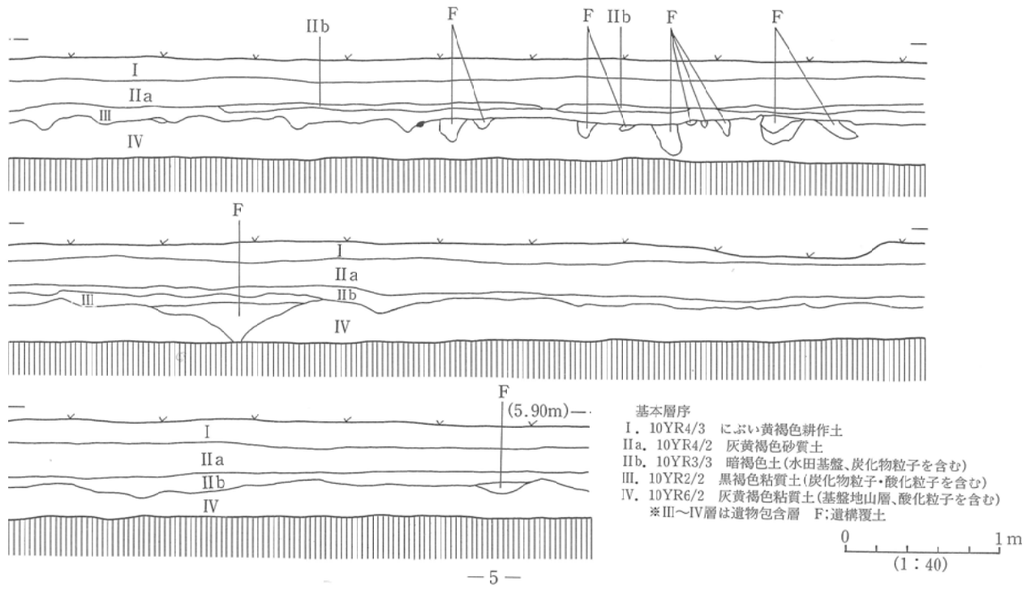
1　調査の概要

今回の調査は、北目長田遺跡域の南西部分4,700m²と排水路計画部分3,220m²を調査対象区として実施したものある。平成６年度は遺跡域の北東部分を調査しており、今年度は第２次調査となる（第４図)。調査区の設定から始めて、表土の除去、面整理･面精査、遺構検出他一連の手順で進めたが、以下に、各作業の工程と経過を略記しておく。

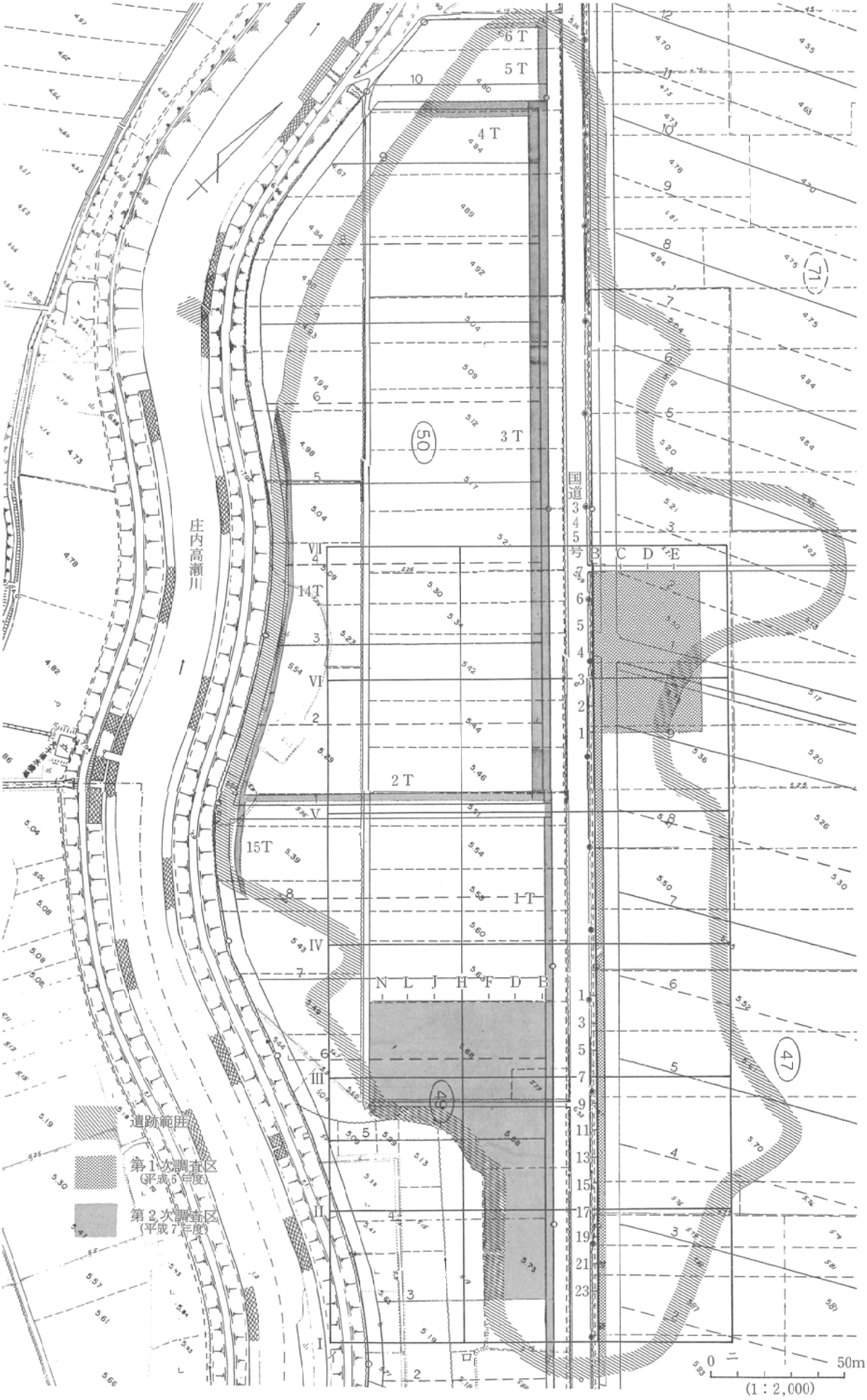
平成７年５月８日、発掘器材の搬入と現場事務所の設置を行った。翌５月９日に調査区（大区画）を設定し、５月10日から５月23日まで８日間にわたり、重機を導入して面的部分の表土除去作業を実施した。５月24日には、調査区内に５m四方の小区画を設定した。その後遺構検出に向けての面整理及び面精査を継続し、６月28日で大方の遺構の検出を終了した。排水路計画部分については、６月13日から６月20日まで５日間で重機による表土除去作業を行い、面的部分と並行して面整理・面精査を行った。検出した遺構については、遺構配置図(1:50)を作成し、６月29日からは遺構の登録と精査を開始した。遺跡の性格や内容を示すと考える遺構については、平面図・断面図（1:10,1:20）の作成及び写真撮影を行った。また、出土した遺物についても、遺構の時期を示すものについては登録して、出土地点・レベル等の記録と写真撮影を行っている。調査の最終段階として、８月４日に調査説明会、８月９日に空撮による測量を行い、８月11日に調査を終了した。

2　遺跡の層序

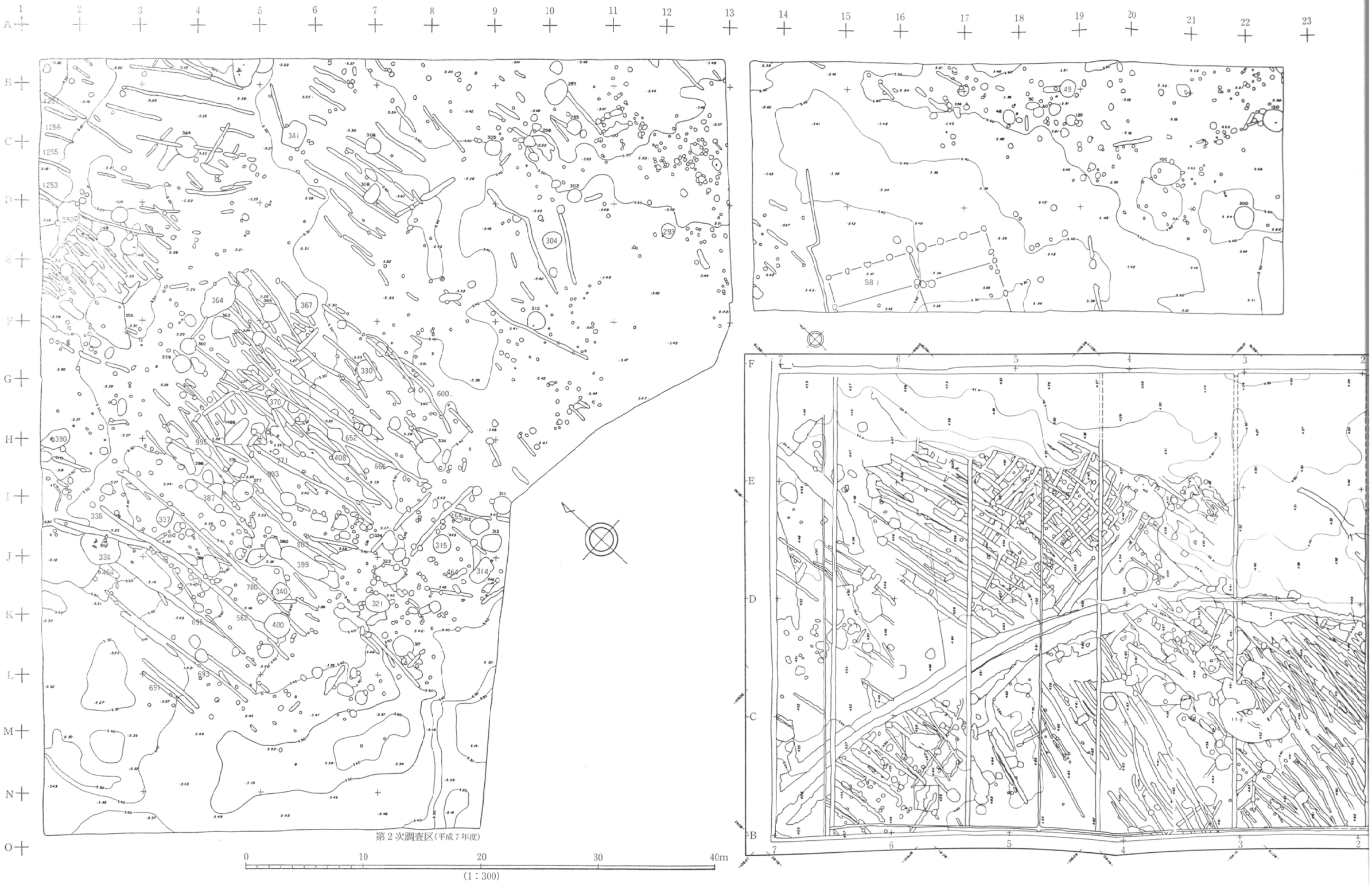
第３図は、調査区西側（A－１～４グリッド付近）の土層断面を示している。Ⅰ～Ⅱ層は第１次調査のⅠ層に相当し、耕作土及び水田基盤層である。Ⅲ層は、第１次調査のⅡ層に相当し、黒褐色粘質土で炭化物粒子を含んでいる。第１次調査同様、Ⅲ層目からは多量の遺物の包含が認められた。遺構検出面はⅣ層の上面で、断面では遺構覆土Ｆが Ⅳ層に入り込む形になっている。地表面から遺構検出面までの深さは40～50cmである。



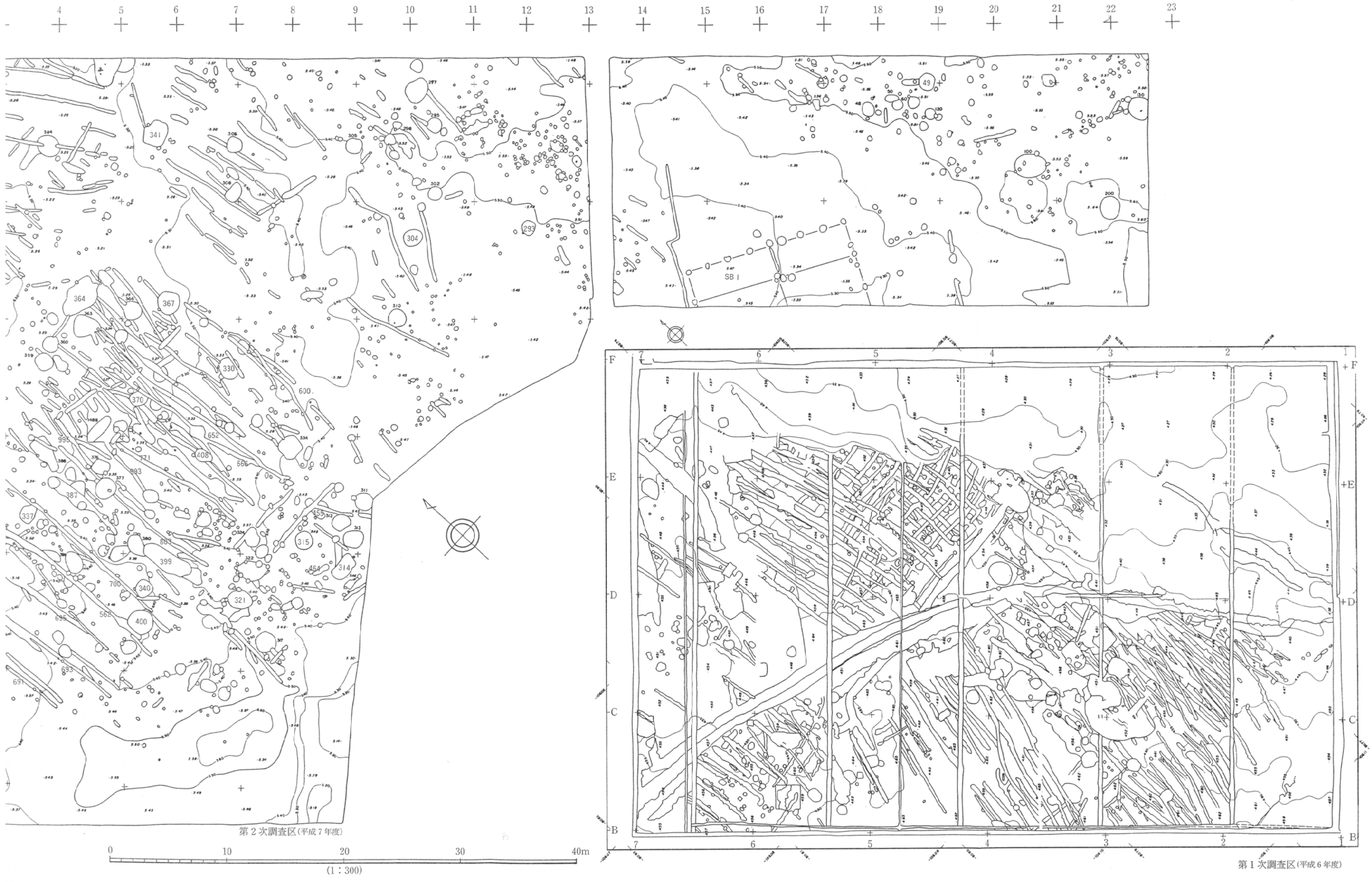
第３図　北目長田遺跡層序図(A-１～４グリッド)



第4図　北目長田遺跡調査概要図(S=1：2,000)



第５図　北目



第 5 図　北目長田遺跡遺構配置図(S=1：300)

3　遺構と遺物の分布

検出遺構の配置状況は、第５図に示した通りである。建物跡は、掘立柱建物跡が調査区で１棟（ＳＢ１：第６図）、３トレンチで１棟（ＳＢ２：第７図）検出された。最も多く検出されたのは、調査区西側を中心に広がっている396条の溝状の遺構群で、第１次調査区（第５図右下）と類似した配置状況を示している。大部分の溝跡は、ほぼ南北方向に配置され、方向や規模の違いから３時期の変遷が認められた。第１次調査区では、建物跡から溝跡群への変遷も確認されたが、本調査区では認められなかった。これらの溝跡の中には、ＳＤ336（第13図）やＳＤ387（第14図）のように須恵器甕他の遺物がまとまって出土した溝跡もある。次いで、溝跡群に隣接または重複する位置に土壙が多数検出され、登録数は184基に上った。平面形態が長軸２m前後の楕円形や隅丸方形を呈し、深さ20～30cm程度の規模を有する土壙が中心である。土壙内には、赤焼土器坏や小型甕を主とした土器類を含んでいる場合が多い。

遺物は、遺物包含層（Ⅲ層）からコンテナ75箱分、遺構内から40箱分出土した。遺構内遺物の75％以上は赤焼土器で、須恵器は15％程度である。器種別では、須恵器・赤焼土器とも坏が80％以上を占める。また、製塩土器がまとまって出土しており、破片集計で759点を数える。遺跡北西端部の４トレンチＳＫ67Ｔからは129点の製塩土器片が一括出土している。このような出土状況は、第１次調査区でもみられ、本遺跡の特徴のひとつといえる。他に、ＳＫ399土壙からは、緑釉陶器皿も出土している。

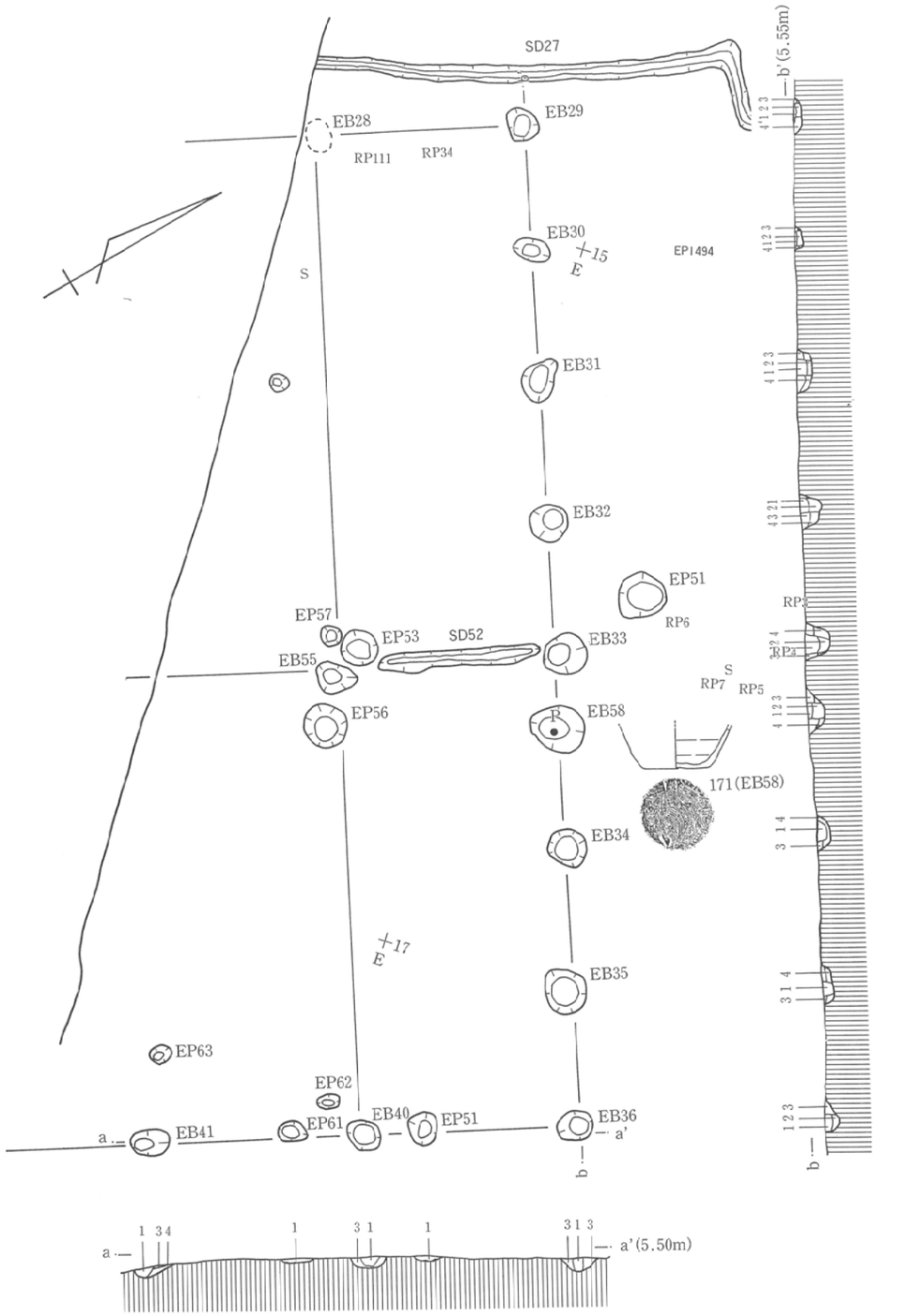
4　検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、掘立柱建物跡２棟、土壙184基、溝状遺構396条、ピット約1,000基、性格不明遺構６基などで、登録した遺構の総数は1,600を越える。そのうち約1,500は、削平計画区域に係る調査区で検出された遺構である。トレンチでは、主な遺構のみの登録となったが、ＳＢ２建物跡を検出した３Ｔ－１～４（第７図）と製塩土器出土のＳＫ67Ｔを含む４Ｔ－６～７（第11図）他、調査区西方２Ｔ－14付近、３Ｔ－23～26、３Ｔ－42～47、遺跡北端部５Ｔ－２～６で遺構の密集域が確認された。

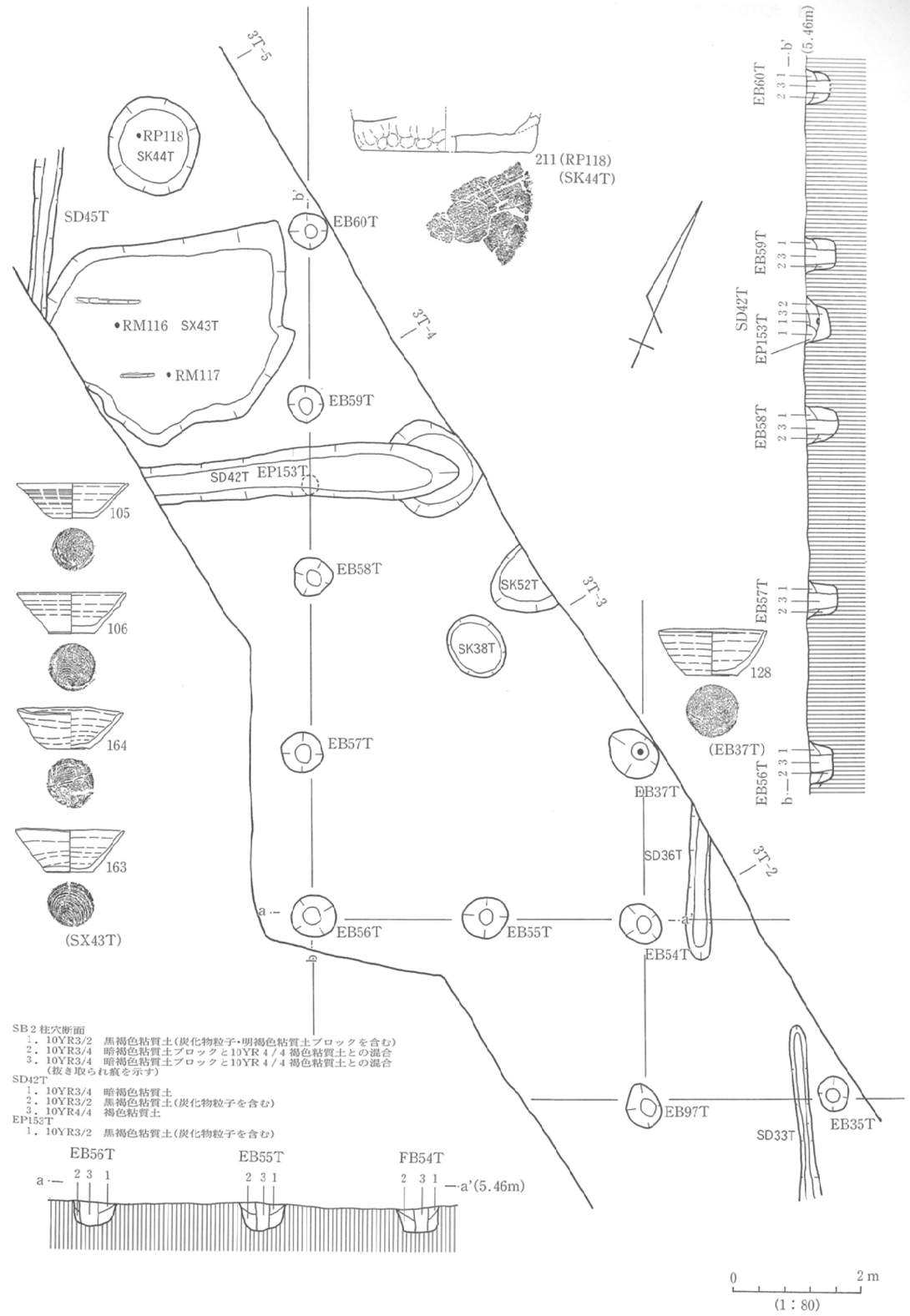
１）掘立柱建物跡

ＳＢ１建物跡（第６図）　Ｄ～Ｆ－14～17グリッドに位置し、梁行三間以上・桁行七間の東西棟である。柱間は、梁行で10尺、桁行で６尺等間と捉えられ、113.4㎡（35坪）以上の規模を有する。ＥＢ33とＥＢ55を結ぶ線上には間仕切りがあったものと考えられる。掘り方は径40～60cm、検出面からの深さ15～20cmを各測る。遺物は、ＥＢ58の底面より出土した赤焼土器坏（171）他、ＳＢ１の柱穴全体で50点余りの土器片が出土した。ほとんどは赤焼土器片である。建物の主軸方位は、Ｎ－62°－Ｗである。

ＳＢ２建物跡（第７図）　３トレンチの３Ｔ－１～４グリッドに位置する。国道345号を挟んで北方向が第一次調査区となる（第４図参照）。梁行三間以上・桁行四間以上の南北棟で、南側に廂をもつことが確認されたが、北半が調査区外に係るため全形は明らかでない。柱間は、梁行・桁行とも９尺等間を測る。掘り方は、径約60～80cmの隅丸方形を呈し、柱



第６図　SB１掘立柱建物跡



第７図　SB２掘立柱建物跡

穴の中には柱根を立てたと考えられるアタリが径20～30cmに確認できる。検出面からの深さは40～50cmを測る。柱間を含めて全体に規模の大きい建物と考えられる。105点を数える遺物の大半は赤焼土器片であるが、ＥＢ37Ｔ出土の赤焼土器坏（128）は、建物跡の時期決定に係わる資料となる。建物の主軸方向は、Ｎ－12°－Ｗである。

２）土壙

検出された184基の土壙のうち、まとまった遺物を出土した土壙の多くは、溝状遺構の密集域（Ｆ～Ｋグリッド）に分布している。また、主な土壙については、その形態や規模等の特徴（表１参照）から次のように類型化できる。

Ａ類：平面形態が円形または隅丸方形を呈し、長軸１～1.5mの規模を有する土壙。ＳＫ49・180・293等、調査区東側Ａ～Ｄグリッドの土壙に該当するものが多い。

Ｂ類：平面形態が隅丸方形で、長軸が1.6～1.9mの規模を有し、まとまった遺物が出土した土壙。ＳＫ337・340・370等の溝状遺構密集域（Ｆ～Ｋグリッド）に分布する土壙及びＳＫ44Ｔ・67Ｔのトレンチで検出された２つの土壙が該当する。

Ｃ類：形態は一様ではないが、長軸が２～2.5m内外の比較的大型の土壙。溝状遺構群の南側に位置するＳＫ314・321・455や４トレンチのＳＫ75Ｔ等が該当する。

Ｄ類：長軸が５m内外を測る長楕円形の大型土壙。ＳＫ350・399の２例が該当する。

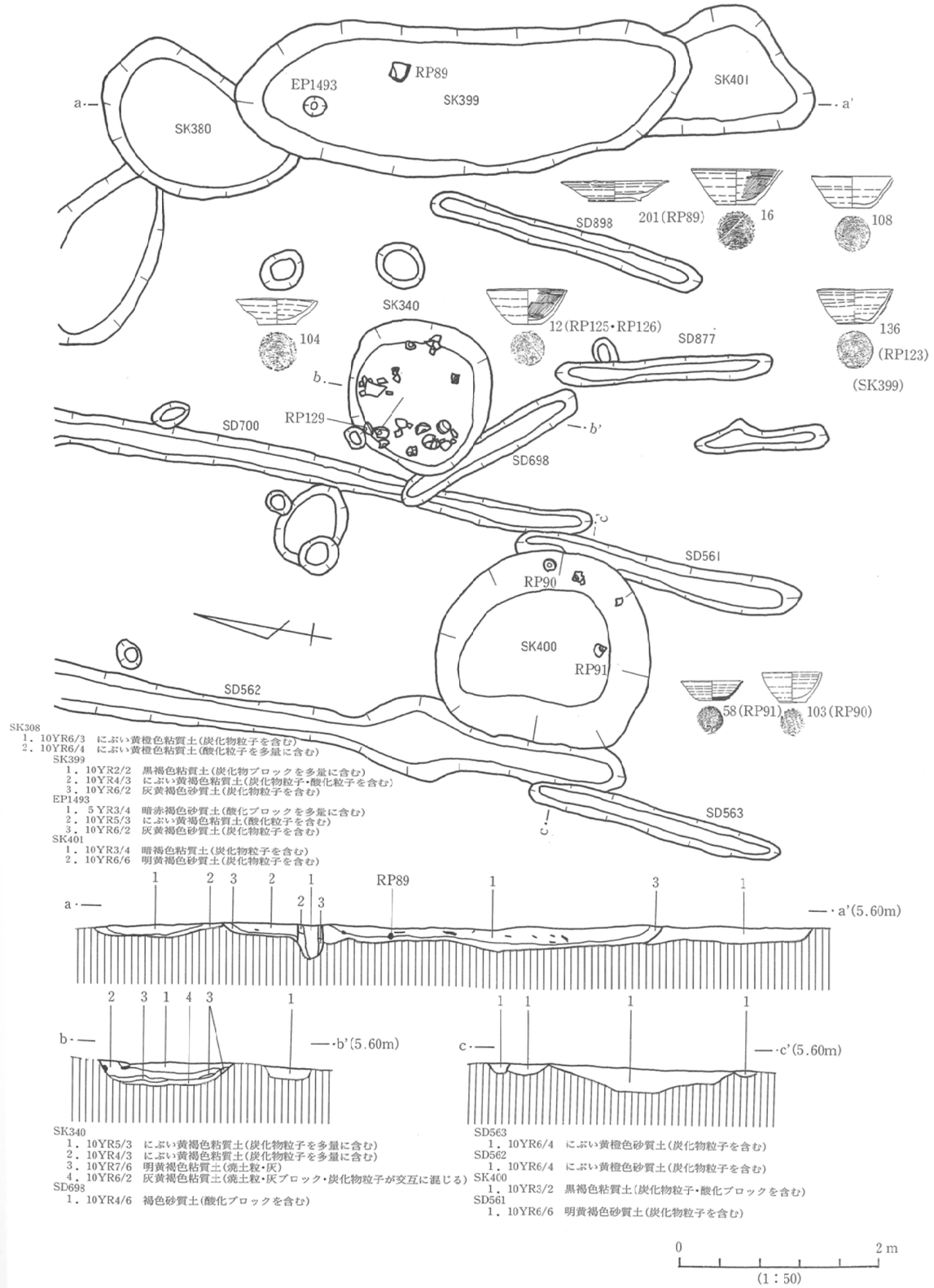
以下、代表的な土壙について挿図に従って概述する。

ＳＫ399（第８図）　Ｉ～Ｊ－５グリッドに位置し、ＳＫ380とＳＫ401を切る重複関係を持つ。平面は長楕円形で、長軸4.5m・短軸1.5m、深さ20cmの規模を有する大型の土壙である。覆土は３層からなり、Ｆ１層は炭化物ブロックを多量に含む。Ｆ１層と土壙底面より近江産と推測される緑釉陶器が２点（201、202、巻頭図版上）出土しており、注目に値する。他に、赤焼土器坏・甕、須恵器坏・蓋、黒色土器坏、製塩土器、砥石と多様の遺物が出土している土壙である。

ＳＫ340（第８図）　Ｊ－５グリッド、ＳＫ399の西方３mに位置する。ＳＤ700に近接し、ＳＤ698を切る。平面は隅丸方形で、長軸1.6m・短軸1.5m、深さ24cmの規模を有するＢ類の土壙である。覆土は４層からなり、Ｆ１・Ｆ２層は炭化物粒子を多量に含む。Ｆ３層は焼土粒・灰で構成され、Ｆ４層にも焼土粒・灰ブロックが混入する。出土した遺物には、黒色土器坏（12）、赤焼土器坏（104、122、136）があるが、いずれもＦ１・Ｆ２層からの出土である。赤焼土器坏（136）には内外面に漆が付着しており、掻出痕が認められた。

ＳＫ400（第８図）　Ｋ－５グリッド、ＳＫ340の南西2.5mに位置する。ＳＤ561とＳＤ562を切る重複関係を持つ。平面は円形で、長軸2.51m・短軸1.92m、深さ25cmを測り、Ｃ類に属する。覆土は、黒褐色粘質土の１層で、糸切り須恵器坏（58）、赤焼土器坏（103、117、147）が出土している。

ＳＫ337（第９図）　Ｉ－３グリッドに位置し、ＳＤ700に接する。平面は、隅丸方形で長軸1.6m・短軸1.24m、深さ20cmを測り、Ｂ類に属する。覆土は、炭化物粒子を含む２層からなるが、遺物はＦ１層の上面から集中的に出土した。赤焼土器坏（112、114、119、154、



第８図　SK399・340・400土壙

155、156、168等）を一括廃棄した状況が窺える。

ＳＫ321（第９図）　Ｊ－６～７グリッドに位置し、ＥＰ751、ＥＰ753、ＥＰ810等と重複関係を持つ。平面は楕円形で、長軸2.5m・短軸1.6m、深さ36cmを測り、比較的大型のＣ類に属する。覆土は、火山灰ブロックを含むＦ１層、黒色炭化灰のＦ４層他、５層からなる。遺物は、Ｆ１層から黒色土器坏（24）、Ｆ２層から赤焼土器坏（150、151）、Ｆ３層から赤焼土器甕（181）、Ｆ４層から赤焼土器坏（152、153）が出土した。出土総数は、破片集計で229点に上る。赤焼土器が主体で、坏170点、甕93点を数える。

ＳＫ455（第９図）　Ｉ－８グリッドに位置し、ＳＫ454を切り、ＳＤ457とＳＤ453に切られる重複関係を持つ。平面は楕円形で、長軸2.1m・短軸0.63m、深さ20cmを測る。覆土は５層からなり、Ｆ４層は黒色炭化灰である。類型ではＣ類に属するが、出土遺物にヘラ切り須恵器坏が４点（50、51、55、69）あることが注目される。赤焼土器坏が主体の他の土壙とは、明らかに異なる様相を呈している。

ＳＫ370（第９図）　Ｇ－５グリッドに位置し、溝状遺構群の中でＳＤ1461とＳＤ1485を切り、ＳＤ989に切られる重複関係を持つ。平面は隅丸方形で、長軸1.6m・短軸1.22m、深さ23cmを測る。覆土は５層からなり、Ｆ３層は黒色炭化灰である。墨書「し」を持つ黒色土器坏（11）、文字は不明だが、体部に墨痕を持つ赤焼土器坏（115）、赤焼土器甕（185）等が出土している。

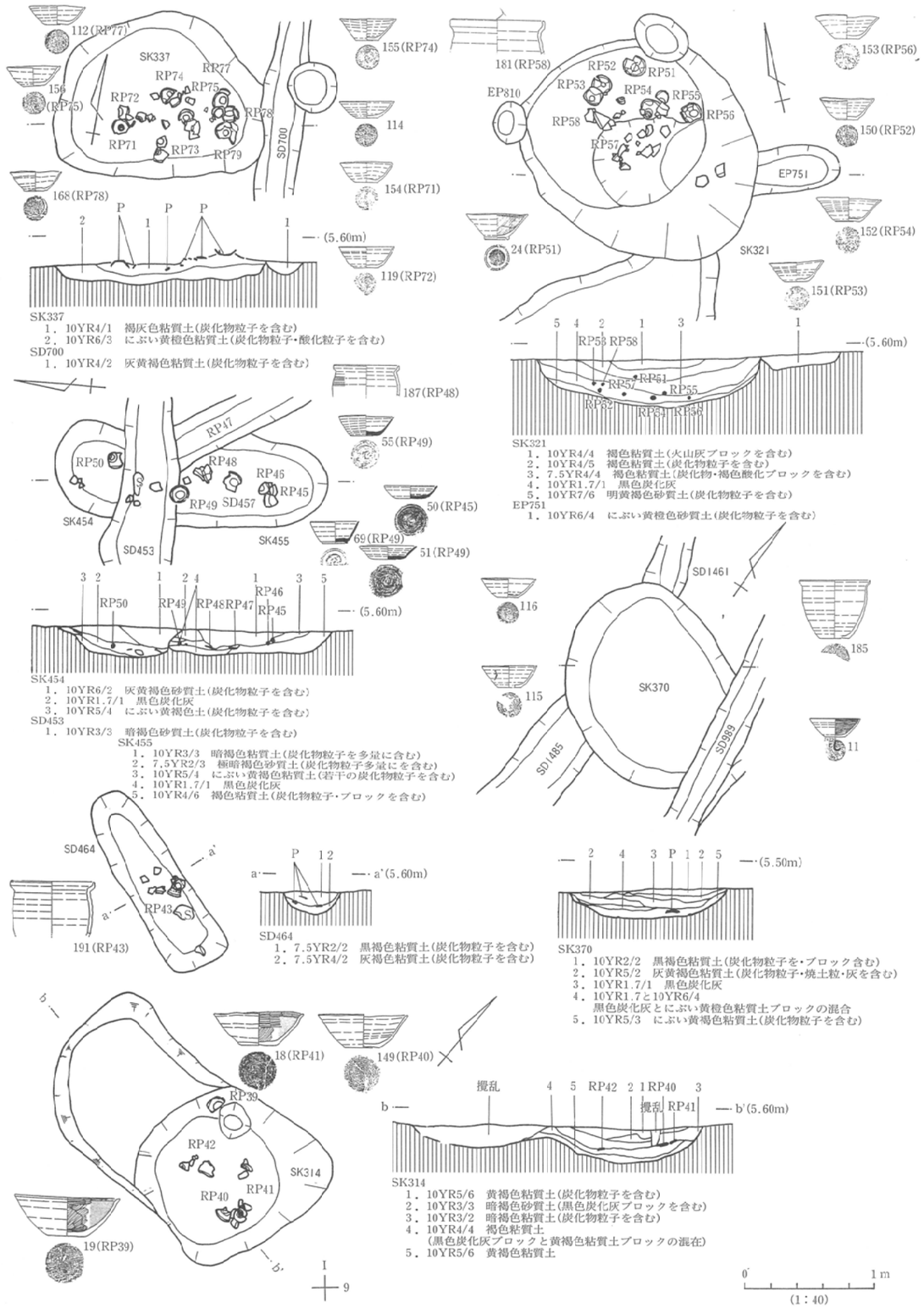
ＳＫ314（第９図）　Ｊ－９グリッドに位置する。平面は長方形で、長軸2.21m・短軸1.23m、深さ27cmを測る。西側は攪乱を受けているが、東側の覆土は５層からなる。東側より黒色土器坏（18、19）、赤焼土器坏（149）等が出土している。

ＳＫ350（第10図）　調査区北端のＤ－１グリッドに位置する。長軸5.13m・短軸0.74mの規模を有する大型の土壙である。製塩土器片が24点出土したのをはじめ、「冨」の墨書を底部に持つ黒色土器高台付坏（23）、判読不明の墨書を体部に持つ赤焼土器坏（258、298、302）、須恵器長頸壺（89）等の遺物が出土している。検出地点、形態・規模、遺物の出土状況、いずれの面からみても本調査区では特異な土壙であるといえる。

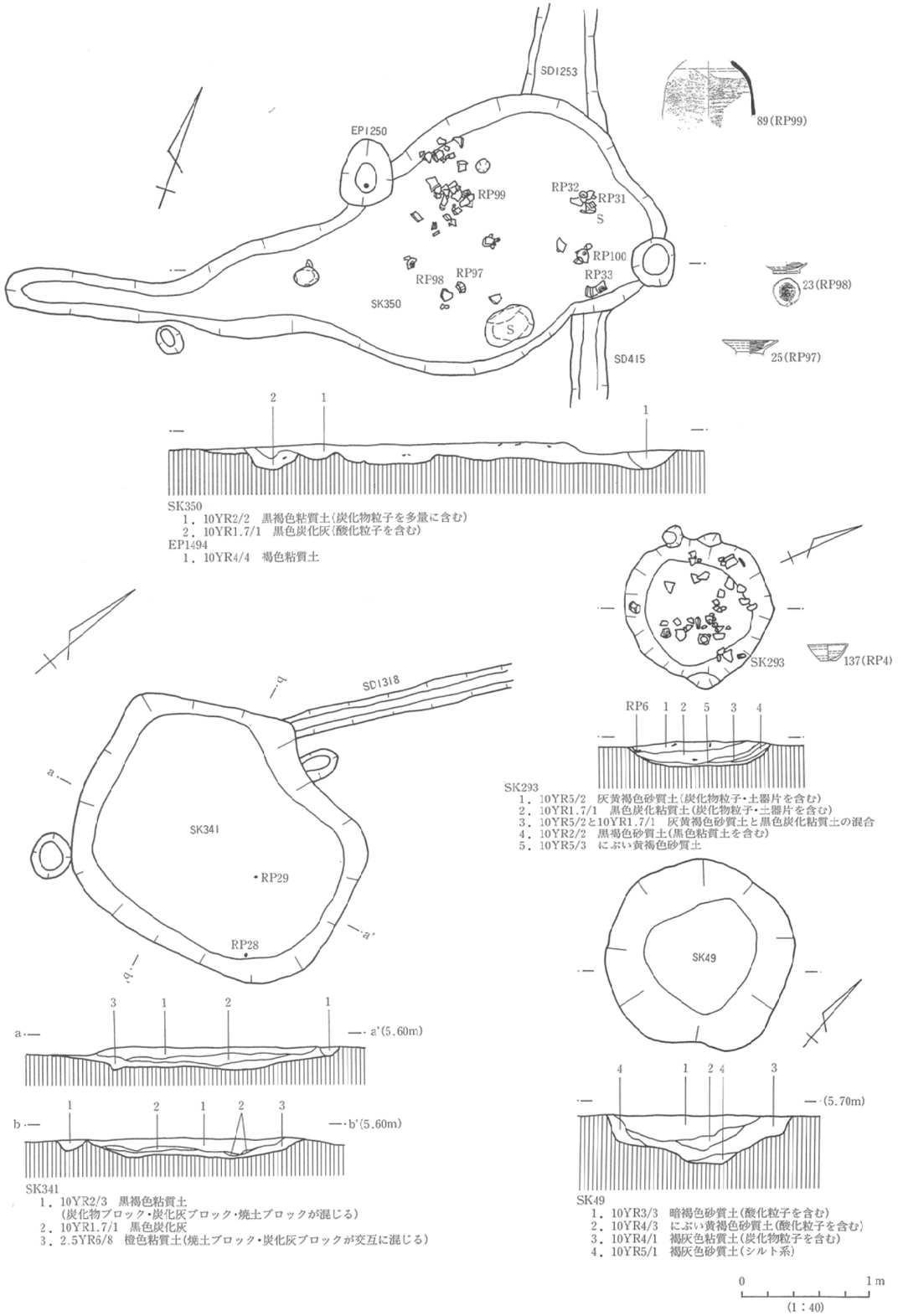
ＳＫ341（第10図）　Ｂ－５グリッドに位置する。平面は隅丸方形で長軸2.5m・短軸2.2m、深さ17cmを測り、Ｃ類に属する。覆土は３層からなり、焼土ブロックが混入したＦ１層とＦ３層の間に炭化灰のＦ２層をはさむ。土壙内での焼成痕跡と窺える。須恵器蓋（37）と須恵器高台付坏（74）が出土しているが、遺物の出土量は少ない。

ＳＫ293（第10図）　Ｄ－11～12グリッドに位置し、長軸1.23m・短軸1.14mの規模を持つＡ類の土壙である。赤焼土器坏（137他）がまとまって出土したほか、製塩土器片が21点出土している。

ＳＫ49（第10図）　調査区南東部のＡ～Ｂ－18グリッド、ＳＢ１建物跡の東方15mに位置する。長軸1.51m・短軸1.32m、深さ38cmの規模を有する円形の土壙で、Ａ類に属する。覆土Ｆ２層より、黒色土器坏（17）と赤焼土器坏（111）が出土した。ＳＫ49の南方10mには、墨書文字「一」を有する黒色土器高台付坏（22）が出土したＳＫ180がある。



第９図　SK337・321・455・370・314土壙



第10図　SK350・293・341・49土壙

ＳＫ67Ｔ（第11図）　本遺跡域の北西端部に当たる４トレンチの４Ｔ－６グリッドに位置する。４Ｔ－６～７グリッドは、土壙や溝跡・ピットが集中している地域である。平面は隅丸方形で、長軸1.9m・短軸1.74m、深さ30cmを測る。覆土は、炭化物粒子を含む２層からなり、Ｆ２層上面炭化灰層中から129点の製塩土器片（210）が出土した。製塩土器は、調査区全体で759点（遺構内の破片集計による）出土しているが、一個体を構成する破片が一括出土したのはＳＫ67Ｔだけである。出土遺物には、他に墨書文字「し」を有する赤焼土器坏（113）等があり、総数は907点に上る。

ＳＫ75Ｔ（第11図）　４トレンチ４Ｔ－６グリッド、ＳＫ67Ｔの南方２mに位置する。南半が調査区外に係るため全形は確認されない。覆土は４層からなり、Ｆ２層から赤焼土器坏（134、144、145、146）がまとまって出土した。

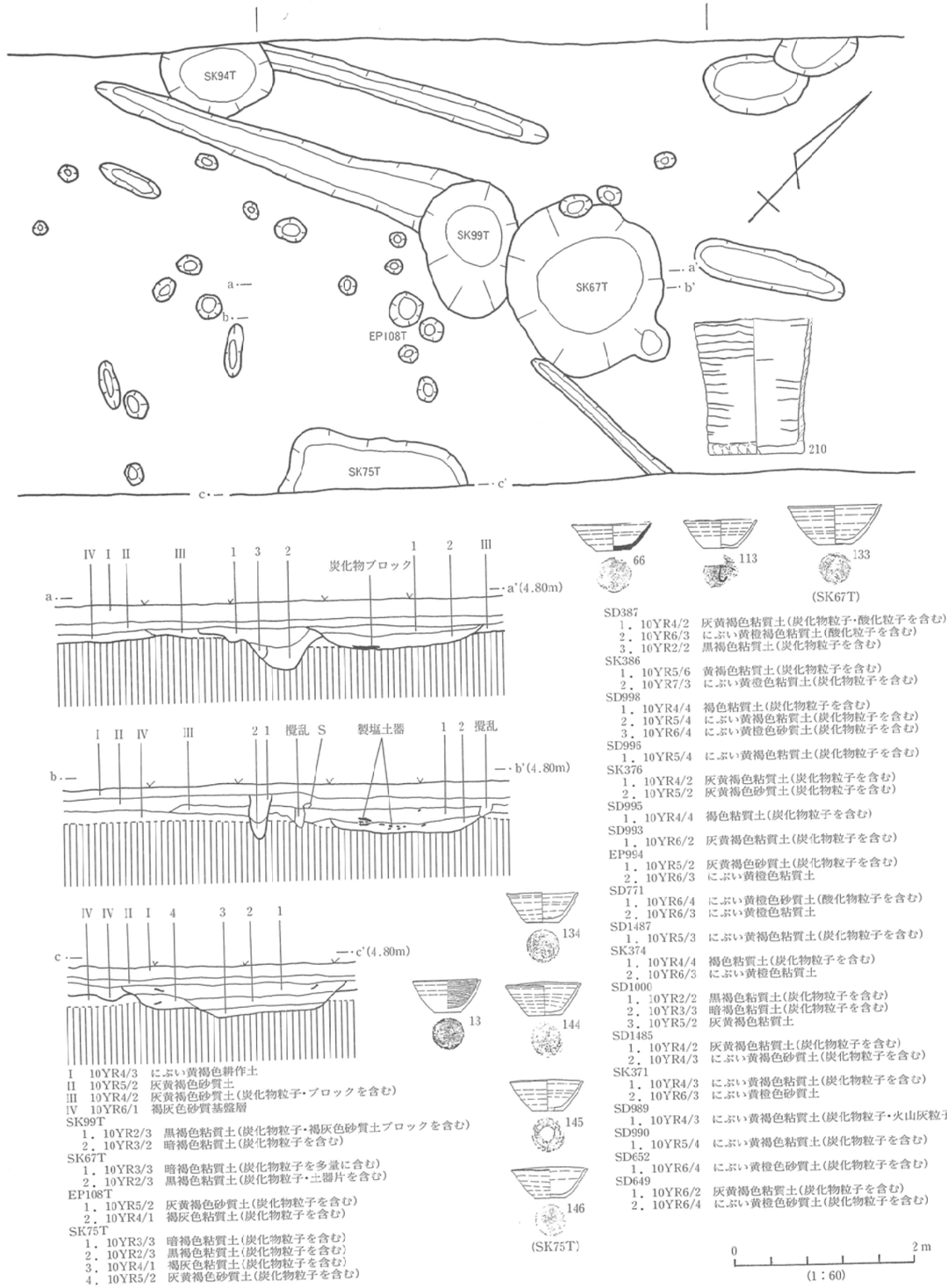
３）溝状遺構

今回検出された溝状遺構群は、最も溝跡が集中するＦ～Ｌ－２～７グリッド（Ａ区）を中心に、その南方Ｊ～Ｋ－６～８グリッド（Ｂ区）、Ａ～Ｅ－１～４グリッド（Ｃ区）、Ａ～Ｅ－６～８グリッド（Ｄ区）の４つの区画より構成される。また、溝跡の走行方向によって１～５類の類別が可能であった(表２参照)。１～３類は南北走行の溝跡である。１類は真北より10°前後東方に傾く方向で、２類は真北より西方に20°前後傾き、３類は真北より西方への傾きが10°前後の溝跡である。４～５類は東西走行の溝跡で、５類は４類よりも約20°南に傾く。１～３類は、その切り合い関係から１→２→３の変遷があったものと推察される。Ａ区は１～３類の溝跡が切り合い、Ｂ区は４類、Ｃ区は２類、Ｄ区は３類の溝跡が中心である。以下、Ａ区の状況について概述する。

Ａ区溝状遺構（第12図）　東西35m、南北25m程の規模を持つ。Ａ区には１～３類の溝跡が重複する形で検出され、３時期の変遷が認められた。１類は、ＳＤ996・993・600等によって構成され、長さ２～９m、幅25cm前後を測る。２～３類の溝跡との重複によって断片的に検出された溝跡が多い。２類は、ＳＤ336・771・666等によって構成されるが、この類に属する溝跡は少なく、溝跡群として機能していたかは疑問が残る。ただし、Ｃ区の２類溝跡群（ＳＤ1253・1255・1256・1257他）は、ほぼ等間隔で整然と平行配置されている。３類は、ＳＤ691・693・695・562・700・803・408・652他、約20条の溝跡によって構成される。長さ10～20m前後、幅30cm程度の溝跡が主体であるが、溝跡の間隔は、西側で約３mであるのに対して、東側では約２mと狭くなる。ＳＤ387やＳＫ399付近を境にして東西に区画が分かれていたことも考えられる。

次に、まとまった遺物を出土した特徴のある溝跡について、挿図に従って概述する。

ＳＤ408（第13図）　Ａ区溝状遺構群のほぼ中央、Ｈ－５～６グリッドに位置する。南方をＳＫ1352に切られ、さらにその先に、ＳＤ408が枝分かれした形でＳＤ768とＳＤ769が続く。長さ5.7m・幅0.5m、深さ13cmの規模を有し、１類に属する溝跡であるが、他の溝跡と比較するとやや幅が広い。この溝跡からは、須恵器甕（102）とともに、ヘラ切り須恵器坏（62）、砥石２点（231、237）が一括出土している。



I　10YR4/3　にぶい黄褐色耕作土
II　10YR5/2　灰黄褐色砂質土
III　10YR4/2　灰黄褐色砂質土(炭化物粒子・ブロックを含む)
IV　10YR6/1　褐灰色砂質基盤層

SK99T
1．10YR2/3　黒褐色粘質土(炭化物粒子・褐灰色砂質土ブロックを含む)
2．10YR3/2　暗褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

SK67T
1．10YR3/3　暗褐色粘質土(炭化物粒子を多量に含む)
2．10YR2/3　黒褐色粘質土(炭化物粒子・土器片を含む)

EP108T
1．10YR5/2　灰黄褐色砂質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR4/1　褐灰色粘質土(炭化物粒子を含む)

SK75T
1．10YR3/3　暗褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR2/3　黒褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
3．10YR4/1　褐灰色粘質土(炭化物粒子を含む)
4．10YR5/2　灰黄褐色砂質土(炭化物粒子を含む)

SD387
1．10YR4/2　灰黄褐色粘質土(炭化物粒子・酸化粒子を含む)
2．10YR6/3　にぶい黄橙褐色粘質土(酸化粒子を含む)
3．10YR2/2　黒褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

SK386
1．10YR5/6　黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR7/3　にぶい黄橙色粘質土(炭化物粒子を含む)

SD998
1．10YR4/4　褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
3．10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土(炭化物粒子を含む)

SD995
1．10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

SK376
1．10YR4/2　灰黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR5/2　灰黄褐色砂質土(炭化物粒子を含む)

SD995
1．10YR4/4　褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

SD993
1．10YR6/2　灰黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

EP994
1．10YR5/2　灰黄褐色砂質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR6/3　にぶい黄橙色粘質土

SD771
1．10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土(酸化物粒子を含む)
2．10YR6/3　にぶい黄橙色粘質土

SD1487
1．10YR5/3　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

SK374
1．10YR4/4　褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR6/3　にぶい黄橙色粘質土

SD1000
1．10YR2/2　黒褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR3/3　暗褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
3．10YR5/2　灰黄褐色粘質土

SD1485
1．10YR4/2　灰黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR4/3　にぶい黄褐色砂質土(炭化物粒子を含む)

SK371
1．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR6/3　にぶい黄橙色砂質土

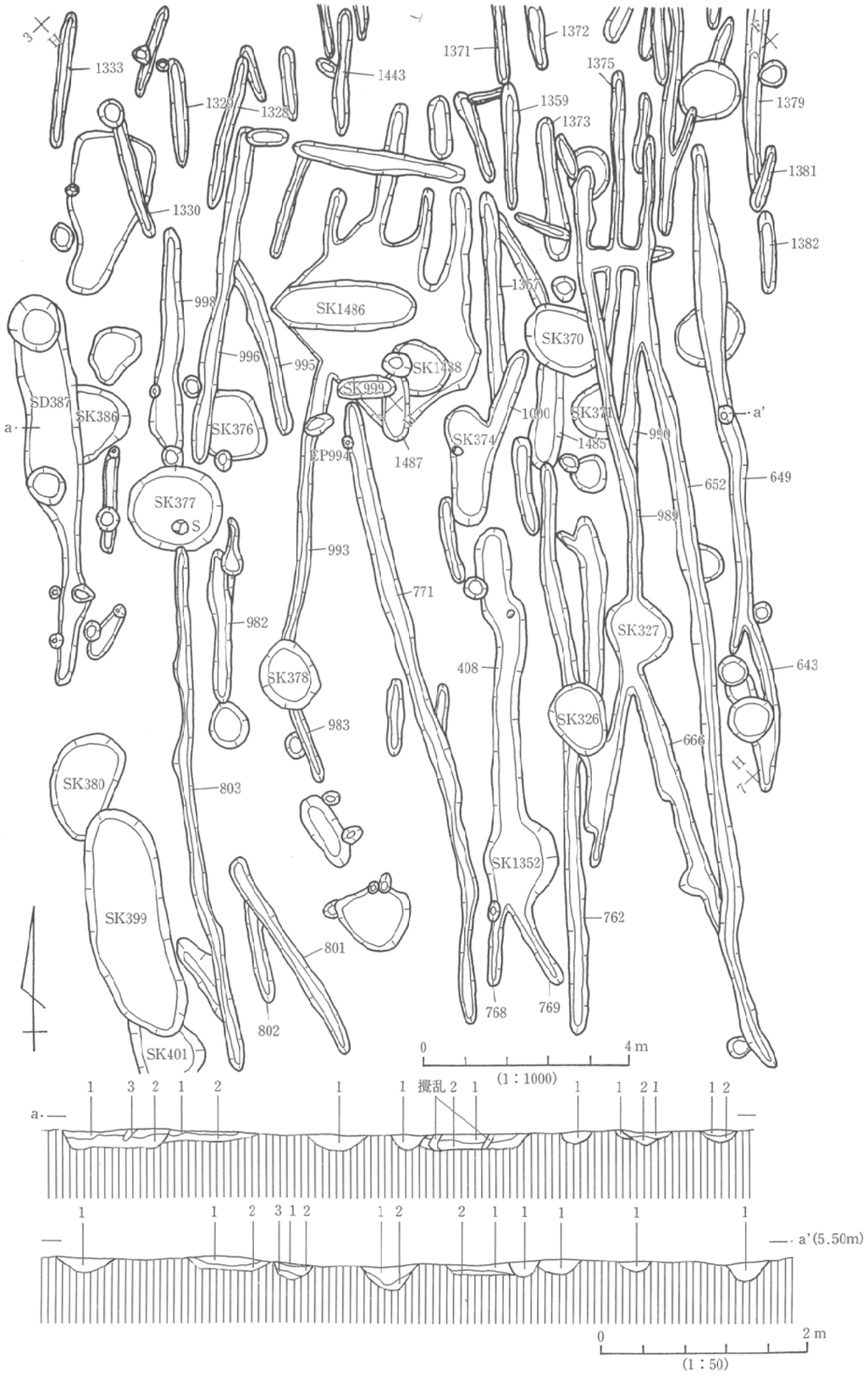
SD989
1．10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子・火山灰粒子を

SD990
1．10YR5/4　にぶい黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)

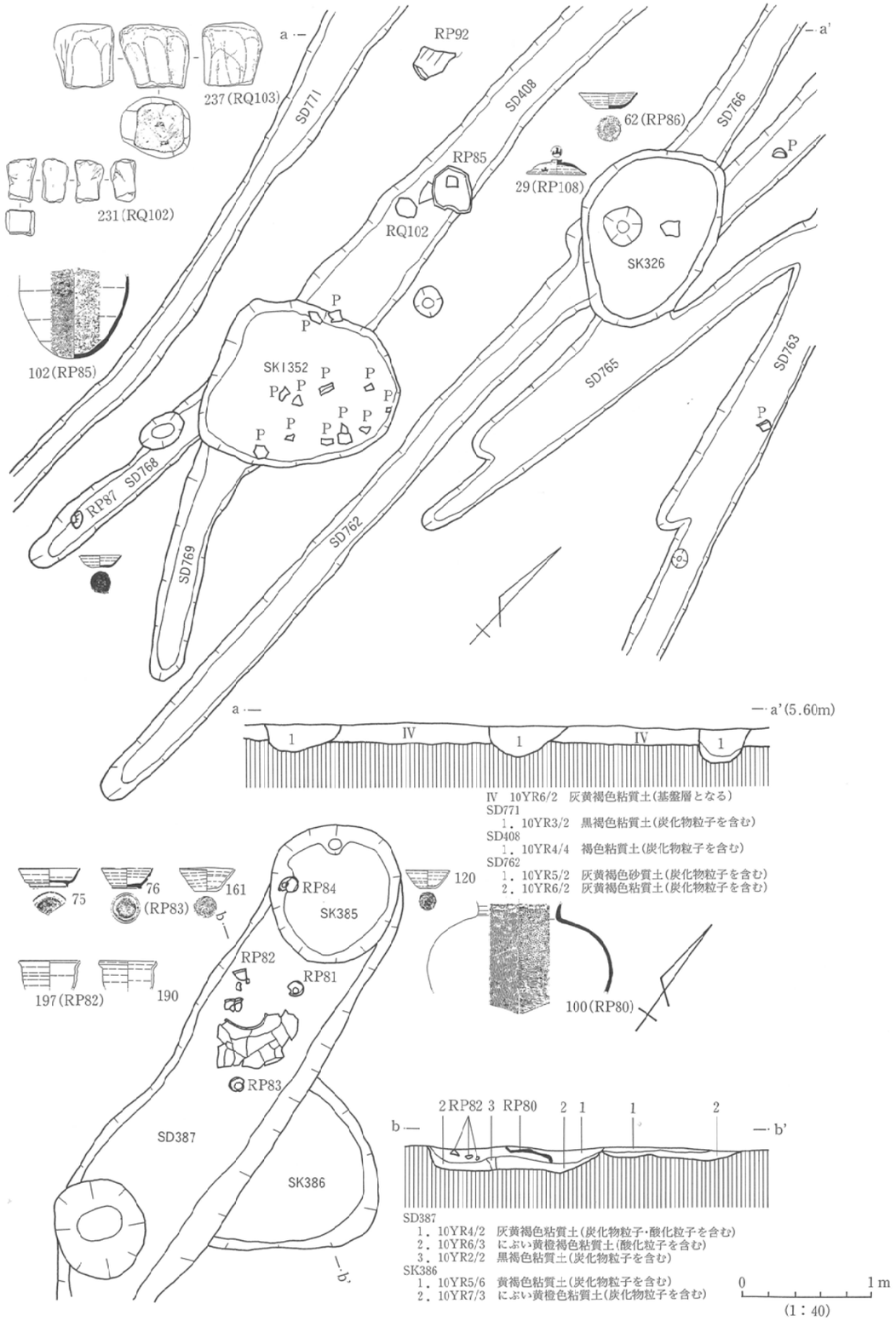
SD652
1．10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土(炭化物粒子を含む)

SD649
1．10YR6/2　灰黄褐色粘質土(炭化物粒子を含む)
2．10YR6/4　にぶい黄橙色砂質土(炭化物粒子を含む)

第11図　SK67T・99T・75T土壙



第12図　溝状遺構(E～Hグリッド)



第13図　SD408・771・762・387溝跡

ＳＤ387（第13図）　Ｈ～Ｉ－３～４グリッドに位置し、ＳＫ386を切り、ＳＫ385に切られる重複関係を持つ。長さ6.43m・幅0.72m、深さ18cmの規模を有する。方向では３類に属するが、他の溝跡群とは明らかに異なる形態を呈している。出土した遺物は、須恵器甕(100)をはじめ、須恵器高台付坏がヘラ切り・糸切り各１点（75、76）、赤焼土器の坏（161）・小壺（190）・甕（197）、製塩土器片34点と多様である。

ＳＤ336（第14図）　Ｉ－１～３グリッドに位置し、ＳＤ387の６m南方にあたる。西方をＳＸ338に接し、南端をＳＤ562に切られる。長さ9.1m・幅0.34m、深さ19cm規模を有する。覆土は２層からなるが、１層上面から須恵器甕の破片が溝跡を埋め尽くすように大量に出土した。当初、一括してＲＰ２と登録したが、後に四耳壺（91）・壺（93）・甕（95）の３個体分の土器片が混在していることが確認された。また、製塩土器片が43点出土している。ＳＤ387の出土状況とともに、この付近で製塩作業が行われた可能性を示唆しているといえる。

ＳＤ927（第14図）　Ｉ～Ｊ－３グリッドに位置する。西方をＳＤ562に切られ。その先にＳＤ336が走行している。方向は２類に属するが、長さ1.4m・幅0.73mと土壙に近い形態を呈する。外面灰被りの須恵器壺（88）がほぼ完形の状態で出土した。

ＳＤ404（第14図）　Ｊ－２グリッドに位置し、北方はＳＸ338に接する。長さ1.74m・幅0.53mの小規模な溝跡であるが、漆の付着した坏（124）・甕（188、189）等、赤焼土器がまとまって出土している。

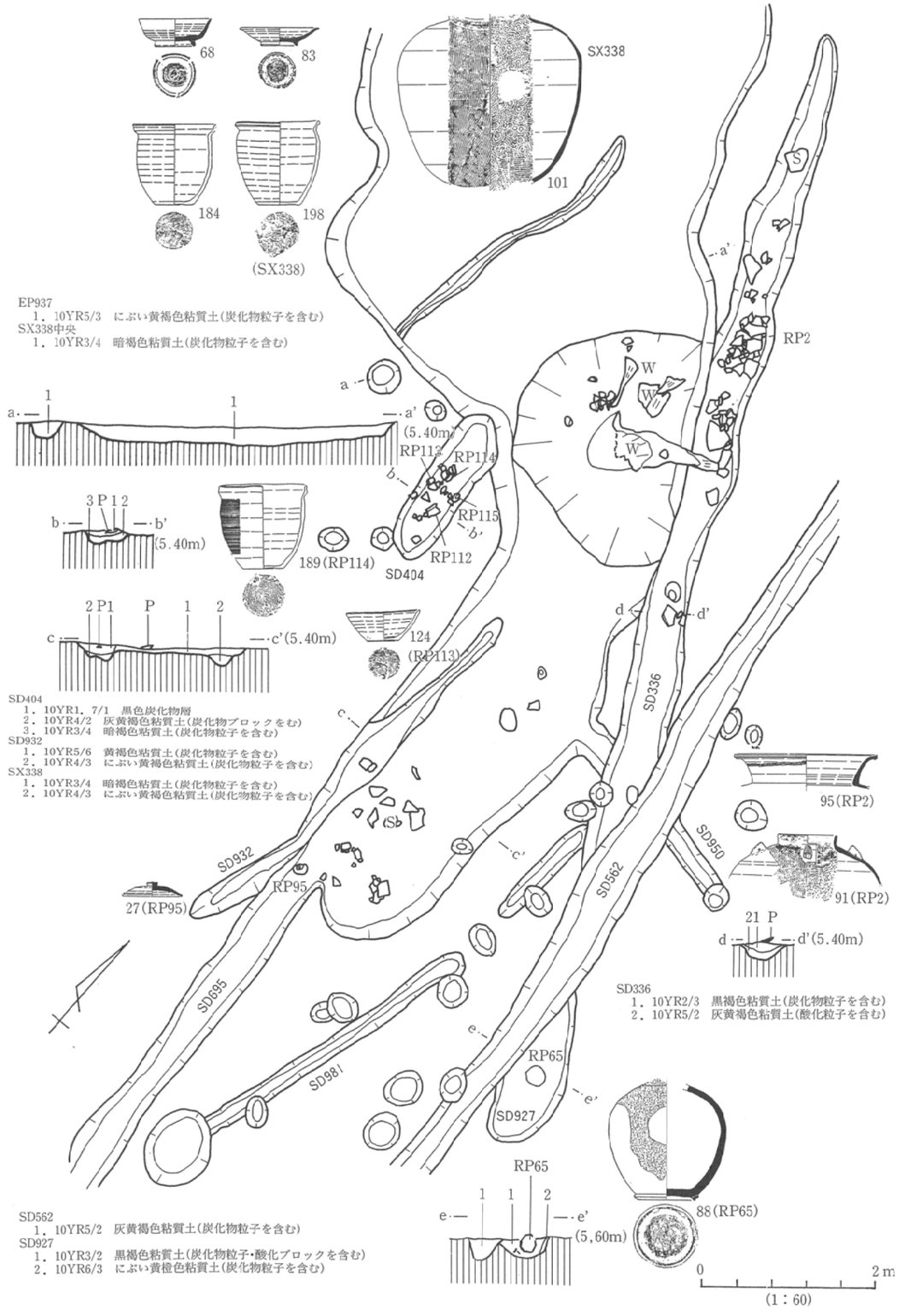
ＳＤ464（第９図）　Ｊ－８グリッド、ＳＫ314の北西方１mに位置する。長さ1.43m・幅0.4mを測る。５類に属する唯一の溝跡である。赤焼土器の坏（125）や小壺（191）等が出土している。

４）性格不明遺構

今回性格不明遺構として登録したのは６基あるが、遺物の出土状況等から特徴のある遺構２基について概述する。

ＳＸ338（第14図）　Ａ区溝状遺構群の北西端部に位置する。西方をＳＤ336に接し、南端はＳＤ695と接続している。自然地形の落ち込みと捉えられ、周囲から雨水等が流入し 湿地化していたことも考えられる。深さは、最深部で約50cmを測る。出土遺物には、須恵器のヘラ切り高台付坏（68）・糸切り皿（83）・甕（101）、赤焼土器甕（184、198）等がある。出土総数は破片集計で323点を数え、製塩土器片34点を含んでいる。

ＳＸ43Ｔ（第７図）　３トレンチの３Ｔ－４グリッドに位置する。東方にＳＢ２建物跡が、北西方には製塩土器（211）出土のＳＫ44Ｔが近接する。長軸４m・短軸3.6mの規模を有し、大型の土壙あるいは竪穴住居跡とも捉えられる検出状況であった。出土した遺物は、破片集計で420点に上り、赤焼土器坏（105、106、163、164他）・甕が中心である。製塩土器片も25点を数えた。赤焼土器坏の中に、灯明皿に転用されたものが１点（164）確認された。他に刀子も２点（228、229）出土している。



第14図　SD336・404・927・溝跡・SX338

表1　北目長田遺跡遺構観察表(1)　土壙

登録番号	グリッド	平面形態	規模(m) 長軸	短軸	深さ	出土遺物	挿図番号
SK49	A～B-18	円形	1.51	1.32	0.38	17,111	第10図
SK180	A～B-20	隅丸方形	1.31	1.14	0.46	22	
SK293	D-11～12	隅丸方形	1.23	1.14	0.19	137	第10図
SK295	B-10	円形	1.30	1.22	0.20	10	
SK297	A～B-9～10	不整楕円形	2.23	1.81	0.24	148	
SK298	B～C-9	不整楕円形	(2.33)	(0.90)	0.25	186,303	
SK300	B～C-9	円形	1.01	1.00	0.22		
SK301	C-9～10	楕円形	0.82	0.64	0.11	107,158,159	
SK304	D-9～10	円形	1.62	1.40	0.29	138,179	
SK305	B～C-8～9	隅丸方形	1.40	1.40	0.18	118	
SK307	C-6	隅丸方形	1.34	0.60	0.20		
SK311	H～I-9	円形	1.50	1.43	0.21		
SK313	I-8～9	隅丸方形	1.80	1.60	0.15	160	
SK314	J-9	長方形	2.21	1.23	0.27	18,19,149	第9図
SK315	I-8	円形	1.54	1.54	0.28	1	
SK316	J-7～8	隅丸方形	1.10	1.00	0.24		
SK319	L-6	楕円形	1.50	1.10	0.26	47	
SK321	J-6～7	楕円形	2.50	1.60	0.36	24,150,151,152,153,181	第9図
SK322	J-7	不整楕円形	2.58	1.60	0.29		
SK330	F-6	円形	1.74	1.71	0.21	2,3,4	
SK337	I-3	隅丸方形	1.60	1.24	0.20	112,114,119,154,155,156,168	第9図
SK340	J-5	隅丸方形	1.60	1.50	0.24	12,104,122,136	第8図
SK341	B-5	隅丸方形	2.50	2.20	0.17	37,74	第10図
SK349	D-2	円形	1.48	1.32	0.18	157	
SK350	D-1	長楕円形	5.13	0.74	0.17	23,25,89,258,298,302	第10図
SK364	E-4	楕円形	3.82	2.21	0.45	46,193	
SK370	G-5	隅丸方形	1.60	1.22	0.23	11,115,116,185	第9図
SK374	G～H-5	楕円形	3.30	0.72	0.14	175,177	
SK378	I-5	円形	1.31	1.10	0.21	194	
SK383	I-4	楕円形	1.20	0.80	0.19	65	
SK385	H-3	円形	1.03	1.00	0.19	120	
SK390	G～H-1	楕円形	2.54	1.50	0.32	135	
SK391	J-4	楕円形	1.94	1.32	0.23	49	
SK399	I～J-5	長楕円形	4.50	1.50	0.20	16,108,182,202,240	第8図
SK400	K-5	円形	2.51	1.92	0.25	58,103,117,147	第8図
SK401	J-6	楕円形	1.24	1.22	0.13	270	
SK455	I-8	楕円形	2.10	0.63	0.20	50,51,55,69,187	第9図
SK999	H-4	長楕円形	1.18	0.43	0.13	82	
SK1486	H～G-4	長楕円形	2.86	0.94	0.22	109，110，296	
SK44T	3T-4	隅丸方形	1.60	1.50	0.19	211	第7図
SK57T	4T-6	隅丸方形	1.90	1.74	0.30	66,113,133,210	第11図
SK75T	4T-6	不整方形	2.10	(0.70)	0.33	13,134,144,145,146	第11図
SK99T	4T-6	楕円形	1.52	1.08	0.47		第11図

表２　北目長田遺跡遺構観察表(2)　溝跡

分類	登録番号	グリッド	方向	規模(m) 長軸	幅	深さ	出土遺物	挿図番号
A-1	SD404	J-2	N-10°-E	1.74	0.53	0.15	124,188,189	第14図
	SD939～981	I～J-3	N-11°-E	5.50	0.20	0.05		
	SD696	K-4	N-2°-E	4.73	0.12	0.09		
	SD1328	G-3	N-13°-E	2.99	0.23	0.12		第12図
	SD996	G～H-3～4	N-12°-E	6.50	0.31	0.16		第12図
	SD1363	G-4	N-7°-E	2.30	0.23	0.07		
	SD993	G～H-4～5	N-6°-E	8.73	0.24	0.08		第12図
	SD768	I-6	N-5°-E	1.44	0.30	0.18	57	第13図
	SD1354	G-4	N-14°-E	0.92	0.32	0.14		
	SD1395	E～F-4～5	N-15°-E	4.50	0.21	0.05		
	SD1393	E～F-4～5	N-10°-E	7.50	0.24	0.08		
	SD1389	E-5	N-5°-E	1.82	0.20	0.09		
	SD763	H-6	N-12°-E	4.80	0.33	0.19		
	SD609～641	F～G-6	N-18°-E	3.80	0.20	0.05		
	SD607～629	F～G-6～7	N-11°-E	9.10	0.30	0.10		
	SD600	F～G-7～8	N-5°-E	8.34	0.40	0.06		
A-2	SD336	I～J～3	N-25°-W	9.10	0.34	0.19	91,93,95,306	第14図
	SD927	J～J-3	N-25°-W	1.40	0.73	0.23	88	第14図
	SD1330	H-3	N-18°-W	2.23	0.22	0.07		第12図
	SD995	H-4	N-18°-W	3.42	0.24	0.12		第12図
	SD771	H～I-5～6	N-15°-W	12.20	0.34	0.10		第13図
	SD769	H～I-6～7	N-28°-W	1.62	0.30	0.13		第13図
	SD666	H-6～7	N-15°-W	4.50	0.53	0.11		第12図
A-3	SD691	L-3	N-7°-W	5.61	0.21	0.15		
	SD692	K～L-3	N-3°-W	6.40	0.33	0.18		
	SD894	K-2～3	N-5°-W	6.10	0.42	0.13		
	SD693	J～L-2～4	N-7°-W	15.41	0.23	0.11		
	SD879	K～L-4～5	N-9°-W	5.20	0.30	0.17		
	SD695	J～K-3～4	N-7°-W	6.94	0.42	0.09	27	第14図
	SD562	I～K-2～5	N-6°-W	19.01	0.44	0.28		第14図
	SD700	H～J-2～5	N-0°	21.40	0.32	0.18		
	SD387	H～I-3～4	N-5°-W	6.43	0.72	0.18	75,76,100,161,190,197	第13図
	SD998	H-4	N-0°	4.14	0.40	0.18		第12図
	SD803	H～J-4～6	N-7°-W	10.12	0.21	0.11		第12図
	SD982	H～I-5	N-6°-W	2.92	0.30	0.03	第12図	
	SD1357	G-4～5	N-3°-W	3.91	0.24	0.10		第12図
	SD408	H-5～6	N-3°-W	5.70	0.50	0.13	29,62,102,231,237	第13図
	SD762	G～I-5～7	N-14°-W	11.00	0.30	0.15	252	第13図
	SD989	F～G-4～6	N-5°-W	8.40	0.24	0.14		第12図
	SD652	G～H-5～7	N-10°-W	18.10	0.32	0.18		第12図
	SD649	F～G-5～6	N-7°-W	9.83	0.40	0.20		第12図
	SD610	F～G-5～6	N-10°-W	8.70	0.30	0.13		
	SD608	F-6	N-7°-W	4.20	0.22	0.12		
	SD578	E～F-6	N-8°-W	4.40	0.30	0.07		
	SD601	F～G-6～7	N-3°-W	6.10	0.22	0.12		
B-1	SD549	K～L-7	N-4°-E	5.91	0.30	0.24		
B-3	SD708	J～K-6	N-12°-W	3.51	0.70	0.20	56	
B-4	SD686	I-7	E-0°	1.21	0.30	0.04		
	SD672	H～I-7	E-0°	4.50	0.34	0.06		
	SD453	H～I-7～8	E-2°-N	8.00	0.32	0.31		第９図
	SD560	K～L-6	E-10°-N	3.20	0.31	0.14	140,200	
B-5	SD464	J-8	E-18°-S	1.43	0.40	0.18	125,191	第９図
C-2	SD1253	C～D-1	N-27°-W	2.10	0.40	0.08		
	SD415	D-1～3	N-30°-W	7.60	0.20	0.11		
	SD1255	C-1	N-21°-W	2.90	0.22	0.17		
	SD1282～1283	C-2～3	N-30°-W	4.61	0.20	0.10		
	SD1256	B-1	N-20°-W	2.61	0.20	0.08		
	SD1278～1293	B～C-2～3	N-35°-W	7.50	0.23	0.12		
	SD1257	B-1	N-24°-W	2.90	0.30	0.05		
	SD1268	B-2～3	N-33°-W	4.90	0.24	0.15		
	SD1271	B-2～4	N-33°-W	11.20	0.23	0.09		
	SD1272～1277	A～B-2～4	N-32°-W	9.82	0.23	0.09	96,97	
C-3	SD410～1266	B～C-1～2	N-9°-W	8.90	0.21	0.10	162,246	
D-3	SD1031	C～D-5～7	N-10°-W	9.50	0.24	0.20		
	SD1218	C-6	N-11°-W	3.71	0.30	0.09		
	SD439	B～C-6～7	N-12°-W	5.52	0.23	0.11		
	SD438	B～C-7	N-13°-W	5.31	0.23	0.12		

5　出土遺物

遺物の分布

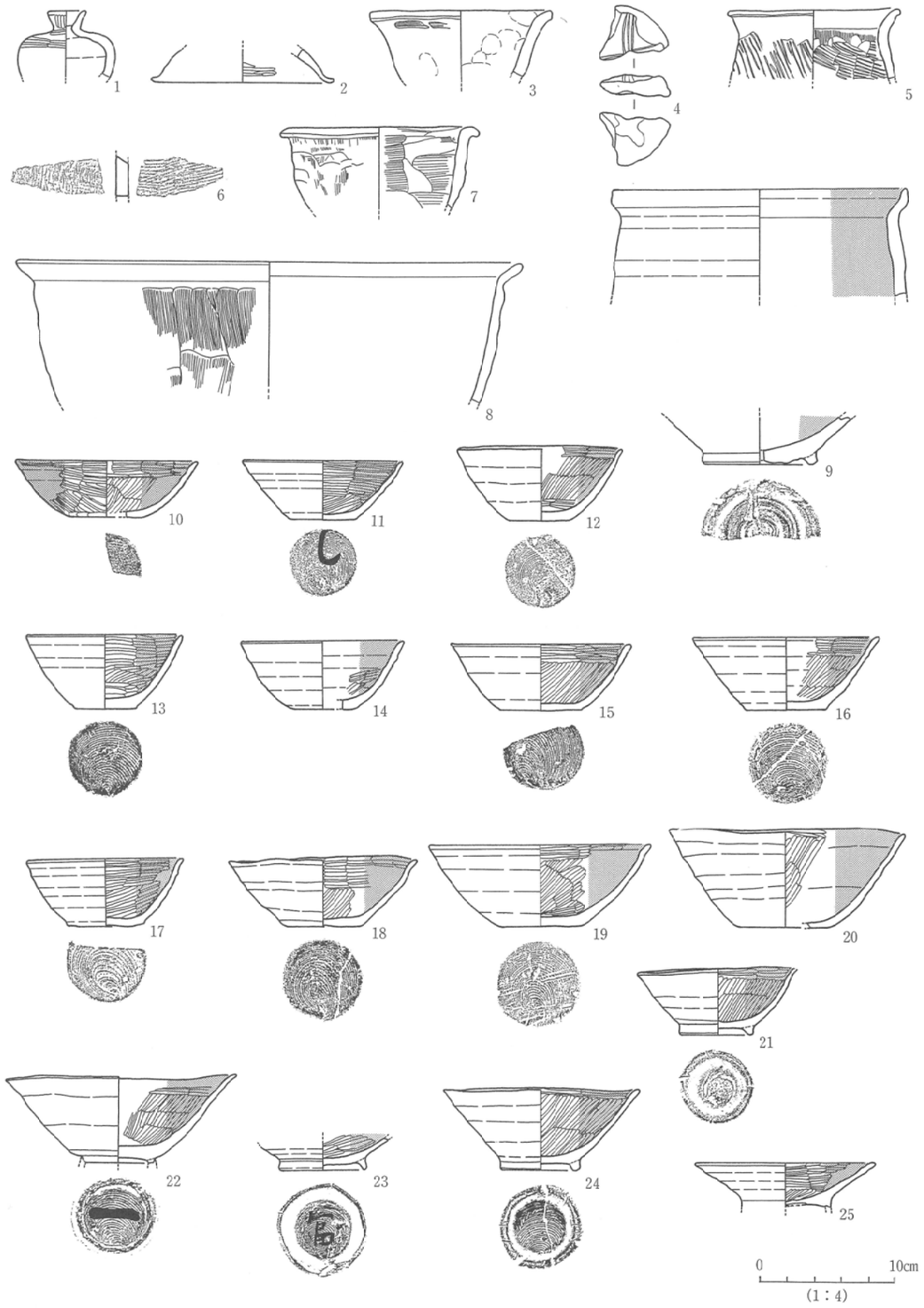
本調査で出土した遺物は整理箱にして115箱を数える。その内訳は土器が113箱、土製品１箱、石製品１箱で、圧倒的に土器が多い。土器の種別では、土師器・黒色土器・須恵器・赤焼土器・緑釉陶器・青磁・染付・中世陶器・製塩土器等である。器種別では蓋・坏・碗・皿・壷・甕・堝・擂鉢・バケツ型土器等である。そのほかの遺物では紡錘車・砥石・弾・土錘・刀子が出土している。ここでは、これら土器を中心に分類し述べる。分類の基本は器種を主とし、(A)蓋、(B)坏、(C)皿、(D)壷、(E)甕、(F)堝、(G)他とした。大別は　1 底部の切り離し別（技法）2　形態別（法量）3　形状別（形）とした。これらは各器種毎に分類の基準を持つものと考えるが、(B)の坏を基本とした。大別した基準を基に土器の種別毎に以下に記す。

(1)　土師器（第15図1～8）

土師器には小壷、高坏、壷、鉢、甕、甑の器種がある。小壷(1)はＳＫ315土壙Ｆ４からの出土である。上半部のみで、口縁部の径が28㎜、高さ14㎜を計る全面にヘラケズリ調整が施された小型の壷型土器である。２はＳＤ50Ｔ溝跡から出土した高坏の脚部と考えられる。内面をヘラミガキ後黒色化が施されている。３は小型の鉢形土器と考えられる。ＳＫ330土壙Ｆ１層から出土した器面に刷毛目整形や、指頭による器面成形痕が残る。胴部は緩やかに立ち上がり、口縁部で急激に外反する。口唇部は雑な作りであり、脚部の口唇にも観察される。４は用途不明の土器として図示した。断面を台形とし、一面には３本の条痕で十字になる。胎土は３の土器と近似していることから同一個体と考えられる。５・６は甕形土器である。5は口縁部がクの字状に屈曲し、器外面は頸部から胴部にかけて幅3.5cmの刷毛目が斜位に整形され、内面は横位の刷毛目が施されている。６は甕胴部で、内外面とも刷毛目による器面調整が認められる。７は小型の鉢形土器である。口唇部を短かく折り曲げ、内外面とも細かな刷毛目による器面調整が行われている。８は形状から甑形土器とした。口唇部はくの字状に外反し、頸部から胴部に移行する部分には撫でによる整形が、外面には細かな刷毛目が認められる。

(2)　黒色土器（第15図9～25）

黒色土器には甕、坏、高台付坏の器種がある。９は内面を黒色処理が施された甕形土器である。器上半部と底部である。上半部はＳＤ42Ｔ溝跡から、底部はトレンチ調査での出土である。底部の出土はＳＤ42Ｔ溝跡の上面からの出土で同一個体と考えた。器内面は轆轤整形後ヘラミガキ、黒色化処理が施されている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、高台を付す。10は両面とも黒色処理された土器で、細かなヘラが認められる。同部中位に緩やかな丸みをを持ち、口縁に至る。内面を黒色化処理された内黒坏は技法、形状等によりいくつかの形態に分類することができる。11から20は無台の坏形土器である。底部の切り



第15図　出土遺物(1)土師器・黒色土器

表 3　北目長田遺跡遺物観察表(1)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点・登録番号	備考
15	1	土師器	小壺	28			7			ケズリ	SK315F4	
	2		高坏		135		6		ヘラミガキ	ナデ・ケズリ	SD50TF	内面黒色化
	3		鉢	136			8		指頭痕	ナデ・指頭痕	SK330F1	
	4		不明							ハケメ	SK330F1	十文字に3本の条痕
	5		甕	128			5		ハケメ・指頭痕	ハケメ	2T-15Ⅲ	
	6						5		ハケメ	ハケメ	4T-7Ⅲ	
	7		鉢	148		59	8		ハケメ・指頭痕	ハケメ	4T-7Ⅲ	
	8		甑	370			8		ナデ	ハケメ	1T-9-Ⅲ	
	9	黒色土器	甕	218	85		9	ヘラ切	ハケメ	ハケメ	SD42TF.3T-15Ⅲ.3T-4	内黒
	10		坏	134	54	41	6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	SK295F2　RP10	両黒
	11			119	48	43	5	糸切	ロクロ・ヘラミガキ	ロクロ・布ナデ	SK370F1	内黒・墨書「し」
	12			122	47	52	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK340F1　RP125.126	内黒
	13			115	45	54	8	糸切	ヘラミガキ	布ナデ	SK75TF1	内黒
	14			120	46	50	5		ヘラミガキ	ロクロ	SK94TF1	内黒
	15			134	60	48	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SD413F1　RP23	内黒
	16			138	58	53	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK399F1	内黒
	17			116	58	49	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ・布ナデ	SK49F2	内黒
	18			140	57	51	4	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK314F2　RP41	内黒
	19			164	62	60	7	糸切	ロクロ・ヘラミガキ	ロクロ・ミガキ	SK314F1　RP39	内黒
	20			175	70	72	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ・布ナデ	SD309F1　RP24	内黒
	21		高台付坏	119	55	47.5	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ・布ナデ	I-2Ⅲ	内黒
	22			196			5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK180F1　RP104	内黒・墨書「一」
	23				66		4	糸切	ヘラミガキ	ロクロ	SK350F1　RP98	内黒・墨書「冨」
	24			146	59	60	5	糸切	ヘラミガキ	ロクロ・布ナデ	SK321F1　RP51	内黒
	25		高台付皿	134		32	4		ヘラミガキ	ロクロ	SK350F　RP97	内黒
16	26	須恵器	蓋	154			5		ロクロ	ロクロ	1-2Ⅲ	
	27			136		44	9		ロクロ	ロクロ	SD695F1　RP95	
	28			168		30	8		ロクロ	ロクロ	E-4Ⅲ	
	29			140		35	4		ロクロ	ロクロ	SD408F1　RP108	墨書外面及び紐部「山」
	30			176		37	9		ロクロ	ロクロ	I-4Ⅲ	
	31			134		34	9		ロクロ	ロクロ	EP409F1	
	32			158		49	8		ロクロ	ロクロ	南区Ⅲ	
	33			134		28	5		ロクロ	ロクロ	SK100TF1　RP120	転用硯
	34			168		41	7		ロクロ	ロクロ	G-7Ⅲ	還元焔焼成不十分
	35						8		ロクロ	ロクロ	E-4Ⅲ	
	36			134		29	5		ロクロ	ロクロ	E-4Ⅲ	
	37			132			5		ロクロ	ロクロ	SK341Y	
	38		坏	140	76	40	9	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	EP559F1　RP63	
	39			133	80	34	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK332F1　RP106	
	40			142	90	34	3	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	D-6Ⅲ	墨書「十」
	41			130	80	33	3	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	I-4Ⅳ	
	42			124	74	35	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	南区Ⅲ	
	43			115	74	41	9	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	L-5Ⅲ	墨書「上」
	44			137	90	37	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	L-5Ⅲ	墨書「上」
	45			132	80	40	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	3T-15Ⅲ	
	46			130	78	31	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK364F	内面黒色煤付着
	47			136	72	35	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK319F1　RP52	十文字の縄かけ痕
	48			130	72	40	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK368Y	
	49				86		5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK391F1	墨書「一」
	50			126	62	30	9	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455F2　RP45	
	51			134	60	29	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455Y　RP47	ヘラ起こし痕

離し技法は回転糸切りで口縁径と底部径の差が大きく100㎜をこえる大振りの土器である。

19は底部から口縁にかけてやや丸みをもちながら立ち上がり、口縁内面で丸い膨らみをもつ。20は19と同様であるが、器高が高く、底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる。11から18は底部の切り離しが回転糸切りとなるやや小形の坏である。内面に丁寧なヘラミガキ後、黒色化処理を施している。器形の観察で三様に分けられ、A類；底部から口縁にかけての立ち上がりが直線的なもの(16)、B類；丸みを持つもの(11～14･18)、C類；口唇部がやや外反するもの(15・17)である。口径、底径、器高の比率から凡そ２：１：１の数値を示す。11の底部には、「しカ」の墨書が描かれている。ひらがら状の墨書についてはやや無理があると言えるが筆運びから判読した。21～24は高台をもつもので、底部の切り離しが回転糸切りである。無台と同様に器形から三様に分け、A類；直線的なもの(24)、B類；丸みをもつもの(21)、C類；口唇が外反するもの(22)に分けた。器の特徴としては粘土精成が粗雑な22と丁寧な21・23・24がある。時期的または、製作者・集団の違い等があるのかは検討が必要と考える。22の土器底部には「一」の、23には「冨」の墨書がある。25は高台付皿である。整形と内面のヘラミガキ後による黒色化処理が丁寧である。

(3)　**須恵器**（第16図～19図・図版10～15）

須恵器には蓋、皿、坏、高台付坏、双耳坏、壷、四耳壷、横瓶、甕の器種がある。各器種毎その形態や特徴から数類に分類することができる。

蓋（26～37）は紐部の形状でいくつかに分けた。A類；紐部のつまみ中心が紐部高より高くなるもの(27･28･31)、B類；紐部のつまみ中心が紐部高と同じ高さで、水平となるもの(30･36)、C類；紐部のつまみ中心が紐部高より低くなり、中心が飛び出るもの(29･32･34)、D類；紐部のつまみ中心がくぼむもの(33･35)とに分類した。A類としたものは蓋天井部をヘラケズリ無調整で紐部がやや宝珠形に近い。B類は天井部がヘラケズリ後布撫で整形が認められ、紐部天井が水平となる30と、丸くなる36である。C類の29は器面全体に布撫で調整が施され、形状はやや球形となる。紐部の天井には「山」が、器面の四方にも同様の「山」の墨書が施されており、内面を硯として転用している。32・34は土器自体の還元焔焼成が不十分で、酸化焔になる部分が認められる。D類の33は内面を硯に転用している。分類から除いたが、26は短頸壷の蓋と考える。器面に緑灰色の自然釉が掛かる。

坏(38～78)には無台と高台付の坏があり、底部の切り離し技法にヘラ切りと糸切りがある。ここではヘラ切りをA類(38～57)、糸切りをB類(58～67)とし、器の法量が口径と底径の差が小さいもの(1)と、口径と底径の差が大きいもの(2)とし、断面形の形状が底部から口縁にかけて直線的になるもの(ａ)、丸くなるもの(ｂ)、口縁が外反するもの(ｃ)に分けた。

A-1-a類(39・43～45)

坏身の器高が低く、底部からの立ち上がりが直線に近い。43・44には「上」の墨書が底部に描かれている。書体から同筆と観察される。

A1-ｂ類(40・42・46～50)

口径と底径の差が少なく、底部からの立ち上がりが丸みを持つ。40には「十」の49には「一」の墨書が、46は内面を黒色のススが付着しており、燈明に転用されたものと考える。

A-1-ｃ類(41・51～54)

坏身の器高が低く、口唇部が外反するもので、底部にヘラ起こし痕を明瞭に残す。53には「十」の墨書がある。

A-2-a類(55・56)

坏身が深く、底部から直線的に立ち上がる。55はＳＤ455溝跡床面からの出土で、ヘラ起こし痕を明瞭に残している。

A-2-ｂ類(38)

器高が高く、底径が口径に比して小さい。

A-2-ｃ類(57)

ｂ類と同様であるが、口唇が外反するものである。

底部の切り離しが回転糸切りとなるものをB類とし、ヘラ切りと同様な形態で３つに分けた。

B-2-ａ類(59・60・62)

底径が小さく、口径はやや大きく直線的な立ち上がりを呈す。

B-2-ｂ類(61・63・64)

底部からの立ち上がりが丸みを持つ。62には「濱」、63には「呪」の墨書が底部に描かれている。

B-2-ｃ類(58・65～67)は口縁で外反するものである。66は還元焔が不十分で赤色化となり、切り離しが丁寧で明瞭な糸切り痕を残す。

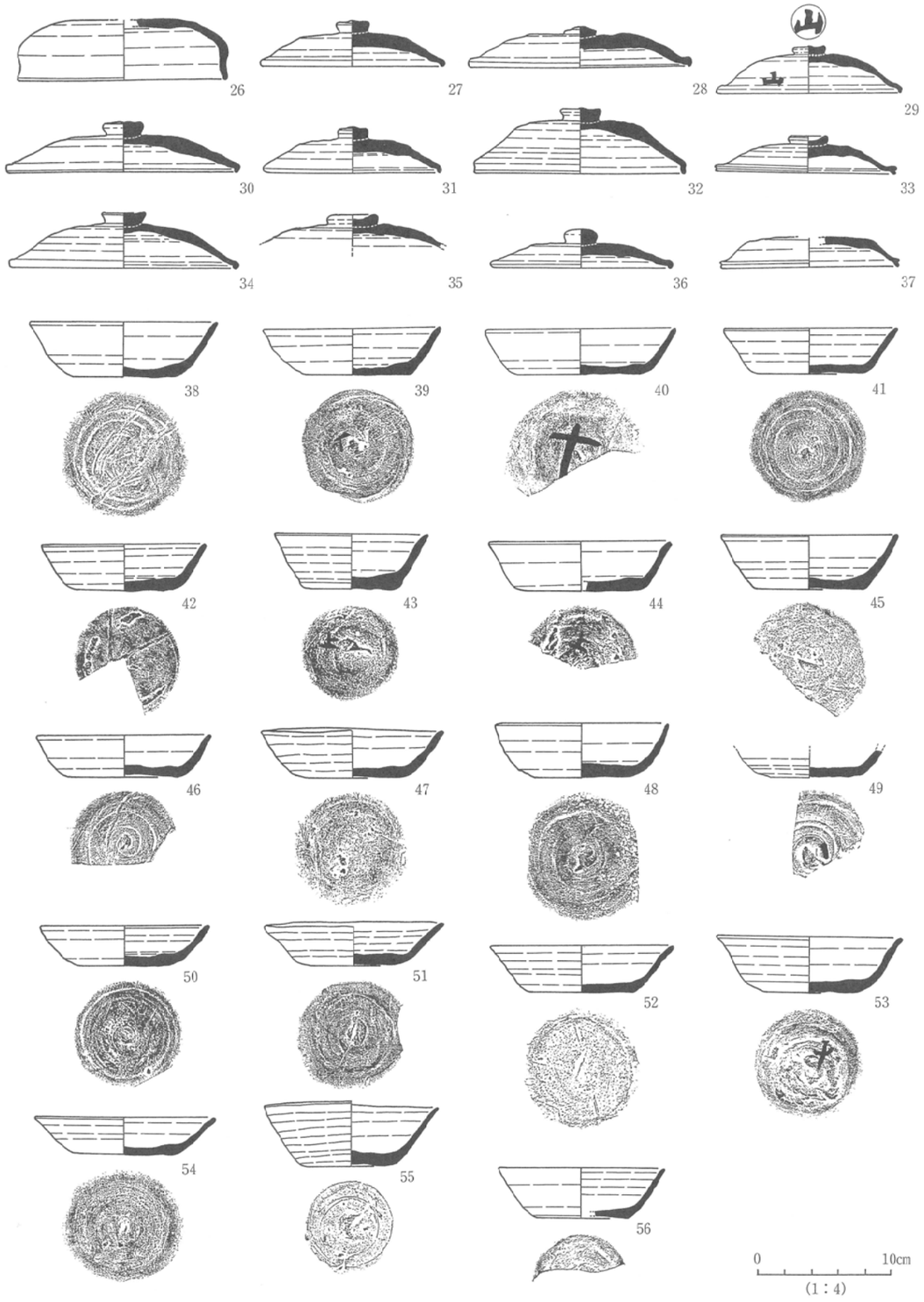
高台付坏にはヘラ切り離し後高台を付した68～75･77と、回転糸切り離し後高台を付した76がある。坏身の浅い68・75と深い69・70・73に区別出来る。底部から口縁まで直線的に立ち上がり、断面形が皿形や箱形になる。糸切りは丸みを持ちやや球形を呈す。

坏形土器で特殊な器形を示す双耳坏が出土している。高台付坏にヘラケズリ痕が明瞭な耳を付し、安定した形である。底部の切り離しは糸切りで底部から口縁へ丸みを持った立ち上がりである。79～81は双耳坏の耳部である。全面にヘラケズリによる調整痕を残す。

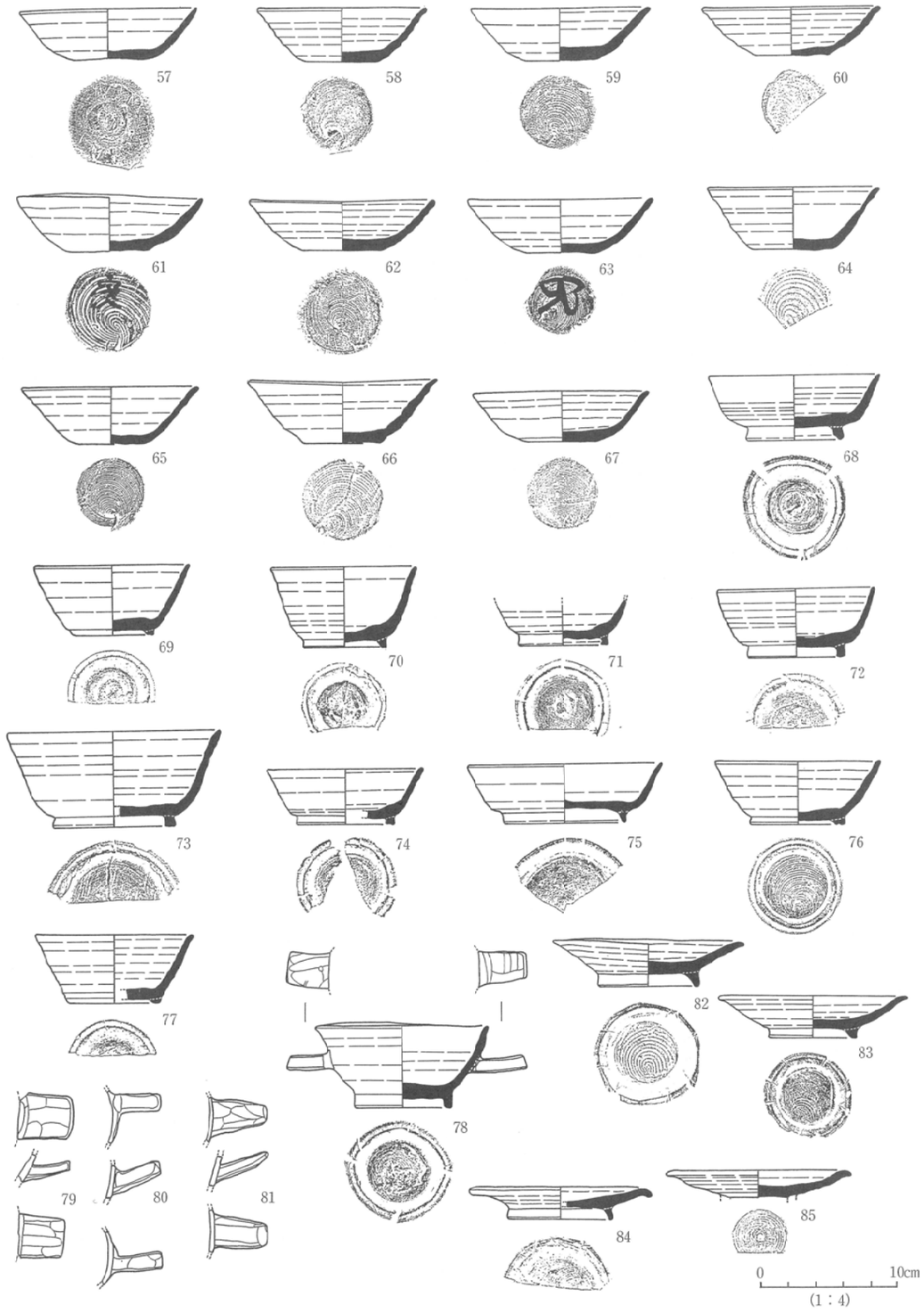
皿は４点(82～85)図示出来た。皿はすべて底部の切り離しが回転糸切りで、82・83は硯に転用、84には口縁に油脂が付着している。

壺は６点出土した。小型の壷(86・87)と大型(88～93)の壷である。88は長頸壷と考える。91は四耳壷である。肩部４カ所に幅1.6㎝、長さ3.8㎝の耳が付し、耳には径６㎜の穿穴が施されている。

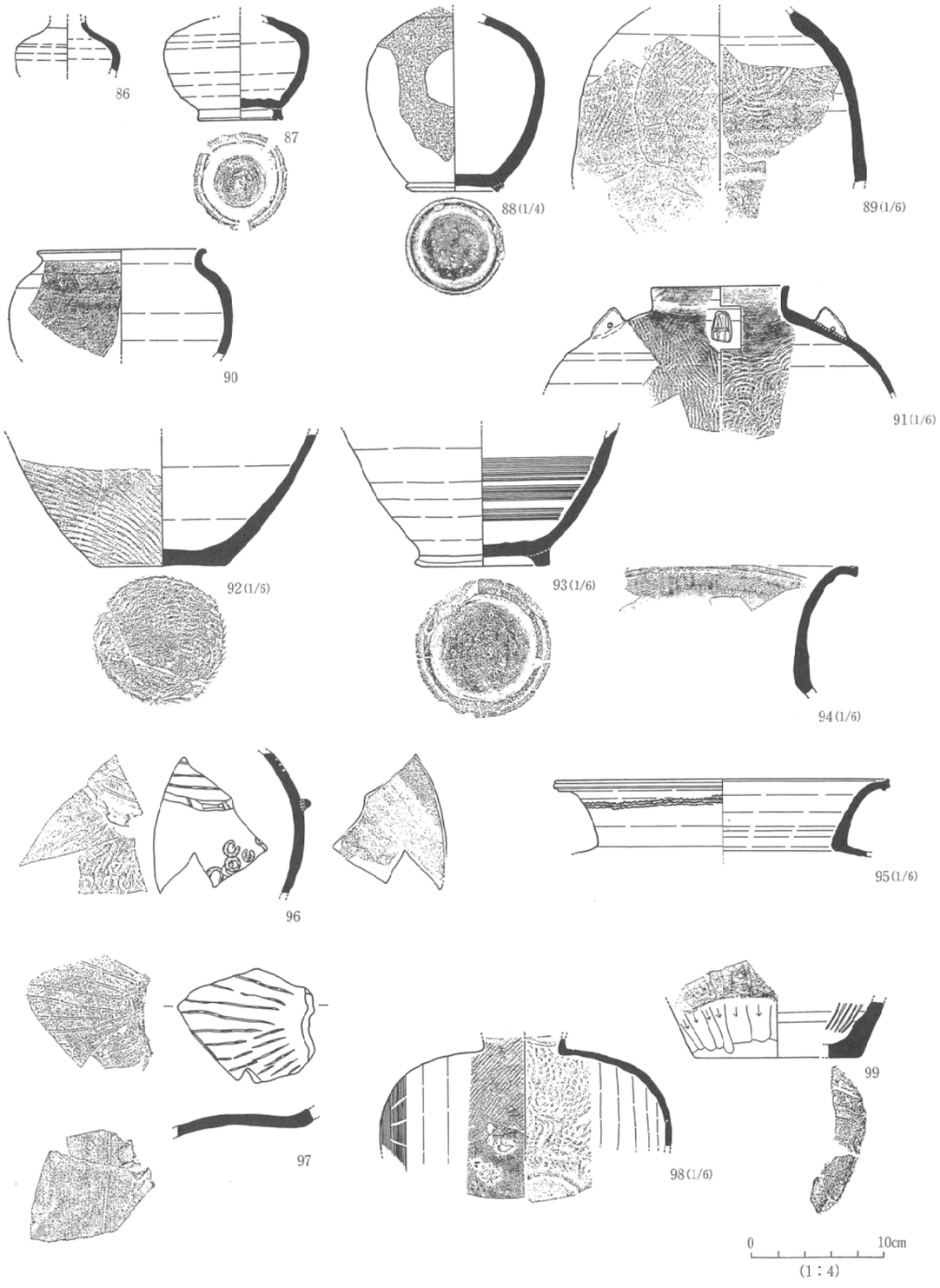
甕（94・95・99～102）は外面を条線状叩き、内面に青海波アテ痕が観察される。94・95は甕の口縁部で、頸部に青海波の条線が引かれている。96・97は鳥形土器である。羽根の条線と胸部羽の模様が施されている。平成６年度に調査が実施された堂田遺跡で出土したものと同類である。98は横瓶である。閉栓部を明瞭に観察される。



第16図　出土遺物(2)須恵器蓋・須恵器坏



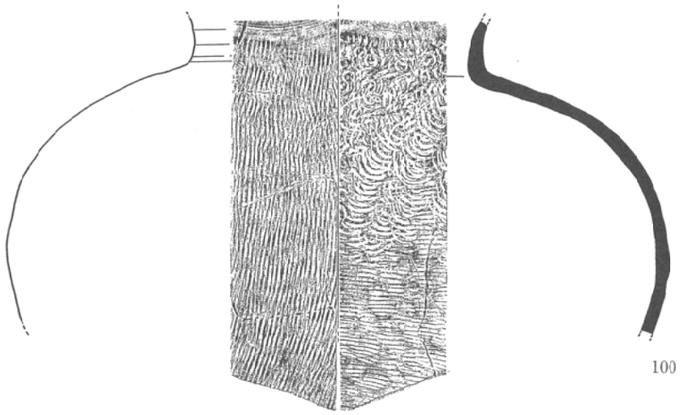
第17図　出土遺物(3)須恵器坏・須恵器皿



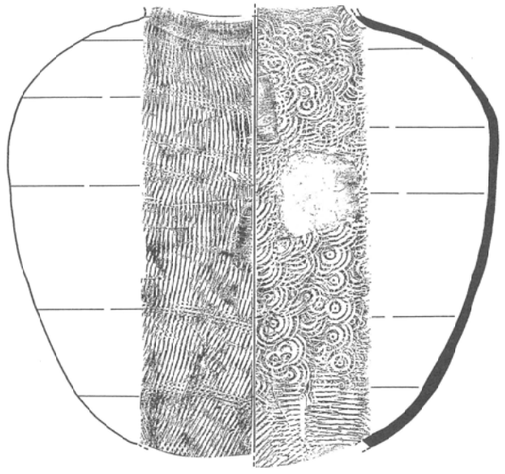
第18図　出土遺物(4)須恵器壺・須恵器甕

表 4　北目長田遺跡遺物観察表(2)

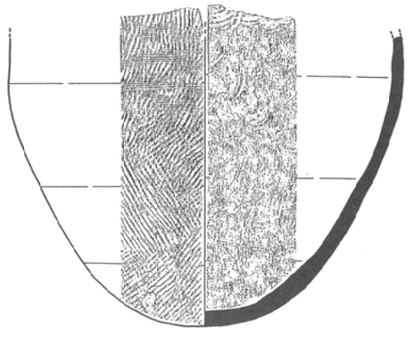
挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点・登録番号		備考
16	52	須恵器	杯	138	72	34	3	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD1294Y		ヘラ起こし痕
	53			140	75	42	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	6T-1Ⅲ		ヘラ起こし痕・墨書「＋」
	54			136	71	38	3	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	北区Ⅲ		ヘラ起こし痕
	55			130	64	47	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455Y	RP49	ヘラ起こし痕
	56			125	70	37	8	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD708F1	RP60	
17	57			130	54	37	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD768F1	RP87	
	58			124	54	39	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK400Y	RP91	
	59			132	51	37	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK703F2	RP105	
	60			130	54	35	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK100TF1	RP122	
	61			138	60	42	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK100TF1	RP121	墨書「濱」
	62			136	56	35	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SD408F1	RP86	
	63			136	52	39	5	糸切	ロクロ	ロクロ	Ⅰ-5Ⅲ		墨書「呪」
	64			127	57	45	4	糸切	ロクロ	ロクロ	4T-5Ⅲ		
	65			130	50	42	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK383F		
	66			140	58	44	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK67TF2		還元焔焼成不十分
	67			128	52	37	3	糸切	ロクロ	ロクロ	H-6Ⅲ	RP93	
	68		高台付坏	126	58	47	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SX338F1		
	69			114	60	51	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK455Y	RP49	
	70			108	61	58	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	C-7Ⅲ		
	71				64		4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	EP446Y	RP37	ヘラ起こし痕
	72			116	70	50	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	A-1Ⅲ		
	73			158	90	69	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	A-5Ⅲ		
	74			116	66	41	6	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK341F2		
	75			143	90	43	4	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD387F2		
	76			122	58	46	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD387F2	RP83	
	77			116	66	50	5	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	北区Ⅲ		
	78		双耳坏	128	71	61	5	糸切	ロクロ	ロクロ	Ⅰ-3Ⅲ	RP64	
	79									ヘラケズリ	3T-21Ⅲ		
	80									ヘラケズリ	E-4Ⅲ		
	81									ヘラケズリ	B-6Ⅲ		
	82		皿	140	75	31	7	糸切	ロクロ	ロクロ	SK999F1	RP101	硯に転用
	83			136	62	31	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SX338F1		硯に転用
	84			134	78	24	6	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	EP699F1		口唇に油脂付着
	85			136			8	糸切	ロクロ	ロクロ	A-7Ⅲ		
18	86		小壺				6		ロクロ	ロクロ	B-7Ⅲ	RP1	
	87				64		6	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	B-11Ⅲ		
	88		壺		98	200	11	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SD927F1	RP65	外面灰被り
	89		長頸壺				8		ロクロ・同心円アテ	ロクロ・条線状タタキ	SK350Y	RP99	
	90		壺	124			5		ロクロ	ロクロ	EP814F1		青海波文
	91		四耳壺	157			8		ロクロ・青海波アテ	ロクロ・条線状タタキ	SD336F1	RP2	
	92		壺		94		7	ヘラ切	ロクロ	ロクロ・格子目タタキ	3T-3Ⅲ		底部縄目痕
	93		(付高台)		103		8	ヘラ切	ロクロ・指頭痕	ロクロ	SD336F1	RP2	
	94		甕				9		アテ	ロクロ	北区Ⅲ		櫛描きによる青海波文
	95			504			10		同心円アテ	ロクロ	SD336F1	RP2	頸部青海波文
	96		壺(鳥形)				7		ハケメ	タタキ	SD1272F		竹管による刺穴、穿孔
	97						8		ロクロ	タタキ	SD1272F		羽模様ヘラ線引き
	98		横瓶	94			8		ロクロ・青海波アテ	ロクロ・格子目タタキ	A-1Ⅲ		
	99		壺		125		10	ヘラ切	ハケメ	ケズリ	北区Ⅲ		
19	100		大甕				11		アテ	格子目タタキ	SD387F1	RP80	内面青海波条線状
	101		甕	216		425			青海波アテ	格子目タタキ	SX338F1		
	102						12		青海波アテ	格子目平行タタキ	SD408F1	RP85	



100



101



102

0　10cm
(1：6)

第19図　出土遺物(5)須恵器甕

(4)　**赤焼土器**（第20～24図、図版15～22）

今次の調査で出土した遺物の中で最も出土量が多い遺物である。全体出土量の約76パーセントを示し、遺跡の性格を表す。器種は供膳具の坏と煮沸具を示す甕と堝である。

坏は須恵器と同様に３形態に分けることができ、図示点数が多いことから須恵器で分類した基準を基にして主な坏について記述する。

坏（第20～22図、図版15～19）

B-2-ａ類

(106・107・109・113・115・118・120・124・127・132・136・143・144・147・151・152・155・158・160・163)　口径が118～152㎜、底径が47～59㎜、器高が48～52㎜に計測される坏である。底部から口縁にかけて直線的に立ち上がる一群で、器厚は4～7㎜でやや厚いものもある。器面に明瞭なロクロ痕を示している。106の口縁下ではロクロによる器面調整で肉厚になる稜を作り出している。132の体部には墨書が、113は底径・口径・器高が1：2：1となり、均整のとれた器形を呈している。底部にはひらがなの「し」状の墨書が書かれており、製塩土器出土のＳＫ67Ｔ土壙Ｆ2層から検出され、製塩土器の時期を示唆できる。器面は２次加熱を受け赤色化する。118はやや大振りで色調が茶褐色を呈し、重量感がある。ＳＫ301土壙Ｆ1からの出土である。124には器内面に漆が薄く付着し、136にも内面に付着しており、掻きだしの痕跡を残している。ＳＫ340土壙Ｆ1からの出土である。

B-2-ｂ類

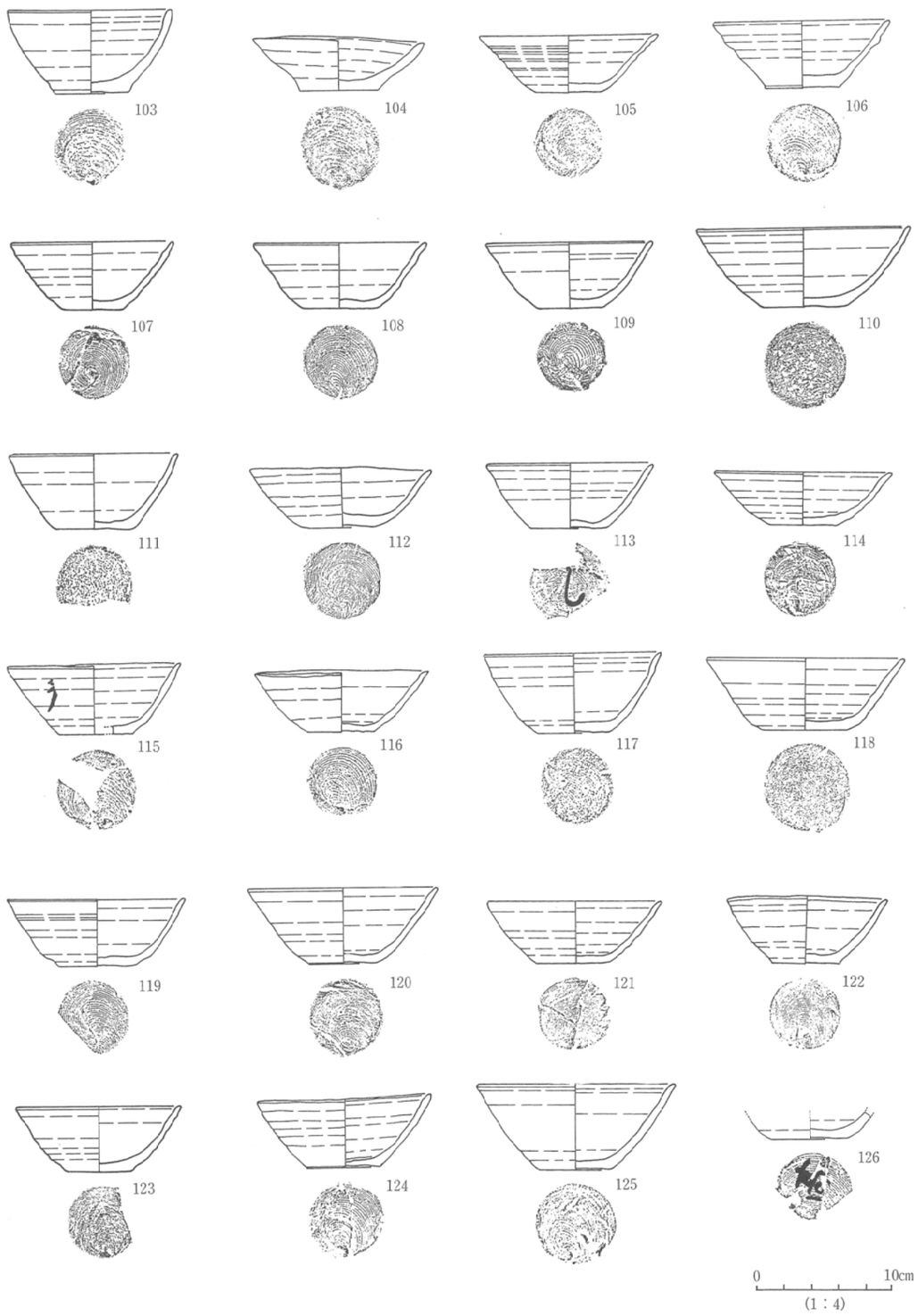
(103・104・110・111・116・117・119・121～123・126・128・129・142・148・150・154・156・164・166・167・169・170)

口径が119～158㎜、底径が46～68㎜、器高が39～66㎜に計測される坏である。底部から口縁にかけて丸みを帯びながら立ち上がる一群で、器厚は4～7㎜である。器面の調整でロクロ痕を明瞭に残し、器形の大きな坏は碗状になる。104は底径が39㎜と小さく、底部から口縁にかけて急激に外反し、器高が低く皿形となるものである。128は茶褐色を呈した焼成が良好で重量感をもつ坏である。ＳＢ２建物跡ＥＢ37Ｔ柱穴からの出土でＳＢ２建物跡の時期を示す。129の体部には「廣」墨書が大きく描かれている。164•166の内面には口唇に油脂が付着し、燈明に転用されたものと考える。164は器面がいびつで歪みの大きい坏である。

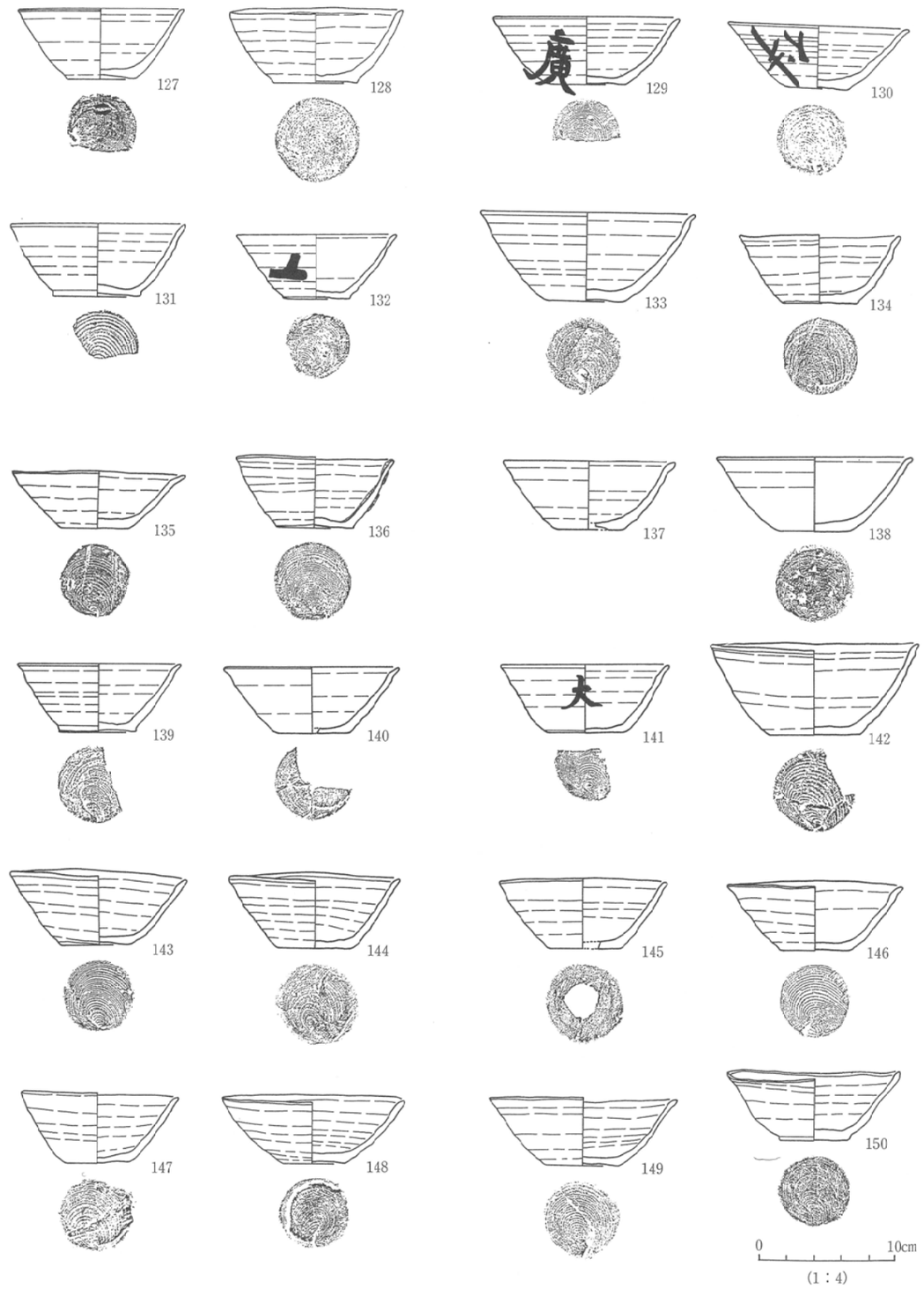
B-2-ｃ類

(105・108・112・114・125・130・131・133～135・137～141・145・146・149・153・157・159・161・162・165・168)

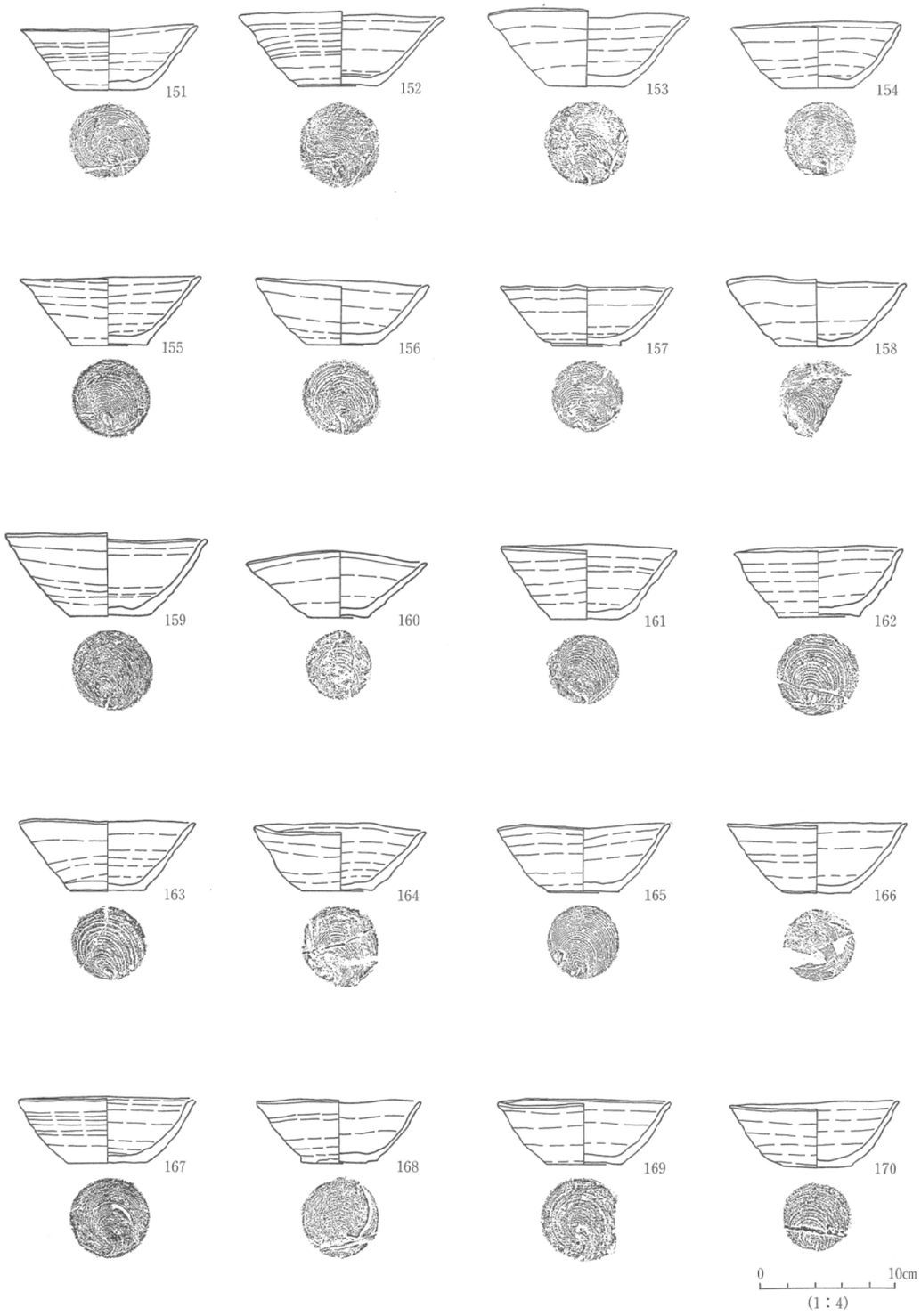
口径が122～159㎜、底径が46～66㎜、器高が39～65㎜に計測される坏である。底部から口縁にかけて緩やかに立ち上がり、口唇で外反する一群で、器厚は3～6㎜である。器面の調整には内外面共明瞭なロクロ痕を残し、口唇端が大きく外反するものもある。112・114・161 焼成時の環元焔が不十分なことから赤色化する。緻密な胎土や堅牢な焼成から須恵器の範疇になると思われるがここでは赤焼土器とした。137には口唇内面に油脂が付着してい



第20図　出土遺物(6)赤焼土器坏



第21図　出土遺物(7)赤焼土器坏



第22図　出土遺物(8)赤焼土器坏

表 5　北目長田遺跡遺物観察表(3)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点・登録番号	備考
20	103	赤焼土器	坏	121	54	61	7	糸切	ロクロ	ロクロ	SK400F1　RP90	
	104			127	54	39	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK340F2	
	105			132	49	41	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SX43TF1	
	106			132	55	48	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SX43TF1	
	107			118	44	49	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK301F1	
	108			126	55	48	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK399Y	
	109			123	48	48	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK148GF1　RP110	
	110			158	61	57	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK148GF1　RP109	
	111			124	58	55	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK49F2	
	112			132	55	44	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1　RP77	還元焔不十分
	113			124	57	48	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK67TF2	墨書「し」
	114			131	51	39	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1	
	115			129	56	52	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK370F1	墨書不明
	116			128	50	43	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK370F1	
	117	黒色土器		131	54	58	7	糸切	ロクロ	ロクロ	SK400F1	
	118	赤焼土器		146	62	52	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK305Y　RP17	
	119			134	55	49	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1　RP72	
	120			140	50	45	5	糸切	ロクロ	ロクロ	RK385F1　RP84	
	121			129	54	45	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK384Y　RP107	
	122			119	51	48	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK340F1　RP129	
	123			122	48	47	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD428F1	
	124			128	56	50	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD404F1　RP113	漆付着
	125			121	55	61	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD464F1	
	126				58		7	糸切	ロクロ	ロクロ・ハケメ	3T-44Ⅲ	墨書「高」
21	127			124	52	51	5	糸切	ロクロ	ロクロ	EP397F	墨書不明
	128			129	62	54	6	糸切	ロクロ	ロクロ	EB37TF	
	129			139	57	50	4.5	糸切	ロクロ	ロクロ	SX111TF1	墨書「廣」
	130			136	46	47	4	糸切	ロクロ	ロクロ	1-3Ⅲ	墨書「伴」
	131			131	66	53	5	糸切	ロクロ	ロクロ	4T-5Ⅲ	二次焼成痕
	132			120	50	47	4	糸切	ロクロ	ロクロ	5T-5Ⅲ	墨書不明
	133			159	55	65	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK67TY	
	134			120	55	50	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK75TF2	
	135			128	50	42	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK390F1	
	136			118	58	52	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK340F1　RP123	内外面漆付着、掻出痕
	137			127	50	50	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK293F1　RP4	
	138			144	50	54	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK304Y　RP12	
	139			122	56	50	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD2TF	
	140			130	53	49	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD560F1	
	141			126	58	50	6	糸切	ロクロ	ロクロ	2T-14Ⅲ	墨書「大」
	142			153	68	66	6	糸切	ロクロ	ロクロ	3T-44Ⅲ	
	143			132	52	50	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK10TF	
	144			126	56	52	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK75TF2	
	145			122	54	51	5	不明	ロクロ	ロクロ	SK75TF2	底部穿孔
	146			130	52	47	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK75TF2	
	147			116	46	51	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK400F1	
	148			136	46	50	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK297Y　RP11	墨漆付着
	149			139	54	50	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK314F2　RP40	
	150			128	50	45	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK321F2　RP52	
22	151			130	50	48	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK321F2　RP53	
	152			152	59	55	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK321F4　RP54	
	153			148	56	52	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK321F4　RP56	
	154			125	54	44	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1　RP71	
	155			133	55	49	7	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1　RP74	
	156			128	52	46	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F2　RP75	
	157			128	50	42	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK349F2　RP96	
	158			132	54	48	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK301F1	

る。145の底部中心には径25㎜の穿孔が外面から作意的に施されている。ＳＫ75Ｔ土壙Ｆ２からの出土である。162には内面に薄く漆が付着している。

甕（第23・24図、図版19～22）

甕には大型で煮沸形態を示し、丸底(175)、長胴形(176)を呈したものと、平底、丸胴形を呈す(181・188・196・200)である。小型で平底のもの(171～174・182～187・189～195・197～199)がある。外面に煮沸によって煮こぼれたススが付着している。長胴形をした大型の甕は175・176の２点で、175は外面を格子目状叩き締めとなり、内面のアテ痕は平行条線を呈している。176は胴部外面にヘラ削りの痕跡を呈し、内外面共刷毛目調整が施されている。小型の甕は口径が150㎜前後、底径が70㎜前後、器高が140㎜前後である。底部の切り離しを174は静止糸切り、他は回転糸切りとし、体部から口縁にかけて緩やかに立ち上がる。口縁部で「く」の字状に外反し、口唇で垂直につまみ立ち、口唇内面には煮沸による炭化物が付着している。

堝（第23図、図版19・20）

堝は４点図示できた。体部から口縁にかけての破片である。内外面とも明瞭なロクロ整形され、179・180には体部外面に平行条線の叩き目を、内面に同じ条線状のアテ痕が施されている。180には刷毛目痕がある。

(5)　緑釉陶器（第25図、巻頭図版上）

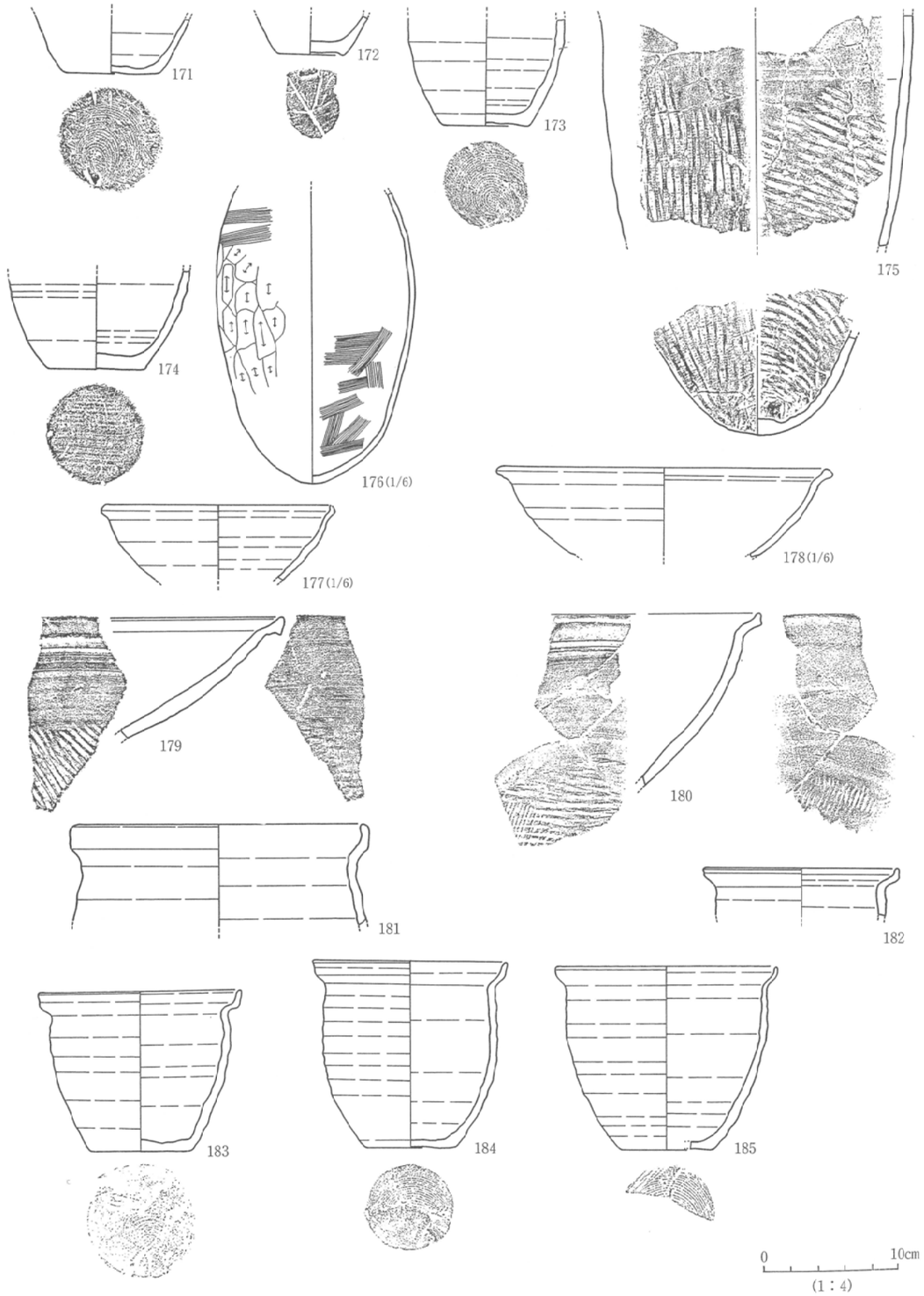
３点出土している。これらは供膳形態としての皿形の器形で、素地は灰色、硬質の須恵器質である。201・202は底部を削り出しによる高台とし、内側縁辺部も削り出し、断面が三日月形となる同一個体である。器形は底部から急激に立ち上がり、口唇で大きく外反する。口縁部は稜をもち輪花がわずかに施している。施釉は濃緑釉を厚く手持ち掛け釉としている。201は口縁部に２次加熱を受け、施釉が溶け素地の須恵質陶土が観察される。滋賀県近江産系の緑釉陶器と比定され、時期は猿投窯の黒笹14号窯期に比定され（註１）、ＳＫ399土壙床面からの出土で土壙の時期10世紀後半が当てられる。203は包含層からの出土であるが201と釉調が異なった緑釉陶器であることから図示した。底部部分の破片であるが釉調は淡緑釉刷毛塗りされ、輪高台となる。愛知県鳴海産系に比定される。

(6)　青磁・染付（第25図、図版22）

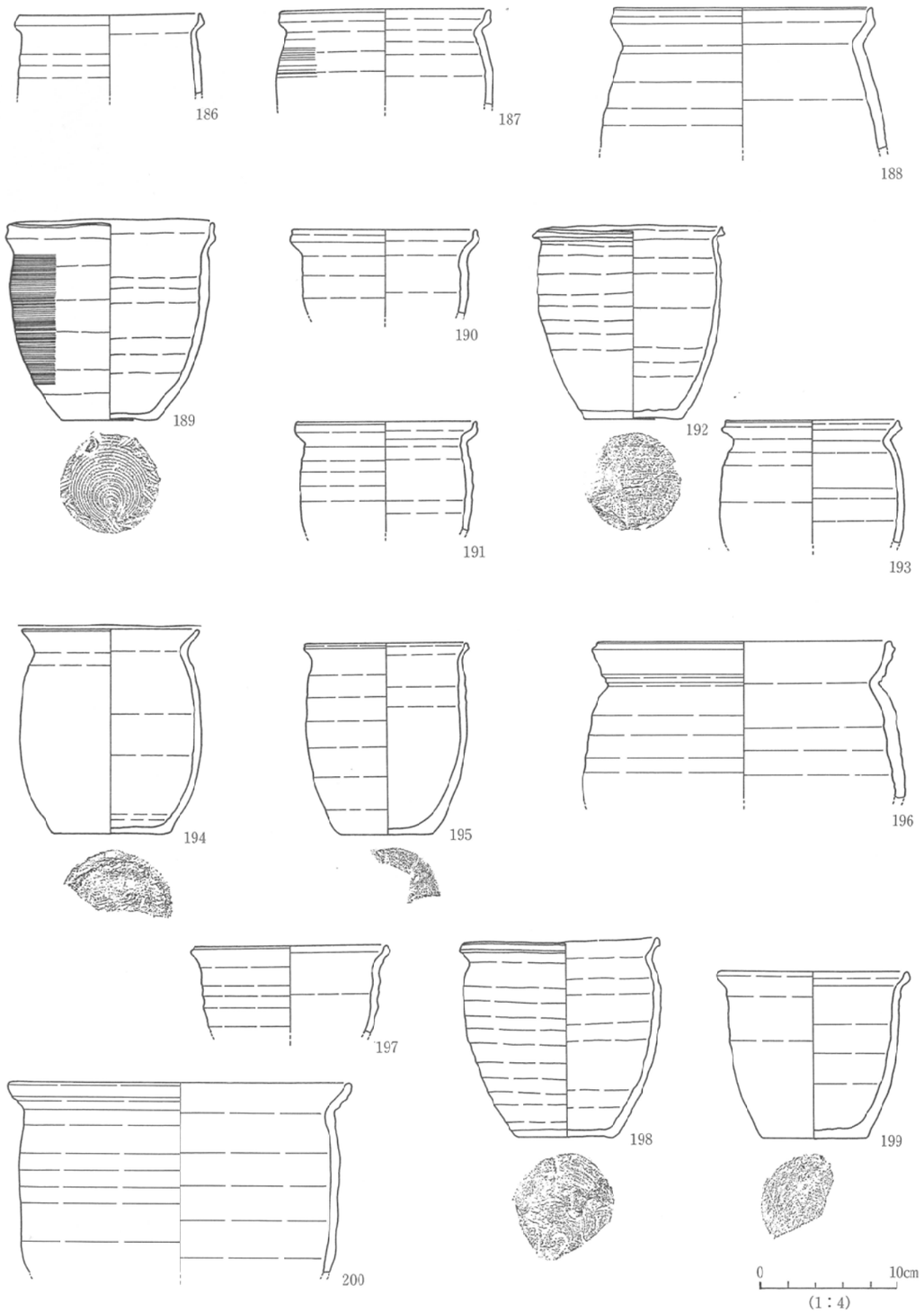
青磁は３点出土、染付は２点が包含層から出土している。204は蓮弁文碗の口縁部である。体部は丸くなり、口縁でくの字状に折れまがる。蓮弁は弁先が尖らず丸くなり、幅広いヘラケズリに作っている。205は口縁下に片切彫による雷文帯を持つ碗である。釉掛けは厚く緑黄色を呈す。206は碗の底部である。見込み内面に草花文のスタンプが釉下に施されている。竜泉窯系青磁である。染付は草花を配した皿(207)と碗(208)である。

(7)　製塩土器（第25図、巻頭図版下、図版22）

３個体が図化できた。210は図上復元による実測図である。バケツ形を呈し、底部から口



第23図　出土遺物(9)赤焼土器甕・赤焼土器堝



第24図　出土遺物(10)赤焼土器小型甕・赤焼土器甕

— 42 —

縁にかけて垂直に立ち上がり、胴部上半でやや外側へ膨らむ。全体を輪積みに作り器内面には篦による器面整形痕が観察され、底部外周には指頭による整形痕が残る。口唇は上面をヘラによってケズリ整形している。ＳＫ67Ｔ土壙F2からの出土である。時期は土壙の形態や、判出土器により10世紀第１四半期に比定出来る。211・212は底部のみの資料であるが底部外面が砂底となり輪積みが明瞭に観察される。212はＥＰ426柱穴に敷かれたように検出されたもので、柱の根固めとしたものと考える。

(8)　中世陶器（第25図209、図版22）

10条一単位の擂り目をもつ珠洲焼系の陶器である。体部上半から擂り目を描き、口縁部との境で体部が細くなる。口唇端部ばやや丸みを持ち内面との境を作り出している。

(9)　土製品（第25図、図版22）

土錘が出土している。土錘は長さ80㎜以上、最大径44㎜のもの(213・214)と、長さ52～73㎜、最大径8～10㎜(215～219)及び長さ23～53㎜、最大径11～22㎜(220～227)となる３種類の土錘である。調査区域全域から出土したが網の重りとして利用されたものと考える。

(10)　鉄製品（第25図228・229、図版22）

刀子２点がＳＸ43Ｔ性格不明遺構の覆土から出土した。両端は欠落しているが、229は柄部が明瞭に判別できる。刃部は水平で断面は三角形となり、柄部は四角形となる。

(11)　石製品（第26図230～248、図版22・23）

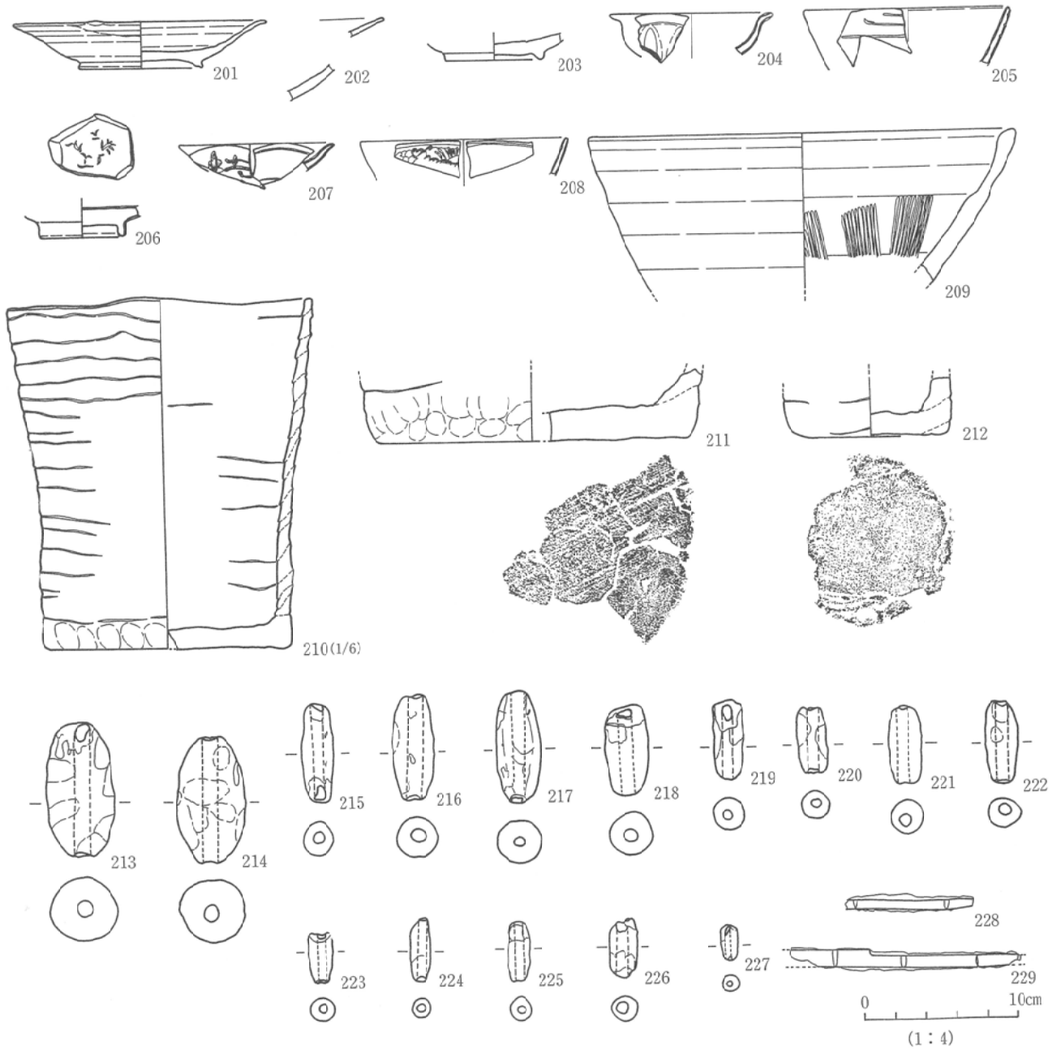
石製品は紡錘車(230)、砥石(231～245)、弾(246～248)である。紡錘車は調査区南西部のＨ-4グリッド３層上面で検出した。断面を四方形とし、直径46㎜、厚さ21㎜に中心には径7㎜の軸孔が穿っており、糸を紡ぐものと考える。砥石は置き砥と持つものがある。233は下げ砥石と呼称されるもので官人が腰に下げたものと思われる。231と237はＳＤ408溝跡から出土した置き砥と考える。弾は90㎜と45㎜前後の丸い石で、全面が磨かれている。用途不明である。包含層と溝跡からの出土である。

出土遺物の中には墨書が描かれた土器がある。第27図に集成したが、描かれた土器の種別は須恵器、黒色土器、赤焼土器である。描かれた部位は底部や体部の外面にあり、圧倒的に底部が多い。判読できる文字は「千万」・「万」・「十」・「一」という数字を現すもの、「山」・「上」・「壬」・「中」・「力」・「口」・「高」「濱」「呪」の漢字のほか「つ」や「し」というひらがな状の文字が読める。習書または所有を示す文字と考える。

6　まとめ

今次の調査で確認された成果は掘立柱建物跡２棟、土壙184基、溝状遺構396条、性格不明遺構６基のほか多数のピットが登録された。出土遺物は整理箱にして115箱を数え、遺跡の性格を示す情報が多様であることが示されている。遺構では梁行三間以上で桁行七間の大型建物跡や、一次調査で確認できた数単位にまとまる溝状遺構、これらを囲むように土

壙が存在し、平安時代10世紀前半を中心とした集落の一端を示していると考える。また、遺物では平安時代に開拓民として五道から配置された柵戸の生活が窺える。また、製塩土器がまとまりをもって出土したことは海岸での塩作りが行われていたことを示す。遺跡の所在する遊佐町には本遺跡と性格が似ている遺跡が多い。これらは平安時代出羽国にかかわる開拓の歴史といえる。５章では今次の調査の成果を基に、検出遺構の出土遺物からの組成と変遷、出土遺物の時期的考察、庄内地方での製塩土器出土遺跡をまとめ、製塩の意義や平安期の遺跡と記紀に記述された項目を参考に、遊佐町を含む飽海郡について考察する。



第25図　出土遺物(11)緑釉陶器・青磁・染付・中世陶器・製塩土器・土製品・鉄製品

第26図　出土遺物(12)石製品

表 6　北目長田遺跡遺物観察表(4)

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値(mm) 口径	底径	器高	器厚	底部切	調整技法 内面	外面	出土地点・登録番号	備考
22	159	赤焼土器	杯	147	58	60	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SK301F1	
	160			134	45	48	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SK313F1　RP38	
	161			130	52	54	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD387F1　RP81	
	162			124	60	47	6	糸切	ロクロ・ハケメ	ロクロ・ハケメ	SD410F1	漆付着
	163			130	54	52	5	糸切	ロクロ	ロクロ	SX43TF1	
	164			126	52	43	4	糸切	ロクロ	ロクロ	SX43TF1	油付着、灯明皿に転用
	165			128	52	50	4.5	糸切	ロクロ	ロクロ	SD813F1　RP59	
	166			134	50	51	4	糸切	ロクロ	ロクロ	F-10III	漆付着
	167			130	58	47	6	糸切	ロクロ	ロクロ	I-3III　RP67	
	168			122	56	46	3	糸切	ロクロ	ロクロ	SK337F1　RP78	
	169			128	55	45	5	糸切	ロクロ	ロクロ	I-3III　RP69	
	170			124	50	42	4	糸切	ロクロ	ロクロ	2T-15III	
23	171		甕		70		5	糸切	ロクロ	ロクロ	EB58Y	加熱による外面剥離
	172				49		5	木葉痕	ロクロ	ロクロ	SK324F1　RP61	
	173				64		6	糸切	ロクロ	ロクロ	SK100TF1　RP119	
	174				70		6	静止糸	ロクロ・ハケメ	ロクロ	2T-13III	煤付着
	175						7		ロクロ・アテ	ロクロ・タタキ	SK374F1	
	176						6		ハケメ	条線状タタキ・ケズ	K-4III　RP94	煤付着
	177		鍋	338			10		ロクロ・アテ・ハケメ	ロクロ・タタキ・ハケメ	SK374F1	
	178			480			9		ロクロ・アテ	ロクロ・タタキ	A-16III	
	179								ハケメ	条線状タタキ	SK304F1　RP14	
	180						8		条線状アテ・ロクロ	条線状タタキ・ロクロ	3T-51III	
	181		甕	220					ロクロ	ロクロ	SK321F3　RP58	
	182			144					ロクロ	ロクロ	SK399F1	
	183			152		117	9		ロクロ	ロクロ	4T-6III	
	184			146	67	140	7		ロクロ	ロクロ	SX338F1	口唇部煮沸の煤あり
	185			166	70	136	6		ロクロ	ロクロ	SK370F1	
24	186			132					ロクロ	ロクロ	SK298F1　RP20	
	187			154			5		ロクロ	ロクロ	SK455F2　RP48	煤付着
	188			190			9		ロクロ	ロクロ	SD404F1　RP112	
	189			151	70	146	6		ロクロ	ロクロ・ハケメ	SD404F1　RP114	煤付着
	190			134					ロクロ	ロクロ	SD387F2	
	191			132					ロクロ	ロクロ	SD464Y　RP43	
	192			134	72	140	5	静止糸	ロクロ	ロクロ	F-6III	
	193			126		90			ロクロ	ロクロ	SK364F1	
	194			130	86	147	6	ヘラ切	ロクロ	ロクロ	SK378Y　RP88	煤付着
	195			120	66	138	6	ケズリ	ロクロ	ロクロ	SK324F1　RP61	
	196			213			10		ロクロ	ロクロ	SD412F	
	197			158					ロクロ	ロクロ	SD387F2　RP82	
	198			142	72	139	6	糸切	ロクロ	ロクロ	SX338F1	
	199			140	78	120	5	糸切	ロクロ	ロクロ	D-3III　RP36	外面再加熱、内面煤付着
	200			230			8		ロクロ	ロクロ	SD560F1	
25	201	緑釉陶器	皿	166	82	30	3				SK399Y	手持ち浸け釉・近江産
	202										SK399F1　RP89	かけ釉、濃緑釉
	203				64		6				北区III	鳴海産
	204	青磁	碗	106			5				南区III	蓮弁文
	205			136							北区III	雷文帯
	206				55						北区III	内底に刻文
	207	染付	皿	82							3T-4III	草花文、界線、2次加熱
	208	(青花)	碗	136							北区III	つなぎ草花文、界線
	209	中世陶器	擂鉢	280							南区III	10条一単位の擂目
	210	製塩土器	バケツ形	305	247	343					SK67TF2	輪積み
	211				200						SK44TF1　RP118	指頭痕・砂底
	212		コンロ形		100						EP426F1　RP18	輪積み巻き上げ・砂底

表 7　北目長田遺跡遺物観察表(5)

土製品

挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値 (mm, g) 長さ	最大径	軸径	重さ	出土地点・登録番号	備考
25	213	土製品	土錘	88	44	10	152	B-2III	指頭痕
	214			82	44	10	143	B-3III	指頭整形
	215			64	20	7	26	SK401F1	
	216			69	28	10	41	A-7III	
	217			73	29	7	56	H-4III	
	218			59	29.5	9	44	3T-4III	
	219			52	20	7	21	SD42TF1	
	220			43	21	7	15	B-20III	
	221			50	22	8	21	I-5III	
	222			53	21	8	20	南区III	
	223			33	11	5	7	南区III	
	224			41	14	5	6	北区III	
	225			40.5	14	5	6	北区III	
	226			49	18	8	10	2T-15III	
	227			23	11	3	2	南区III	

鉄製品

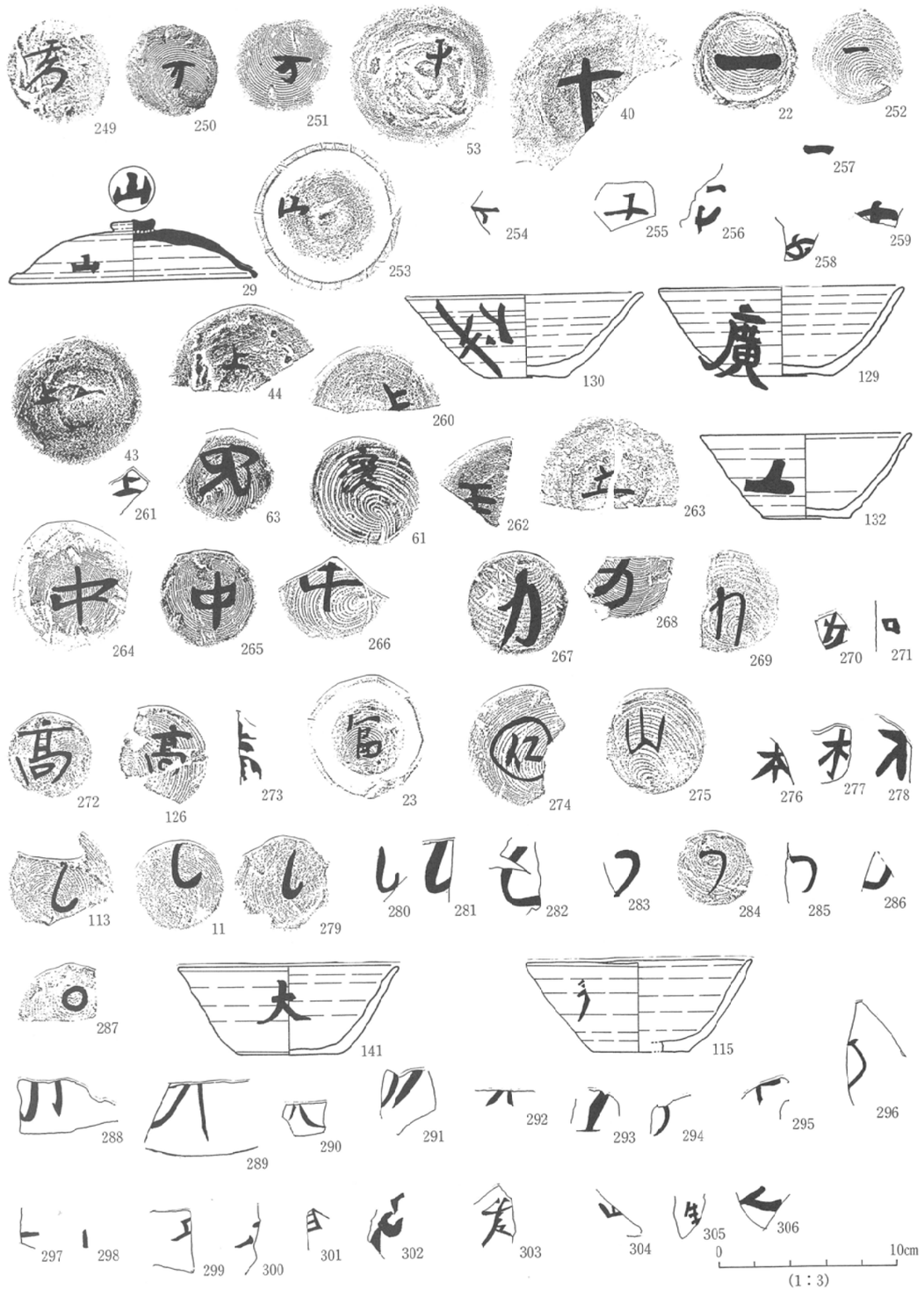
挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値 (mm) 長さ	刃幅	峯幅	出土地点・登録番号	備考
25	228	鉄製品	刀子	82	6	2	SX43TF2　RM117	刃部
	229			151	10	3	SX43TF1　RM116	柄部

石製品

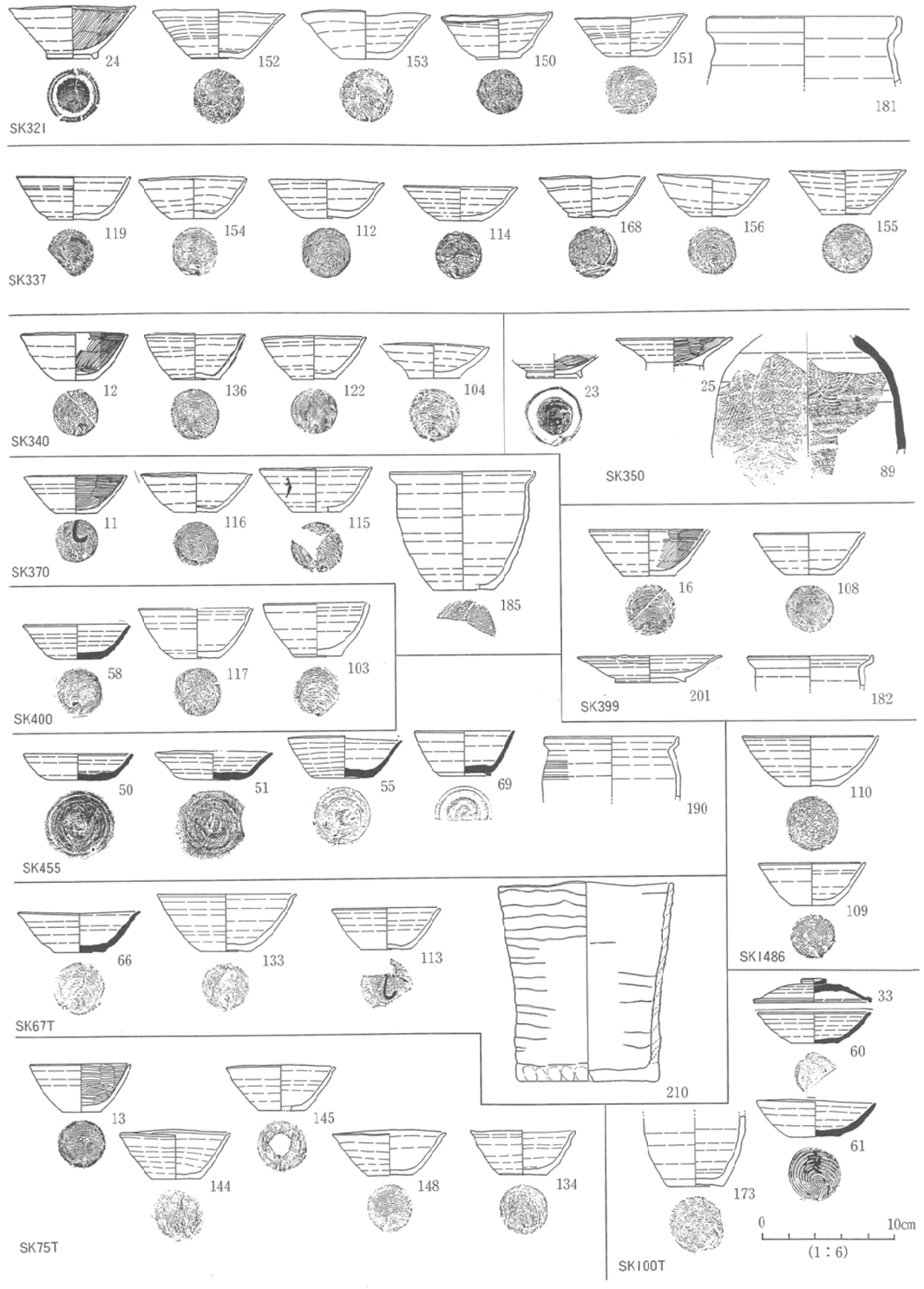
挿図番号	遺物番号	種別	器種	計測値 長さ(mm)	幅(mm)	重さ(g)	出土地点・登録番号	備考
26	230	石製品	紡錘車	46	46	59	H-4III	
	231		砥石	101	67	364	SD408F1　RQ102	
	232			85	54	156	北区III	条線痕
	233			49	32	35	SD676F1	下げ砥石
	234			45	42	57	D-7III	
	235			51	22	24	北区III	
	236			85	20	45	南区III	
	237			148	156		SD408F　RQ103	
	238			60	36	51	北区III	条線痕
	239			52	45	30	北区III	条線痕
	240			100	70	315	SK399F4	
	241			65	51	93	北区III	
	242			55	58	94	北区III	
	243			79	53	141	5T-5III	被加熱
	244			60	43	96	北区III	
	245			82	53	416	B-7III	
	246		弾	90	80		SD410F1	
	247			47	43	77	B-1III	
	248			42	40	57	SD428F	

墨書土器

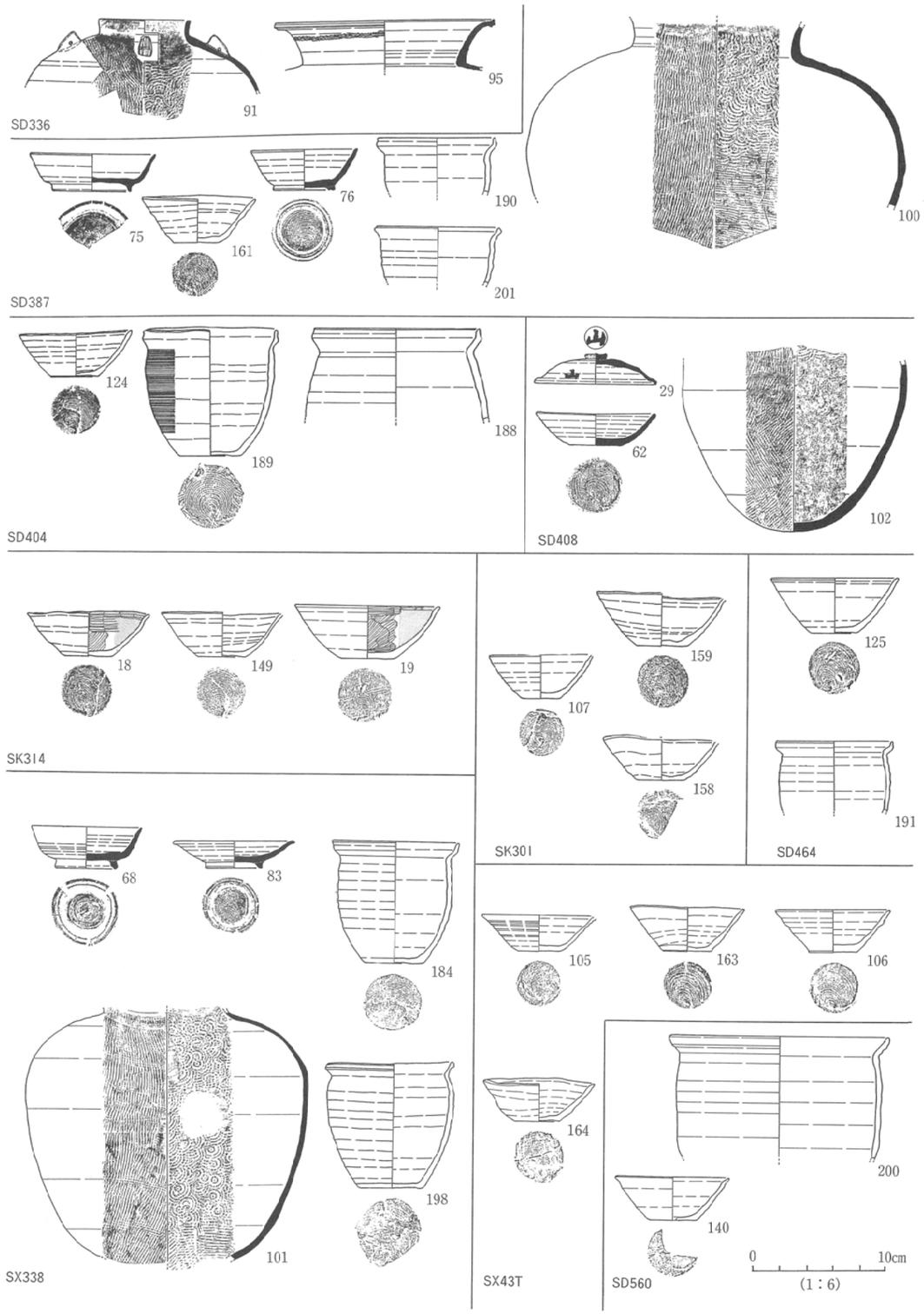
挿図番号	遺物番号	種別	器種	部位	墨書名	出土地点・登録番号	備考
27	249	赤焼土器	坏	底部	「千万」	E-9III	
	250	須恵器	坏	底部	「万」	EP707F	
	251		坏	底部	「万」	3T-23III	
	252		坏	底部	「一」	SD762F1	
	253		坏	底部	「山」	3T-48III	
	254	赤焼土器	坏	底部		B-5III	
	255		坏	底部	「十」	F-4III	
	256		坏	底部		I-8III	
	257		坏	体部	「一」	SD428F	
	258		坏	体部		SK350F1	
	259		坏	体部	「十」	EB59TF	
	260	須恵器	坏	底部	「十」	I-7III	
	261	赤焼土器	坏	底部	「上」	B-6III	
	262	須恵器	坏	底部	「壬」	南区III	
	263		坏	底部		D-6III	
	264		坏	底部	「中」	D-2III	
	265		坏	底部	「中」	F-3III	
	266		坏	底部	「中」	I-4III	
	267	赤焼土器	坏	底部	「力」	5T-5III	
	268	須恵器	坏	底部	「力」	北区III	
	269	赤焼土器	坏	底部	「力」	6T-2III	
	270	黒色土器	坏	体部	「力」	3T-43III	
	271	赤焼土器	坏	体部	「口」	G-5II	
	272	黒色土器	坏	底部	「高」	3T-44III	
	273	須恵器	坏	体部		3T-42III	
	274	赤焼土器	坏	底部		SD12TF	
	275		坏	底部		5T-1III	
	276		坏	体部		SX375F1	
	277		坏	底部		SD676F1	
27	278		坏	体部		I-2II	
	279		坏	底部		北区III	
	280		坏	体部	「し」	H-2III	
	281	黒色土器	坏	体部	「し」	SD248F	
	282	赤焼土器	坏	底部	「し」	I-3III	
	283	黒色土器	坏	体部	「つ」	F-4III	
	284	赤焼土器	坏	底部	「つ」	EP209F	
	285		坏	底部	「つ」	D-1III	
	286		坏	体部		E-8III	
	287		坏	底部	「○」	3T-47III	
	288		坏	体部		I-4III	
	289		坏	体部		SX1491F	
	290		坏	底部		E-4III	
	291		坏	体部		SK334F1	
	292	須恵器	坏	体部		E-4III	
	293	赤焼土器	坏	体部		北区III	
	294		坏	体部		F-2III	
	295		坏	体部		3T-24III	
	296	須恵器	坏	体部		SK1486F2	
	297	赤焼土器	坏	体部		F-4III	
	298		坏	体部		SK350F1	
	299		坏	体部		I-1III	
	300		坏	体部		F-9III	
	301		坏	体部		B-5III	
	302		坏	体部		SK350F　RP38	
	303		坏	体部		SK298F1	
	304		坏	底部		3T-43III	
	305		坏	体部		3T-43III	
	306		坏	体部		SD336F	



第27図　墨書文字集成



第28図　土器組成図(1)



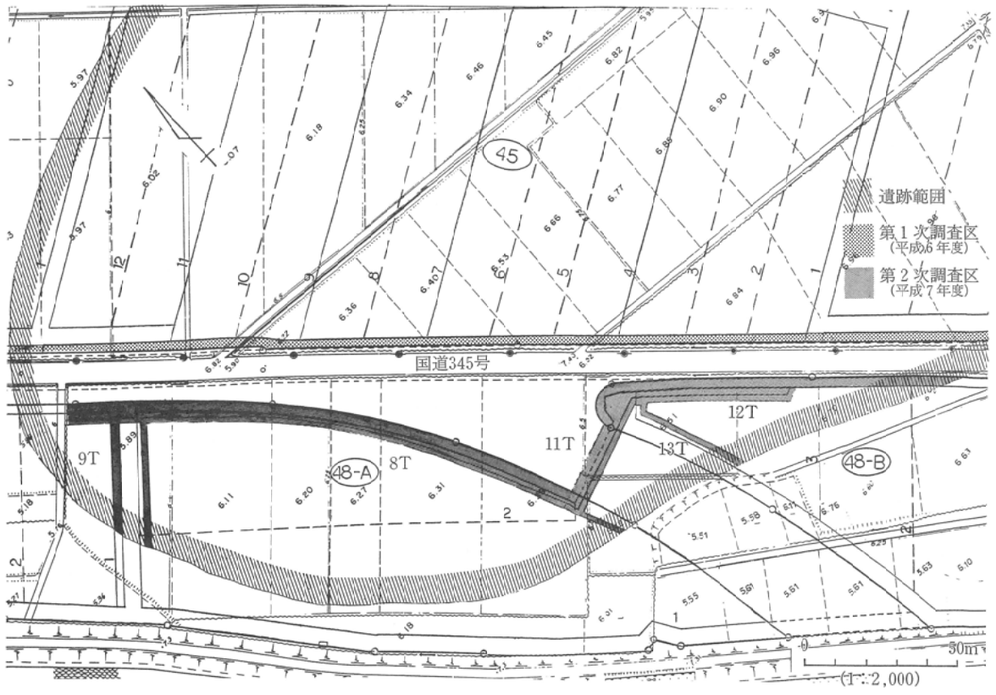
第29図　土器組成図(2)

Ⅳ　橇待遺跡

1　調査の概要

今回の調査は、平成６年度に続いての第２次発掘調査である。遺跡域の南端部分1,500 ㎡を調査対象区としており、水路設置に係わる線的な調査である。調査区の幅は２m～５m、長さは450mになる(第30図)。平成６年度に実施した国道345号線沿いの第１次調査区も、県営ほ場整備事業に伴うもので、水路設置に係わる線的な調査であった。面的な調査は実施されておらず、第１次・第２次調査区、及び県教育委員会で実施した立ち合い調査区(平成５年度)以外の部分については、現状保存が計られている。これまでの調査で検出された主な遺構は、立ち合い調査時に検出された溝跡ＳＤ１と井戸跡ＳＥ２のみである。広範な遺跡内に、建物や井戸跡等の遺構群が集中するブロックが存在することは推測できるが、遺跡の性格他の詳細を知るだけの資料は得られていない。以下、今回の調査の作業工程と経過を略記しておく。

平成７年６月20日、北目長田遺跡の調査と並行する形で調査を開始した。まず、重機を導入して水路部分の表土を除去した。次に、土の状態を確認しながら遺構検出のための面整理を行った。８トレンチより開始し、９・10・11・13・12トレンチの順で調査を進めたが、遺構・遺物は極めて希薄であった。写真撮影を主とした記録作業を行って、７月19日に調査を終了した。



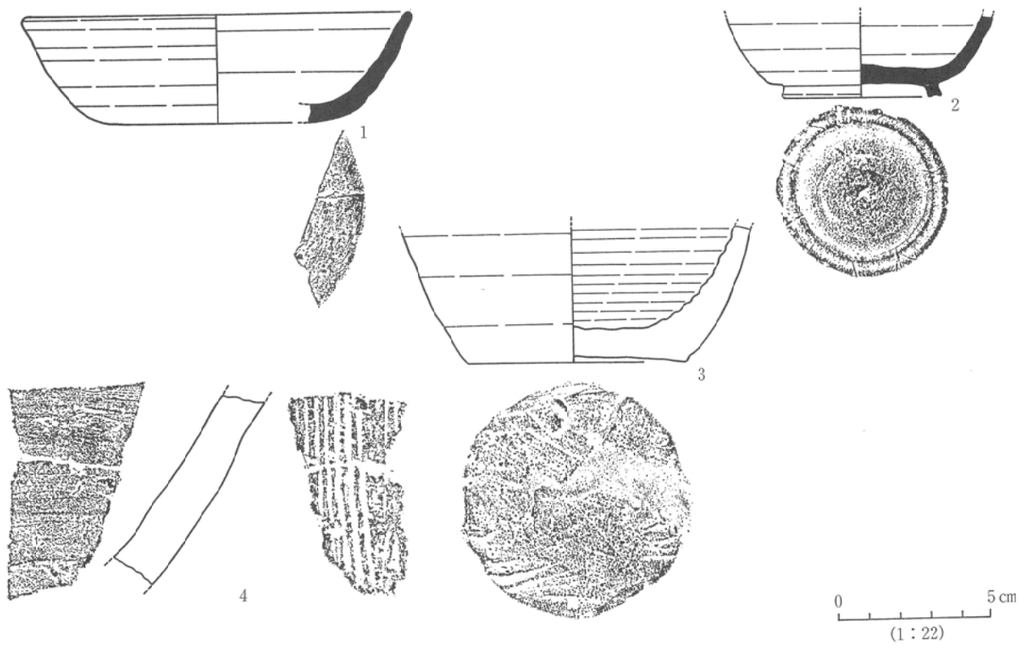
第30図　橇待遺跡調査概要図(S=1：2,000)

2　検出された遺構と遺物

橇待遺跡は試掘調査や、平成５年度の排水路対象の調査で井戸跡や溝跡などの若干の遺構が検出されている。これらは地山層に達する深度が比較的浅い微高地の地点に限られ、土壙や柱穴など遺構群が集中するいくつかのブロックが存在すると推測されている。今次の調査は国道345号の南側に設置する排水路地区を対象に実施されたことから、遺構はピットが６基と整理箱１箱の遺物が検出されたにすぎない。これらは遺構群が集中するブロックからはずれたことによるものと考える。しかし、遺跡を覆う包含層からは第31図にある遺物が数点出土した。第31図１・２は須恵器の坏である。１は底部の切り離しを回転篦切りとし、器面にロクロ痕を明瞭に残す。底部から口縁にかけて急激に立ち上がる。２は高台付坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切りとし付高台としている。３は赤焼土器の甕底部である。底部の切り離しを静止糸切りとし、やや底部が上がる。４は珠洲系陶器の擂鉢である。10条の擂り目が確認できた。時期は10世紀中頃から中世と幅の広い時期である。

3　まとめ

排水路設置に係る長さ450m、幅２m～５mという線の調査であるため遺跡の性格や内容については不明である。包含層の精査からは遺跡としての立地条件となる自然堤防の微高地は確認されなかった。遺跡の範囲は国道より北側へ縮小されるものと考える。



第31図　橇待遺跡出土遺物

Ⅴ　総　括

本書は、平成７年度県営ほ場整備事業（高瀬川地区）に係る北目長田遺跡と橇待遺跡の緊急発掘調査の成果をまとめたもので、両遺跡は平成６年度にも調査（第１次）が実施されている。その成果は以下の通りである。

北目長田遺跡では３～４グループにまとまる畝条の溝跡に重複する土壙と建物跡の存在が確認されている。遺跡の時期は出土遺物から９世紀前葉から中葉としてとらえ、遺構の組成から３段階の変遷をたどると検証している(註１)。これらは各遺構出土の土器群から動向を探り、時期を考慮にいれた遺構の変遷を明示している。しかし、建物跡については畝状の溝跡の下面から検出されたため、建物跡としての構成が困難であった。また、畝跡では真北方位をとる一群を古、やや東に振れる一群を新と判断しており、重複関係から３ないし４時期の変遷が辿れるとしている。あとでもふれるが特異な検出例として製塩土器の出土がまとまりをもって焼土や木灰の炭化物と共に確認されており、標高５m内外の立地条件のなかで製塩活動が行われていることを示唆している。そのほかでは土壙や溝跡、柱穴等から出土した板材や柱根の樹種鑑定、C14年代測定、火山灰分析等の理科学分析を実施し遺跡の年代や性格の考証を行っている。

橇待遺跡の調査は事前の立会調査（平成５年度実施）で井戸跡や溝跡等の遺構と共に須恵器や赤焼土器が検出している。１次調査では排水路設置部分という線に限った調査で、遺跡の範囲を確認する調査であった。その結果では遺構は見られなかったが、包含層とした表土下からは平安時代の土器類が検出された。試掘調査とトレンチ調査を合わせた結果から、東西460m、南北280mという広範囲の広がりの中に遺構群の集中する箇所が４ないし５カ所ほど存在するものと推測している。今次の調査も事業計画による排水路部分に限定した調査であったことから、遺構は建物跡として組み合わすことができなかったピットのみの検出である。遺跡縁辺部分であったことで明確な遺跡内容を示すことが出来なかった。現国道345号より北側の地域に遺跡本体が存在しているものと推測できる。

ここでは前年度の調査成果と今次の調査成果を合わせ、北目長田遺跡を主にして遺跡の性格や検出遺構からの時期等をまとめ、考察とする。

北目長田遺跡はその遺跡範囲が117,600㎡という東西に長く広がった遺跡で、庄内高瀬川の右岸となる自然堤防上に存在する。調査は１次・２次合わせて面調査区では7,100㎡、線となる調査区4,120㎡の計11,220㎡である。遺跡範囲の約9.5%であり一割にも満たない調査面積である。このことは橇待遺跡でも云えることでもあるが遺跡の立地条件が沖積地の中の微高地であることや、高瀬川等の自然堤防上に存在していることがいえる。本遺跡から南東半径2.5km圏内に所在する大坪遺跡や石田遺跡、宅田遺跡など、高瀬川流域の両岸に所在する遺跡は同様な条件下にある。庄内地方の最上川以北沖積平野部は最上川を主とし

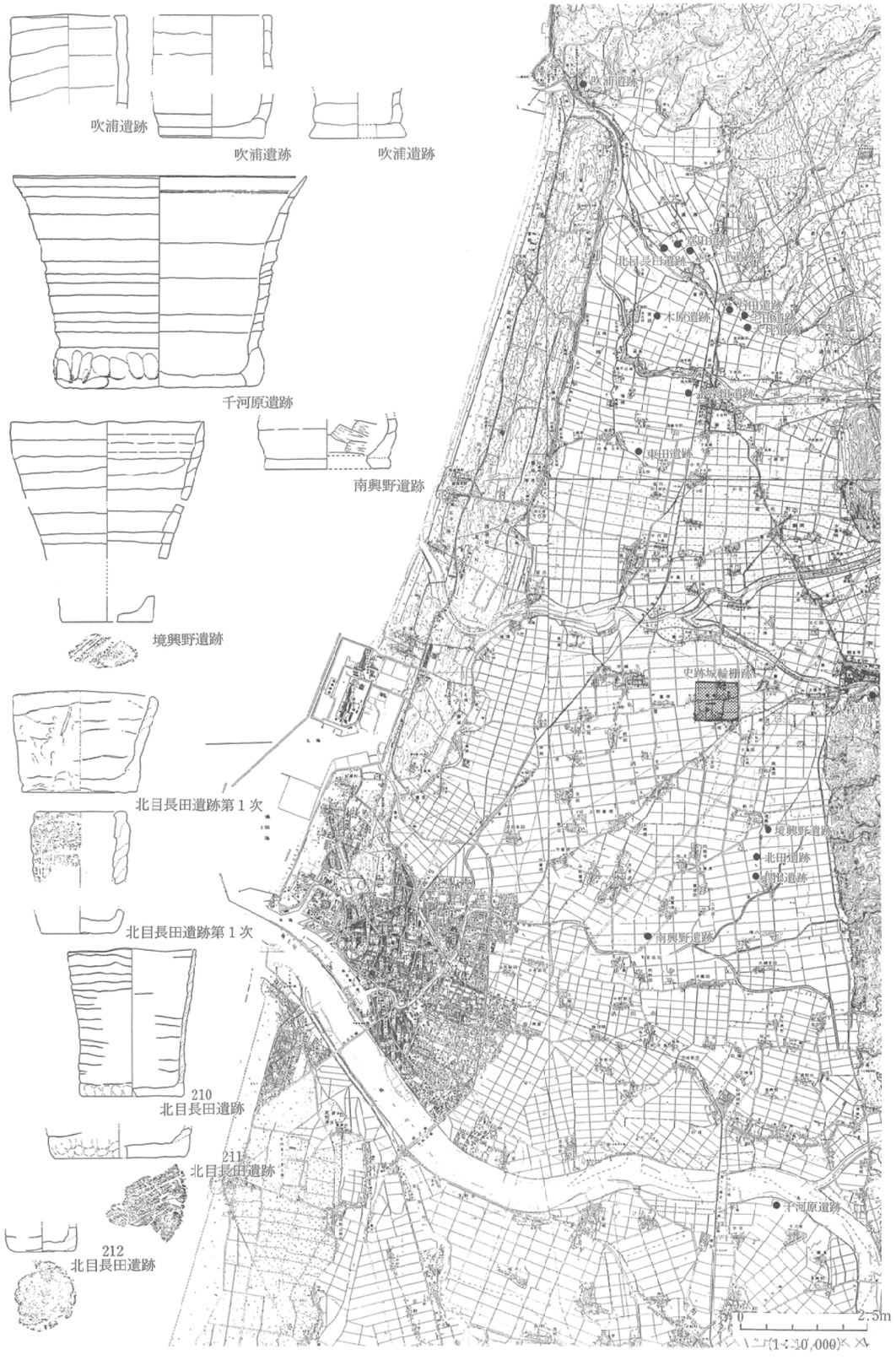
て、東方の出羽山地や、鳥海山からの中小河川による土砂の流入によって形成されている。遺跡の分布もこれら比較的高い自然堤防や微高地に居住域としていることによる。そして、各遺跡内には居住域として条件が整った微高地域が数カ所集合して遺跡に認定されたものと考える。

遺構内からは40箱の出土があった。遺物の総数は14,071点を数え、その75％が赤焼土器で須恵器は15％、土師器・黒色土器が4％、製塩土器5％で、そのほかは陶磁器・珠洲系陶器・刀子・土錘・砥石である。これらの遺物は遺構との性格や時期に関わりを示し、本遺跡や周辺の遺跡に示唆を示す。以下に遺構の性格と営まれた時期について推測を記す。

調査で検出された遺構は掘立柱建物跡２棟、土壙184基、溝状遺構396条、性格不明遺構6基、そのほか建物跡に結びつかなかったピット多数が検出された。建物跡は１次調査では確認できなかったが、今次の調査では梁行が三間以上、桁行四間以上から七間となる大型の建物跡で母屋的な構造を呈している。柱の跡は径40～60cmと大きくしっかりとした建物跡である。ＳＢ１建物跡は東西棟となり、柱穴内からの出土土器(171及び図化出来なかった他の柱穴より出土した坏形土器)により9世紀第４四半期に当てられる。ＳＢ２建物跡は南北棟で、ＥＢ37Ｔ柱穴から出土した128の坏形土器により9世紀第２四半期に比定される。そして、建物跡の周辺には土壙や溝跡が取り囲み、居住と生産域が存在する。土壙内出土遺物や溝跡出土遺物は、その組成から営まれた性格や時期が窺える。第28・29図には遺構内出土土器組成図を示した。また第３章５では土師器から石製品までを実測図と共に土器については製作技法や器形等の特徴を示し類別した。類別は時期等の年代観を現すものと考えるが、出土遺物は総じて９世紀中頃から10世紀中頃を主とした時期の年代が当てられる。以下に土壙及び溝跡の時期を伴出土器により推測する。

土壙は形態や規模等で４類に類別した。覆土からは供膳形態の坏や煮沸・貯蔵形態を呈する甕・鍋が出土した。Ａ類の土壙は円形または隅丸方形を呈し、長径が１ｍ前後のやや小形の土壙である。出土した土器は、赤焼土器の坏ではいびつな器形を呈する内面黒色化した22、口唇が外反する赤焼土器坏の137及び直立する111である。これらの特徴から時期は10世紀第２四半紀に比定される。Ｂ類の土壙は隅丸方形を呈し、長軸が２ｍ前後する中形の土壙である。赤焼土器の坏が多く出土し、その特徴は体部が丸みをもち、口縁で外反するものや、直立するものがある。時期は10世紀第１四半期に比定される。特異なものとしては210・211の製塩土器がこの類別した土壙から出土している。Ｃ類は長軸が２ｍ以上をこえる大型の土壙で須恵器の出土が顕著である。須恵器は底径に対し口径が、１：２となり、均整のとれた器形を呈している。出土量も多く、本遺跡性格の特徴を表している。ＳＫ321土壙の覆土１層には火山灰の粒子が堆積している。降灰以前の遺構と判断され、時期は９世紀第２四半紀と考える。Ｄ類の土壙は長軸が５ｍ内外を測る長楕円形を呈した大型の土壙で遺物の出土量は大形にしては少ない。貯蔵形態の須恵器や赤焼土器の甕が出土し、炭化物ブロックなども含み遺構の機能が窺える。時期は９世紀第３四半期と考える。

溝状遺構は調査グリッドから４ブロック（Ａ～Ｄ区）に構成されることや、走行方向に



第32図　庄内地方製塩土器出土遺跡・製塩土器実測図

よって５類に類別した。各溝跡覆土中からは溝跡埋没の過程で土器類が廃棄または流れ込んでいる。出土遺物のより各区の時期を検討する。各区の溝跡は１類から５類の走行方向が見え、南北方向の溝跡は切り合い関係から１－２－３類の順に変遷され、東西方向の４・５類の変遷は同時期と考える。１類はヘラ切り須恵器坏や甕が出土しており、９世紀第３四半期に考える。2類はＳＤ927溝跡から出土した須恵器壷(88)により９世紀第４四半期と考える。３類は糸切りの赤焼土器坏や同甕により10世紀第１四半期に当てられる。３類とした溝跡からは製塩土器の破片が多く出土している。４・５類はいびつな器形をした糸切りの赤焼土器坏や小型の甕が出土しており、観察により時期は10世紀第２四半期と考える。

本遺跡の出土遺物で注目されるものとしては第１次調査でも出土しているが、製塩土器があげられる。遺構内出土土器破片数の６％で、第１次調査では総出土遺物数の23％の出土である。

山形県海岸部に面する庄内地方平安時代の土器製塩について注目された最初は新潟県との境を接する鼠ケ関遺跡（註２）である。製鉄跡と共に土器製塩跡が確認され、多数の製塩土器片が出土している。また、鶴岡市由良遺跡でも製塩土器片が表採され、庄内地方の海岸砂丘地には製塩を営む遺跡が存在する可能性があることを示唆している(註３)。その後県営ほ場整備事業等に伴う発掘調査で酒田市境興野遺跡（註４）、余目町千河原遺跡（註５）、遊佐町吹浦遺跡（註６）等の製塩土器を出土する遺跡が次々に確認され、平野部や海岸に対面する台地上の遺跡で製塩が営まれていたことが報告されている。しかし、これらの遺跡は現在の海岸から直線距離で約３～21㎞内陸部に位置し、製塩生産遺跡としては問題が残る。当時の古環境（標高５ｍ位までが海岸に近い潟湖の存在を推定して）からは海水を運び、土器による煮沸の食塩採取は判断が難しい。第１次生産作業としては海岸のそばで、しかも燃料としての灌木が容易に手にいれることができる場所でないと作業が出来ないのではと考える。上記の遺跡にすれば土器煎熬（せんごう）という工程を為したものかもしれない。海水からの製塩の工程が採鹹（さいかん）（濃縮）と煎熬（せんごう）（煮沸）に大きく分けられるがその行為はいつに始まったのかは不明である。ここでは近藤義郎の論拠（註７）に従い庄内地方の製塩遺跡について以下に述べる。

現在までに製塩土器が確認されている遺跡は17箇所を数える。第23図には庄内地方の中で集中して出土している最上川以北の飽海郡平野部の土器を図示した。いずれも12分の１の縮図である。明瞭な輪積み痕を残し、内面にはヘラによる成形痕を施すものもある。海水による食塩採取作業から考えれば、大形の土器は海岸部での煮沸工程、小形のものは集落に持ち帰った濃縮塩を後の時代で云う焼塩または固形塩の製造工程用のものと考える。このことは本遺跡ＳＫ67Ｔ土壙での検出が藁灰と共に検出され、二次加熱が認められたことによる。境興野遺跡や、千河原遺跡では出土しなかったが、本遺跡や吹浦遺跡では大形と小形が出土している。また、大形土器の口縁や底部の内面に剝離が認められることや、検出時に小さく破片となって出土することから、長時間の連続加熱が土器に影響を与えたものと考える。推論とはなるが製塩を行う集団の存在が窺える。８世紀前半頃に出羽移民

として北関東や東海・北陸・東山道等の民が柵戸として配置され、田地開拓と共に生活上必要であった塩分の摂取が不可欠となり開拓作業と同時に海岸での煮沸製塩作業が行われたと考える。開拓と製塩という作業が年間の生活サイクルの中でどの様に営まれたのかが課題として残る。柵戸として移民した人々が、在地の蝦夷といわれる人々と融和しながら移民時に自分達が持ってきた製塩技術と、在地の人たちの製塩技術が取り組まれ、庄内地方での製塩が確立したものと考える。

註１　阿部明彦・佐藤善春　「北目長田・橇待遺跡発掘調査報告書」
山形県埋蔵文化センター調査報告書第24集　1995
註２　加藤　孝　「古代鼠ケ関址調査報告　考古学上の考察」　庄内考古学９　1969
註３　川崎利夫　「日本土器製塩研究　６山形県」近藤義郎編　青木書店　1994
註４　川崎利夫・安部　実　「境興野遺跡」　山形県埋蔵文化財調査報告書第46集　1981
註５　野尻　侃・佐藤庄一　「千河原遺跡」　山形県埋蔵文化財調査報告書第80集　1984
註６　渋谷孝雄　「吹浦遺跡第１次」　山形県埋蔵文化財調査報告書第82集　1984
註７　近藤義郎　「土器製塩の研究」　青木書店　1984
「土器製塩の話」　考古学研究103～107　考古学研究会　1979～1980

そのほか、石川県鹿島郡中島町教育委員会生涯学習課の室田久則課長・高田則晃主事・山本純也主事補・下村好美埋蔵文化財整理員には能登半島での製塩土器出土遺跡や、出土遺構等、詳細な指導を受けた。記して感謝申し上げる。また、参考となった遺構や、報告書等について教示いただいた。以下に参考文献として記す。

参考文献

中島町数育委員会　「ヤトン谷内遺跡　能登における古代製塩遺跡の調査」　1995
四柳喜章　「能登式製塩土器について-特に石川県穴水地方を中心に-」　若木考古87
国学院大学考古学会　1968
橋本澄夫　「古代能登塩に関する一試論」　論集日本原史　吉川弘文館　1985
近藤義郎　「日本土器製塩研究」青木書店　1994

そのほか多数の文献を教示いただいた。

報告書抄録

ふ り が な	きためながたいせき・そりまちいせきだいじはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	北目長田遺跡・橇待遺跡第２次発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第31集
編 集 者 名	野尻　侃・佐藤善春
編 集 機 関	財団法人　山形県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒999-31　山形県上山市弁天二丁目15番１号　TEL0236-72-5301
発 行 年 月 日	西暦1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北目長田 きためながた	山形県 やまがたけん 飽海郡 あくみぐん 遊佐町 ゆざまち 大字北目 おおあざきため 字長田 あざながた	6461	平成３年 度登録	39度 02分 28秒	139度 54分 00秒	19950508～ 19950811	7,920	県営ほ場整備事業 (高瀬川地区)
橇 待 そり まち	山形県 やまがたけん 飽海郡 あくみぐん 遊佐町 ゆざまち 大字北目 おおあざきため 字橇待 あざそりまち	6461	平成３年 度登録	39度 02分 19秒	139度 54分 16秒	19950620～ 19550719	1,500	

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
北目長田	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡２棟 土壙184基 溝状遺構396条	須恵器 赤焼土器 黒色土器 製塩土器 緑釉陶器(近江産・鳴海産) 龍泉窯系青磁 染付 刀子、土錘 紡垂車、下げ砥石	南北に走行する溝跡群と土壙を多数検出。 製塩土器が土壙内よりまとまって出土し、量的にも多い。
橇 待	集落跡	平安時代	ピット	須恵器 赤焼土器 珠州系陶器	遺跡縁辺部のため遺構遺物の検出状況が希薄であった。

図　　版

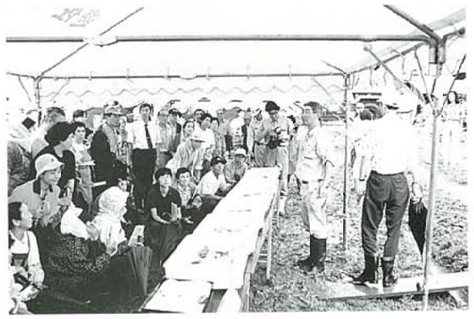
北目長田遺跡近景（西から）

遺構検出状況（北から）

3 トレンチ面整理作業(南から)

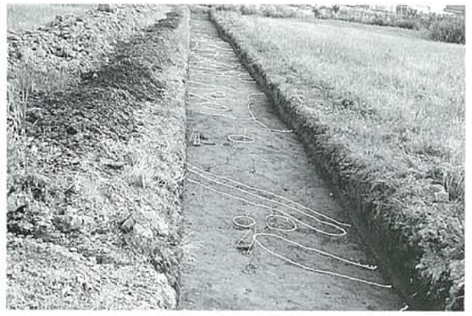
遺構精査状況(南から)

SK321記録作業(西から)



調査説明会(南から)

調査区東側断面基本層序(西から)



2 トレンチ遺構検出状況(東から)

4 トレンチ遺構検出状況(東から)

5 トレンチ遺構検出状況(北から)

6 トレンチ遺構検出状況(東から)

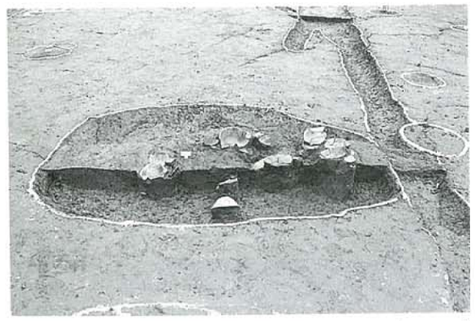
SB 1 検出状況(東から)

SB 1 完掘状況(東から)

SB 2 検出状況(南から)

SB 2 他掘り下げ状況(北から)

SK399遺物出土状況(南から)



SK337土層断面(南から)

SK337遺物出土状況(南から)

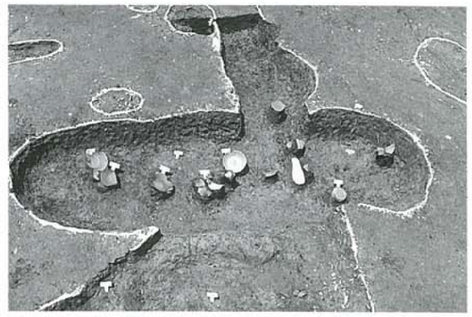
SK340土層断面(東から)

SK340遺物出土状況(東から)

SK321土層断面(南から)

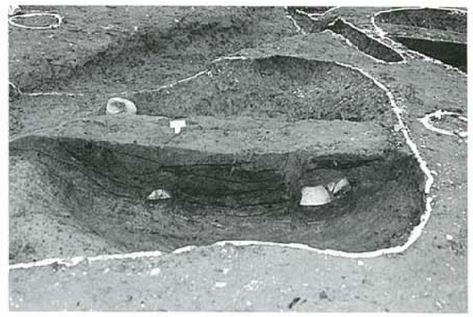
SK321遺物出土状況(南から)

SK455・SD453・SK454土層断面(東から)

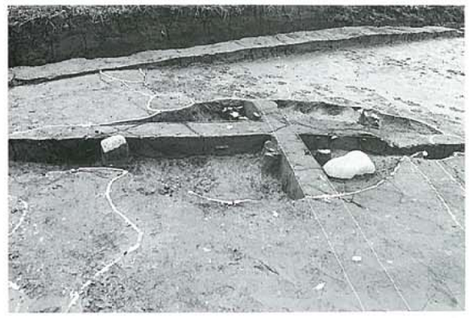


NK455・SD453・SK454遺物出土状況(東から)

SK370土層断面(北から)



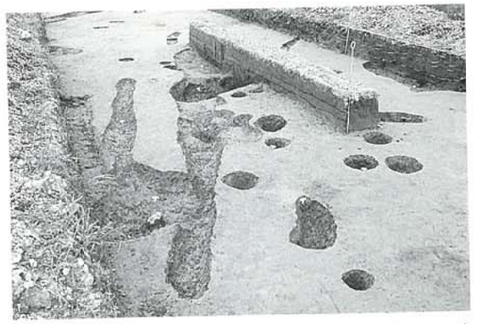
SK314土層断面(南から)



SK50土層断面(南から)

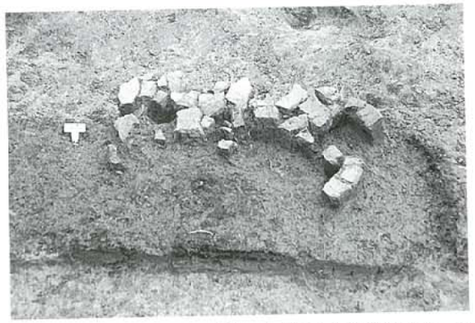
SK50遺物出土状況(西から)

4 T— 6 グリッド遺構検出状況(西から)



4 T— 6 グリッド遺構掘り下げ状況(西から)

SK67T土層断面(東から)



SK67T製塩土器出土状況(西から)

4 T— 6 遺構完掘状況(西から)

SD387土層断面(北から)

SD387遺物出土状況(北から)

SD927土層断面(南から)

SD336土層断面(北から)

SD562完掘状況(南から)

SD408他遺物出土状況(南から)

SD708遺物出土状況(南から)

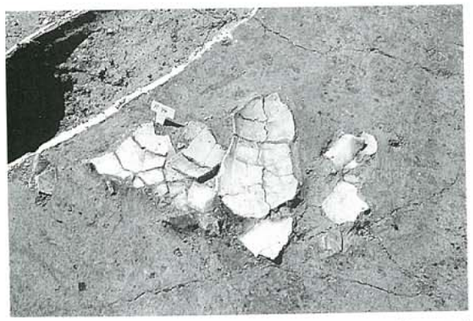
SD464土層断面(東から)

SK100T遺物出土状況(西から)

RP 2 須恵器大甕土状況(南から)

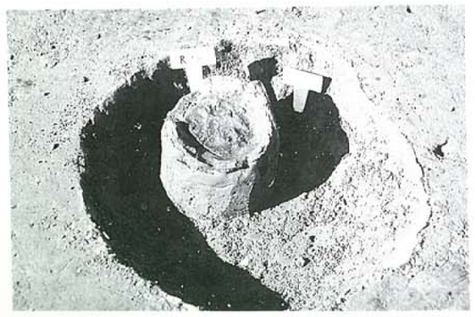
SD408遺物出土状況(南から)

RP66～70赤焼土器坏出土状況(南から)



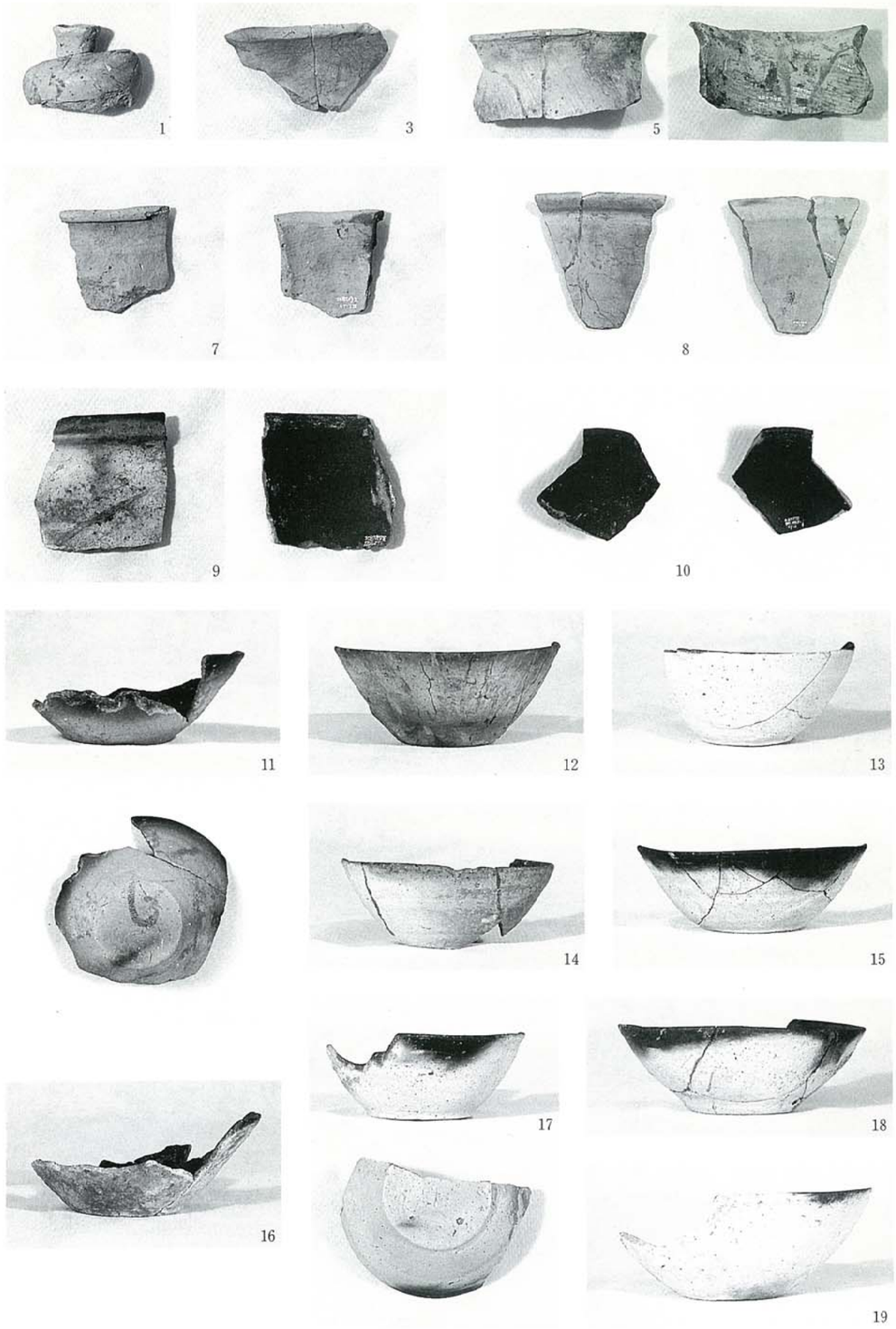
RP94赤焼土器甕出土状況(東から)

RP104黒色土器坏出土状況(東から)



RP118製塩土器出土状況(西から)

RM116刀子出土状況(北から)



20

21

23

22

25

24

26

35

36

27

28

32

30

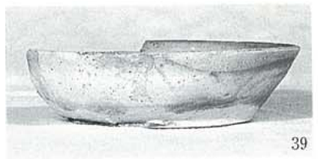
31

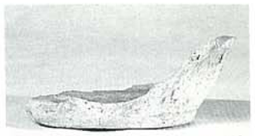
33

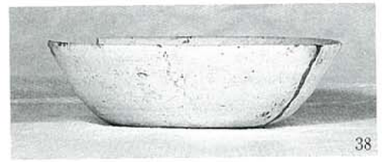
34

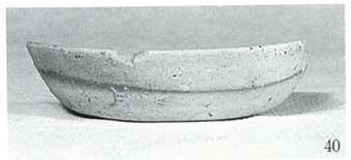
37

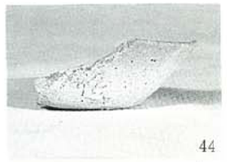
29


39

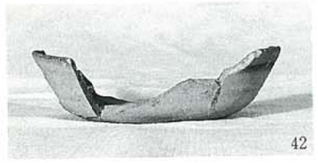

43


38


40


44

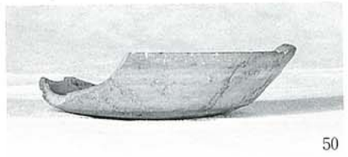
41

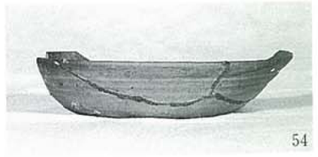

42

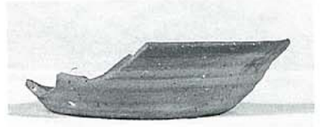
45

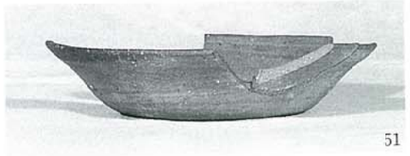
46

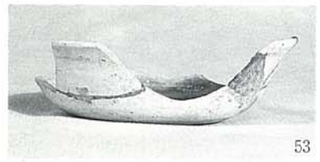
48


50


54

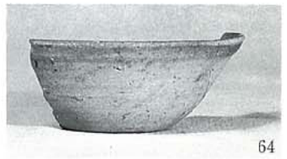

52

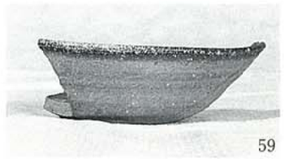

51

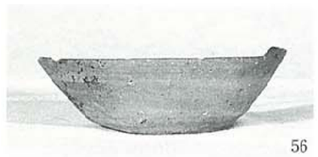

53

55

58


64


59


56

57

65

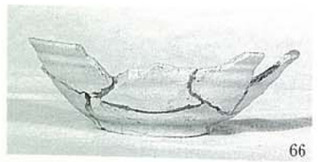
63

60

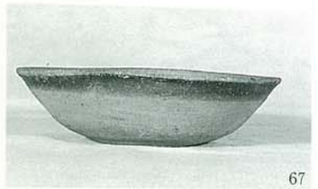
62

61

69


66

70


67

47

73

68

71

72

74

75

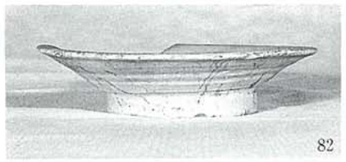
78

76

77

83

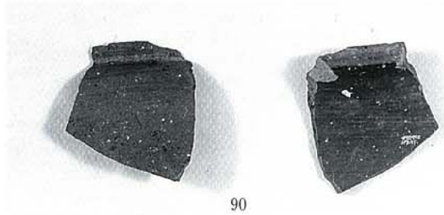
86


82

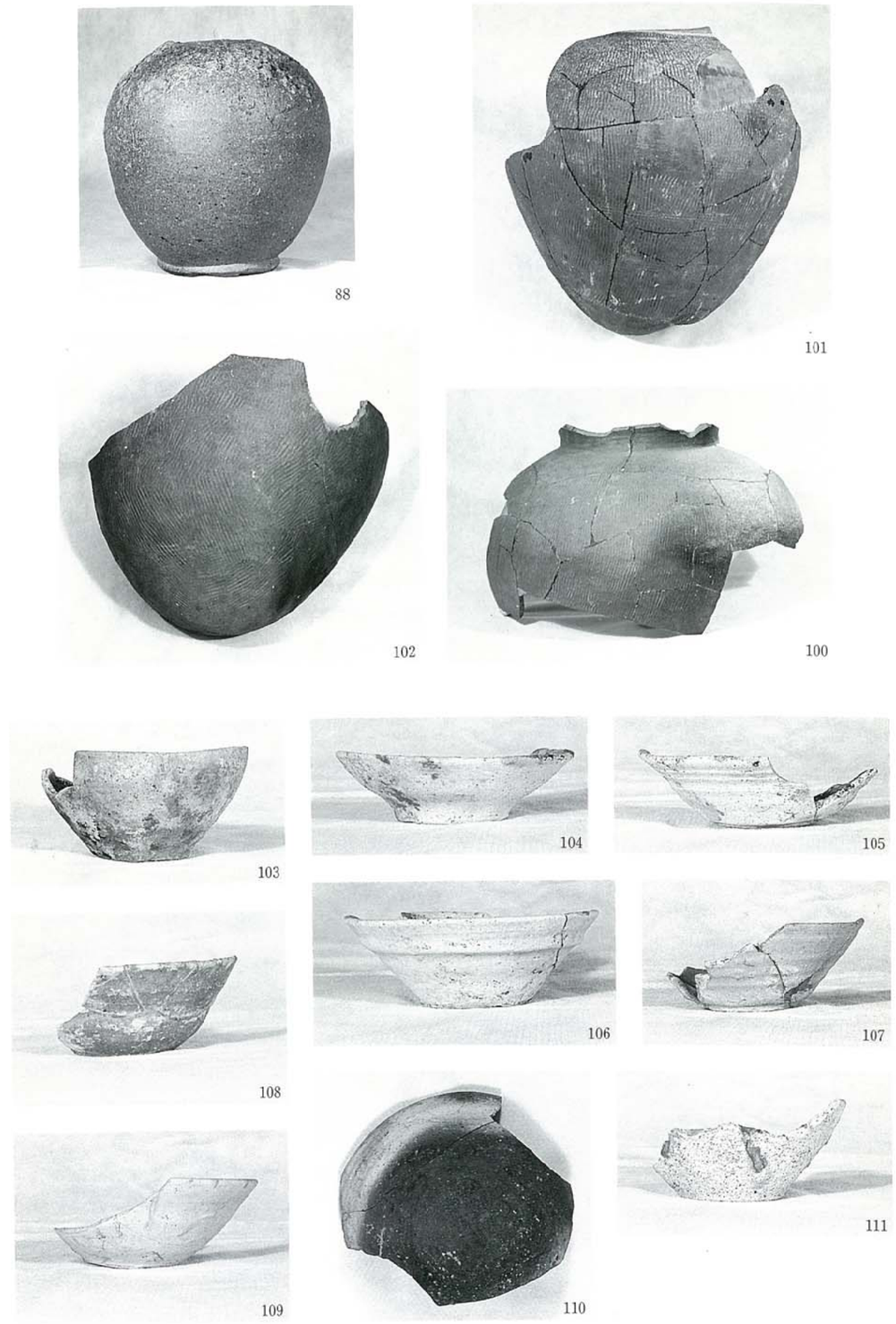
84

87

85


90

89
91
96
92
99
97
98
93
94
95


88
101
102
100
103
104
105
106
107
108
109
110
111

112

113

114

115

116

117

118

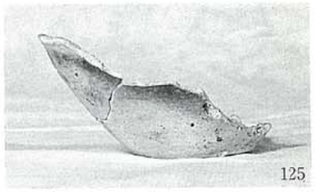
119

122

120

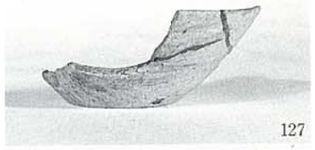
121

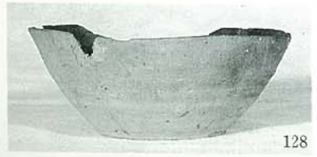
124

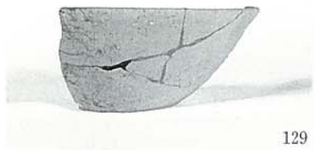

125

123

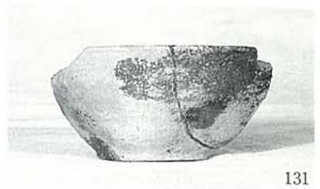
126

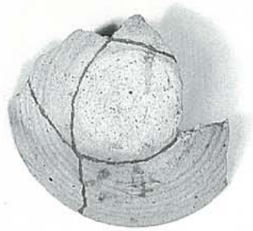

127


128


129

130


131



132

133

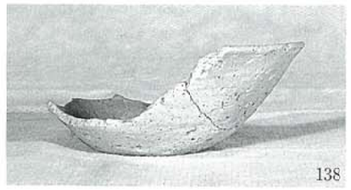
134

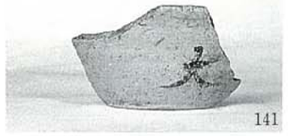
135

137

136

139

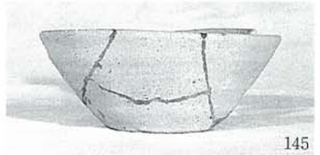

138


141

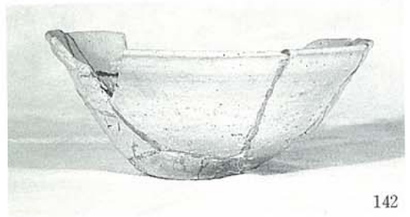
140

143

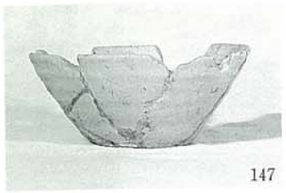
144


145

146


142

152

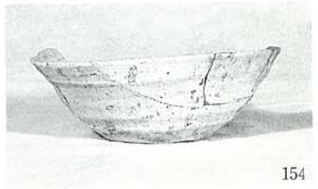

147

149

148

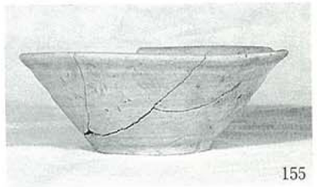
150

151


154

153

160

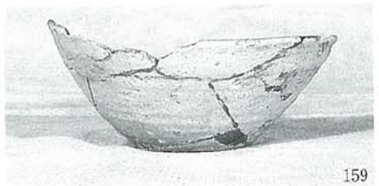

155

156

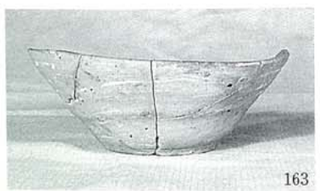
157

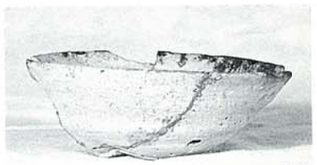
161

158


159

162


163


164

165

167

169

168

170

171

172

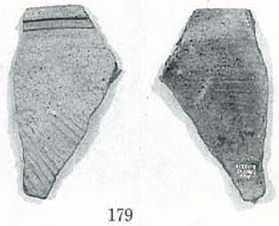
166

174

173

176

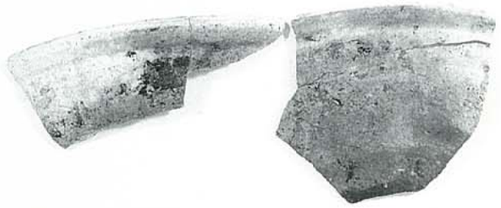
178

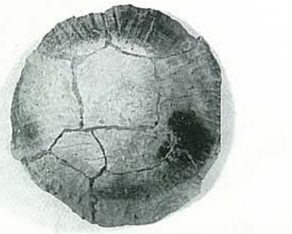

179

175

186

175

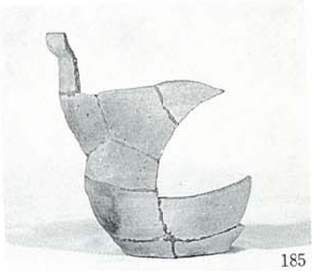

177



182

180

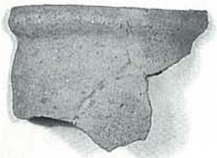
181


185

188

187

197


190

191

192

196

193

194

195

198

183

184

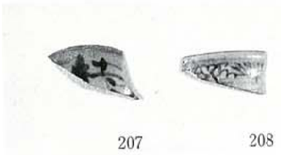
189

199

200

204 205

206


207 208

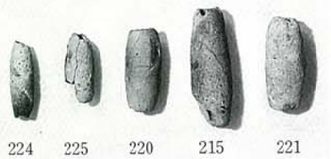
209

211

213 214

218 217 216

212

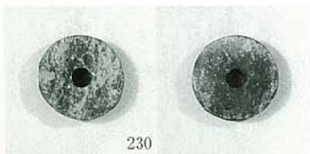

224 225 220 215 221

222 226 219 223 227

229

228

237


230

238 241 235

231

232

243

242

236

244

233

234

239

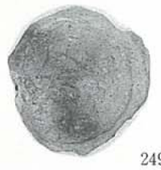
245

240

246

248

247


249

250

251

263

252

253

267

264

268

258

303

291

265

266

274

275

281

272

289

8トレンチ面整理作業(北から)

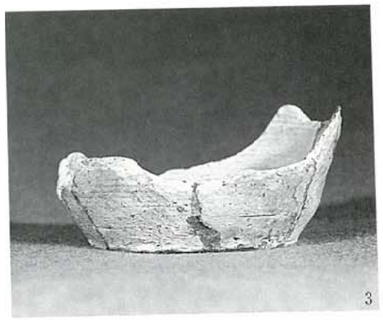
8トレンチ粗掘状況(南から)

12トレンチ粗掘状況(南から)

12トレンチ遺構検出状況(西から)

1

2



3

4

橇待遺跡調査状況・出土遺物

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第31集

北目(きため)長田(ながた)遺跡
橇待(そりまち)遺跡

第2次発掘調査報告書

平成8年3月15日　印刷
平成8年3月31日　発行

発行　山形県埋蔵文化財センター
印刷　藤庄印刷株式会社

1996 — 584